

史 跡 石見国分寺跡
県史跡 石見国分尼寺跡

平成14年度～17年度 市内遺跡発掘調査報告書



2006年 3月

島根県浜田市教育委員会

正誤表

浜田市教育委員会 2006『史跡 石見国分寺跡・県史跡 石見国分尼寺跡』の3頁

表1 国府地区遺跡概要を下記表に差し替えてください。

番号	遺 跡 名	種 別	概 要
1	石見国分寺跡	寺院跡	塔跡・柱穴・瓦・誕生仏
2	石見国分尼寺跡	寺院跡	柱穴・瓦・誕生仏
3	石見国分寺瓦窯跡	瓦窯跡	平窯・瓦
4	前場紙漉遺跡	散布地	須恵器・土師器・陶磁器・瓦
5	浜田ろう学校敷地古墳	古墳?	石棺・鉄器?・消滅
6	奈古田窯跡	須恵器窯跡	須恵器
7	大平浜遺跡	散布地	土師器・須恵器
8	越井遺跡	散布地	土師器・須恵器
9	大平遺跡	散布地	弥生～中世・黒曜石・消滅
10	川向遺跡	散布地	弥生～中世・木偶・環状石斧
11	伊甘神社脇遺跡	集落跡	縄文～中世・柱穴
12	千足遺跡	集落跡	縄文～中世
13	多陀寺遺跡	散布地	須恵器・土師器
14	中ノ古墳	古墳?	横穴式石室?
15	横路遺跡（土器土地区）	集落跡	中世・掘立柱建物跡・墓
16	横路遺跡（原井ヶ市地区）	集落跡	古代～中世・掘立柱建物跡・井戸跡
17	笛山城跡	城跡	曲輪・堀切
18	恵ヶ平遺跡	散布地	須恵器・土師器・杭列
19	下府魔寺跡	寺院跡	塔心礎・金堂跡・瓦
20	仕切遺跡	散布地	弥生～中世・掘立柱建物跡
21	半場口古墳群	古墳群	1号墳・箱式石棺 2号墳・横穴式石室
22	片山古墳	古墳	方墳・横穴式石室
23	東遺跡	散布地	須恵器
24	古市遺跡	集落跡	古代～中世・掘立柱建物跡・井戸跡
25	宮宅山遺跡	散布地	須恵器・土師器・瓦
26	上府遺跡	集落跡	弥生～中世・柱穴
27	新延遺跡	散布地	須恵器
28	八反原城跡	城跡	曲輪・堀切・土塁
29	上府八反原窯跡	石見焼窯跡	1920年代～1965年操業・丸物窯
30	上条遺跡	祭祀遺跡	銅鐸2個体出土
31	浜伊場遺跡	散布地	土師器・須恵器・石鐵
32	菖蒲迫遺跡	散布地	磨製石斧・須恵器

表1 国府地区遺跡概要



石見国分寺跡（西側より）



⑥調査区須恵器出土状況



③調査区下層遺構



⑦調査区盛土上面柱穴群



⑦調査区柱穴・盛土断面



西側の盛土状況



石見国分尼寺跡



石見国分寺の瓦（国分寺・尼寺・瓦窯跡）

序

浜田市教育委員会では石見国府跡などの重要遺跡を確認するため、国庫補助事業を受けて平成11年度から市内遺跡の分布調査・試掘確認調査を実施しています。国指定史跡石見国分寺跡内に所在する淨土真宗 金蔵寺の庫裡改築に伴い石見国分寺跡の確認調査を実施しました。また、県指定史跡石見国分尼寺跡の隣接地の確認調査も実施しました。

浜田市には石見国分寺跡、同国分尼寺跡を始め多くの遺跡が存在しています。所在地は確定していませんが石見国府も存在したと考えられており、古代から中世にかけての石見地域の中心地であります。当教育委員会では、これらの文化財の解明を行うための発掘調査を実施しており、いずれも貴重な調査結果を得ております。

今回の調査の結果、奈良時代の国分寺の中心建物は確認できませんが、古代の瓦から中世・近現代まで幅広い時代の遺物が確認されました。石見国分寺・尼寺を中心とした国府地区の歴史を考える上で重要な調査となりました。

本書はこれらの調査結果と国府地区の遺跡を末長く後世に伝え、学校教育や生涯学習などひろく活用するための基礎資料としてまとめたものです。この資料が幅広く活用されることにより、文化財保護思想の普及、地域史研究への一助となることを願っております。

おわりに、調査を指導していただいた文化庁、島根県教育委員会及び関係諸機関に厚く感謝申し上げます。また、あらゆる面から調査に御協力いただきました金蔵寺及び地元の方々に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

平成18年3月

浜田市教育委員会

教育長 山田洋夫

例　　言

1. 本書は浜田市教育委員会が平成14年度から平成17年度にかけて国庫・県費補助を受けて実施した市内遺跡発掘調査事業の報告書である。事業は確認調査と関連遺物の整理作業を実施した。

2. 調査は以下の組織で行った。

調査主体 浜田市教育委員会教育長 竹中弘忠（～平成17年11月18日）

　　山田洋夫（平成17年11月19日～）

調査指導 玉田芳英（文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門 文化財調査官）平成16年度

　　桑原韻一（浜田市文化財審議会長・島根県文化財保護指導員）平成14年度

調査指導 島根県教育委員会 文化財課

調査員 樋原博英（浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係 主任主事）

事務局 浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係

　　文化振興課長 桑田 巍（平成14・15年度）高松政美（平成16年度）

　　山根 稔（平成17年度）

文化財係長 横田良宏（平成14年度）神山真治（平成15・16年度）

　　原 裕司（平成17年度）

主任主事 原 裕司（平成14～16年度）

主任主事　瀧山恵子（平成17年度）主事 堀 智美（平成17年度）

3. 調査にあたり協力および従事していただいた方々は次のとおりである。

調査協力 朽津信明（東京文化財研究所）、岩崎仁志（山口県埋蔵文化財センター）

　　内田律雄・林 健亮（島根県埋蔵文化財調査センター）

調査参加 池田又次郎、岩本秀雄、掃守進、小林正徳、佐々木五郎、佐々木定実、

柴田亜希子、竹藤和憲、田淵義明、中田洋子、中田貴子、原有里、半場利定、

藤本淳子、村上美佐子、宮本徳昭、山田ゆう子、吉賀久雄、吉田安男

4. 基準点は昭和60年に石見測量設計が当時の発掘調査に際し設置したものを使用した。挿図の方位は磁北と真北で示しており、磁北は真北から約7°西へ振った方向である。

5. 出土遺物、実測図及び写真是浜田市教育委員会に保管してある。

6. 本書の執筆編集は樋原が行った。なお、第3章 第1節の石塔の設立経緯と銘文・経石の解説は堀が行った。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 国府地区の遺跡と歴史的環境	2
第1節 概要	2
第2節 周辺の遺跡	8
第3章 石見国分尼寺跡の確認調査	15
第1節 遺跡の概要	15
第2節 調査の概要	24
第4章 石見国分寺跡の確認調査	27
第1節 遺跡の概要	27
第2節 調査の概要	33
第3節 遺物	50
第5章 総括	
第1節 瓦からみた石見国分寺跡・尼寺跡	61
第2節 石見国分尼寺跡について	69
第3節 石見国分寺跡について	70
第4節 石見国分寺・尼寺の変遷	72

第1章 調査に至る経緯と経過

浜田市東部の国府地区には石見国府が存在したとされるが、その所在は確定されていない。開発事業に伴い、国府地区でも古市遺跡・横路遺跡など古代から中世の大集落が確認されたため、今後の開発に対応するためにも石見国府跡も含めて国府地区の遺跡の把握が必要になった。このため、浜田市教育委員会では国庫補助事業を受けて国府地区的試堀確認調査、分布調査を平成11年度より実施し、平成13年度にこれまでの調査報告書を刊行した。

平成13年度より国指定史跡 石見国分寺跡にある金蔵寺の庫裡改築計画が具体化し、石見国分寺跡と工事計画との調整が必要となった。このため、石見国分寺跡の調査へ重点を移し、平成14～17年度に確認調査を実施した。平成14年度は史跡指定地内、平成15年度は史跡隣接地の確認調査を実施した。

平成16年度には金蔵寺の庫裡改築工事が始まり、史跡指定地内の庫裡を解体した跡地の確認調査を実施した。調査結果を元に金蔵寺・文化庁・島根県教育委員会との協議を行い、確認された遺跡面に影響を与えないように、土壤改良を行い庫裡が新築されることになった。平成17年度は史跡隣接地の確認調査とこれまでの調査報告書作成を行った。

また、平成14年度に島根県指定史跡石見国分尼寺跡の指定地に隣接して水路が設置されるため、土地所有者と協議し確認調査を実施した。平成17年度には、石見国分尼寺跡にあった国分寺本堂が解体され景観は大きく変化した。

4ヵ年にわたり石見国分寺跡の確認調査を実施したが、国分寺の中心施設（金堂・回廊など）は確認できなかった。これまで金蔵寺周辺の調査は行われていたが、今回指定地内の確認調査を実施したことにより、遺跡の残存範囲を大まかに確認することができた。

また、これまでの石見国分寺跡・石見国分尼寺の表採品、金蔵寺所蔵の石見国分寺出土品など関連資料の調査も実施し、今後の石見国分寺・尼寺研究のための基礎資料の作成を行った。

平成14年度調査

石見国分尼寺跡確認調査 平成14年7月15日～7月26日 浜田市国分町225番地8 他

石見国分寺跡確認調査 平成14年11月15日～12月20日 浜田市国分町1527番地 他

平成15年度調査

石見国分寺跡確認調査 平成16年2月12日～3月1日 浜田市国分町402-1番地

平成16年度調査

石見国分寺跡確認調査 崖面調査区 平成16年5月24日～6月11日

庫裡跡調査区 8月30日～10月22日 浜田市国分町1527番地 他

文化庁 玉田調査官 調査指導 10月7日

平成17年度調査

石見国分寺跡確認調査 平成17年6月8日～6月13日 浜田市国分町402-1番地

平成14～17年度調査報告書作成

第2章 国府地区の遺跡と歴史的環境

第1節 概要

浜田市は石見地方と呼ばれる島根県西部地域のほぼ中央に位置する。この地域は山々が海岸付近までせまっており、河川河口部には沖積平野が広がる。

国府地区は浜田市の東部にあたり、遺跡は数としては少ないが、国指定史跡石見国分寺跡・県指定史跡石見国分尼寺跡などが所在する。古代から中世にかけての石見国の中心と考えられ「那賀郡伊甘郷」に属す。二級河川の下府川によって形成された小規模な平野とその北側に発達した砂丘地と台地からなる。前述の国分僧寺・尼寺は北側の台地上にあるのに対して、国指定史跡下府庵寺塔跡や市指定史跡片山古墳は南側の平野附近にある。

現在、旧石器時代の遺跡は知られておらず、縄文土器片が伊甘神社脇遺跡・千足遺跡で見つかっている。行政区では江津市に入るが周辺では波子遺跡が縄文時代中期以降の代表的な遺跡である。黒曜石の石器が浜伊場遺跡・黒曜石剥片が大平遺跡・川向遺跡で見つかっている。

弥生時代

伊甘神社脇遺跡・下府庵寺跡・古市遺跡・上府遺跡などで遺物が確認されている。川向遺跡では環状石斧や弥生時代終末の木偶が見つかっている。上条遺跡では大正時代に扁平紐式袈裟搏文銅鐸（III-1式）が2個体発見されている。江津道路建設に伴い周辺の調査が行われ、銅鐸の埋納坑の可能性がある穴が確認されている。

古墳時代

前期・中期古墳は確認されていない。中ノ古墳は横穴式石室と考えられる石組が残っている。半場口古墳群は箱式石棺の1号墳・横穴式石室の奥壁のみが残る2号墳があり、いずれも墳丘は不明である。片山古墳は外護列石を廻らす二段築成の方墳で、全長6.4m、幅約1.7mの無袖形の横穴式石室が開口している。住居跡は確認されていないが、川向遺跡や伊甘神社脇遺跡、江津市との境の砂丘地に位置する大平浜遺跡・越井遺跡では古墳時代～古代の須恵器・土師器が見つかっている。奈古田窯跡は須恵器窯跡で、中心部分は烟により破壊されていると考えられる。

古代

白鳳時代末には金堂と塔のみの法起寺式に近い伽藍配置の下府庵寺が建立され1町四方（約109m）の寺域が想定されている。石見国府跡は横路地区・伊甘神社脇遺跡・上府遺跡の3地点での推定地調査が行われたが、所在は確定されていない。石見国分寺は現在の金蔵寺境内にあり、1町程の寺域が想定されていた。塔跡の一部などが調査され、白鳳期の銅造誕生釈迦仏立像が出土している。国分寺塔跡から約100m南西側には、石見国分寺瓦窯跡が位置している。また、国分寺から約200m北西の谷を隔てた前場紙漉遺跡でも須恵器・瓦の散布が見られる。石見国分尼寺は現在の国分寺境内と考えられ、「比丘尼所」などの地名が残っている。石見国分寺と同文の軒瓦、白鳳期の銅造誕生釈迦仏立像が出土している。

中世以降

古代からの国府は新たに「府中」として発展したと考えられる。府中の範囲は現在の上府・下府を中心とした地域と推定され、平安時代末から南北朝期まで栄えたと考えられる。古市遺跡・横路遺跡・伊甘神社脇遺跡・上府遺跡・下府庵寺跡・仕切遺跡・千足遺跡などで構造・遺物が確認されている。現在の河口付近の川向遺跡や砂丘地である大平遺跡・上府（国府）八幡宮下の宮宅山遺跡

からも遺物が確認されている。笛山城跡・八反原城も含め、広い範囲で中世遺跡が分布している。また、益田氏との関連が深く、伊甘山安国寺、伝御神本（益田）氏三代の墓、白口大明神、上府（国府）八幡宮がある。また、明治23年の地籍図を見ると、現在の上府町三宅の平野には縦長の条理の跡が見られる。

なお、江戸時代末から昭和40年代頃までこの地域では「石見焼」と呼ばれる陶器と瓦が大量に焼かれていた。窯跡が現在も各地で残存しており、宇野町長東坊師窯跡（大正時代頃・丸物窯）・上府八反原窯跡（大正時代終わり～昭和40年操業・丸物窯）が発掘調査され、近現代の資料も蓄積されている。

番号	遺跡名	種別	概要
1	石見国分寺跡	寺院跡	塔跡・柱穴・瓦・誕生仏
2	石見国分寺瓦窯跡	瓦窯跡	平窯・瓦
3	石見国分尼寺跡	寺院跡	柱穴・瓦・誕生仏
4	前場紙漉遺跡	散布地	須恵器・土師器・陶磁器・瓦
5	浜田ろう学校敷地古墳	古墳？	石棺・鉄器？・消滅
6	奈古田窯跡	須恵器窯跡	須恵器
7	大平遺跡	散布地	弥生～中世・黒曜石・消滅
8	川向遺跡	散布地	弥生～中世・木偶・環状石斧
9	多陀寺遺跡	散布地	須恵器・土師器
10	中ノ古墳	古墳？	横穴式石室？
11	伊甘神社脇遺跡	集落跡	縄文～中世・柱穴
12	千足遺跡	集落跡	縄文～中世
13	横路遺跡（土器上地区）	集落跡	中世・掘立柱建物跡・墓
14	横路遺跡（原井ヶ市地区）	集落跡	古代～中世・掘立柱建物跡・井戸跡
15	笛山城跡	城跡	曲輪・堀切
16	竹ヶ平遺跡	散布地	須恵器・土師器・杭列
17	下府庵寺跡	寺院跡	塔心礎・金堂跡・瓦
18	仕切遺跡	散布地	弥生～中世・掘立柱建物跡
19	半場口古墳群	古墳群	1号墳・箱式石棺 2号墳・横穴式石室
20	片山古墳	古墳	方墳・横穴式石室
21	古市遺跡	集落跡	古代～中世・掘立柱建物跡・井戸跡
22	宮宅山遺跡	散布地	須恵器・土師器・瓦
23	上府遺跡	集落跡	弥生～中世・柱穴
24	新延遺跡	散布地	須恵器
25	八反原城跡	城跡	曲輪・堀切・土塁
26	上条遺跡	祭祀遺跡	銅鐸2個体出土
27	大平浜遺跡	散布地	土師器・須恵器
28	越坪遺跡	散布地	土師器・須恵器
29	浜伊場遺跡	散布地	土師器・須恵器・石鐵
30	菖蒲追遺跡	散布地	磨製石斧・須恵器
31	東遺跡	散布地	須恵器
32	上府八反原窯跡	石見焼窯跡	1920年代～1965年操業・丸物窯

表1 国府地区遺跡概要

主要参考文献

横路遺跡（土器上地区）

浜田市教育委員会 1997 『横路遺跡（土器上地区）』
柳原博英 1998「鳥根県古市道路・横路道路と出土陶磁」

『貿易陶磁研究』No.18 日本貿易陶磁研究会
浜田市教育委員会2002

『浜田市遺跡詳細分布調査 一国府地区I-』

枕ヶ平遺跡・千足遺跡・仕切遺跡・半堀口古墳群

浜田市教育委員会2002

『浜田市遺跡詳細分布調査 一国府地区I-』

川向遺跡

浜田市 1973『浜田市誌』下巻

浜田市教育委員会 2000 『川向遺跡』

浜田市教育委員会2002

『浜田市遺跡詳細分布調査 一国府地区I-』

伊甘神社脇遺跡

鳥根県教育委員会 1979 『石見国府推定地調査報告II』
浜田市教育委員会 2000 『川向遺跡』

多陀寺遺跡

浜田市教育委員会2002

『浜田市遺跡詳細分布調査 一国府地区I-』

中ノ古墳

国府町文化財審議会 1963 『国府町の文化財』

横路遺跡（原井・市地区）

浜田市教育委員会 1998 『横路遺跡（原井・市地区）』
柳原博英 1998「鳥根県古市道路・横路道路と出土陶磁」

『貿易陶磁研究』No.18 日本貿易陶磁研究会

笛山城跡

鳥根県教育委員会 1980 『石見国府推定地調査報告III』

下府庵寺跡

鳥根県教育委員会 1980 『石見国府推定地調査報告III』

佐々木徳三郎 1981「下府庵寺塔跡の宝塔碑文について」

『亀山』第8号 浜田市文化財愛護会

前島己基 1986「山陰における初期造寺活動の一側面」

山本清先生喜寿記念論集「山陰考古学の諸問題」

同記念論集刊行会

浜田市教育委員会 1990 『下府庵寺跡発掘調査概報』

浜田市教育委員会 1992 『下府庵寺跡』

浜田市教育委員会 1993 『下府庵寺跡』

片山古墳

W・ガウラント 1899 『日本古墳文化論』

渡辺貞幸「ガウラント氏と山陰の古墳」

『八雲立つ風土記の丘No.37、39、40』1979・1980

大谷晃二 1993「片山古墳測量調査報告」

『下府庵寺跡』浜田市教育委員会

古市遺跡

浜田市教育委員会 1992 『古市遺跡発掘調査概報』

原裕司1992「浜田市・古市遺跡の遺物」

『松江考古』第8号 松江考古学談話会

浜田市教育委員会1995

『伊士干地区画整理事業に伴う 古市遺跡発掘調査概報』

柳原博英 1998「鳥根県古市道路・横路道路と出土陶磁」

『貿易陶磁研究』No.18 日本貿易陶磁研究会

柳原博英 2001

『浜田・古市遺跡における中世前半の土器について』
『松江考古』第9号 松江考古学談話会

宮宅山遺跡

鳥根県教育委員会 1980 『石見国府推定地調査報告III』
本報告書に採取品を掲載

上府遺跡

鳥根県教育委員会 1980 『石見国府推定地調査報告III』
石井悠1992

『浜田市・石見国府推定地出土の中国製陶器』
『松江考古』第8号 松江考古学談話会

新屋遺跡

浜田市教育委員会2002

『浜田市遺跡詳細分布調査 一国府地区I-』

八反原城跡

桑原彰1995「中世の宇野村をさぐる
－小字名は歴史を語る－」

『亀山』第22号 浜田市文化財愛護会

本報告書に周辺探取品を掲載

上条遺跡

直良信夫 1932「石見上条府発見銅鐸の出土状態」
『考古学雑誌』22-2』

のち直良信夫1991「近畿古代文化論考」木耳社に再録
東京国立博物館 1981

『東京国立博物館開阪日記 弥生遺物篇（金属器）』

鳥根県教育委員会・朝日新聞社 1997

『古代出土文化展 - 神々の国 悠久の遺産-』

鳥根県教育委員会 2001「上条遺跡」

『恵良遺跡 墓々炭窯跡 上条遺跡』

水戸（三戸）神社跡（上条古墳） 立女道跡

一般国道9号線江津道路建設予定地内

埋蔵文化財免振調査報告書IV』

前場紙漉遺跡

浜田市教育委員会2002

『浜田市遺跡詳細分布調査 一国府地区I-』

石見国分寺跡・石見國分尼寺跡

朝倉賛實1919「金成寺由緒記」

野津左馬之助1925「鳥根縣史」第5卷 鳥根縣内務部

野津左馬之助1938「石見國分寺」『国分寺の研究』下

考古学研究会

国府町文化財審議会 1963 『国府町の文化財』

山本清 1968 「第四回 律令制度の時代」

『新修 島根縣史』通史編一 鳥根県

桑原韻一1986「金成寺境内（石見國分寺跡）発掘に
たずさわって』『郷土石見』第17号

石見郷上研究懇話会

前島己基 1986「山陰における初期造寺活動の一側面」

山本清先生喜寿記念論集「山陰考古学の諸問題」

同記念論集刊行会

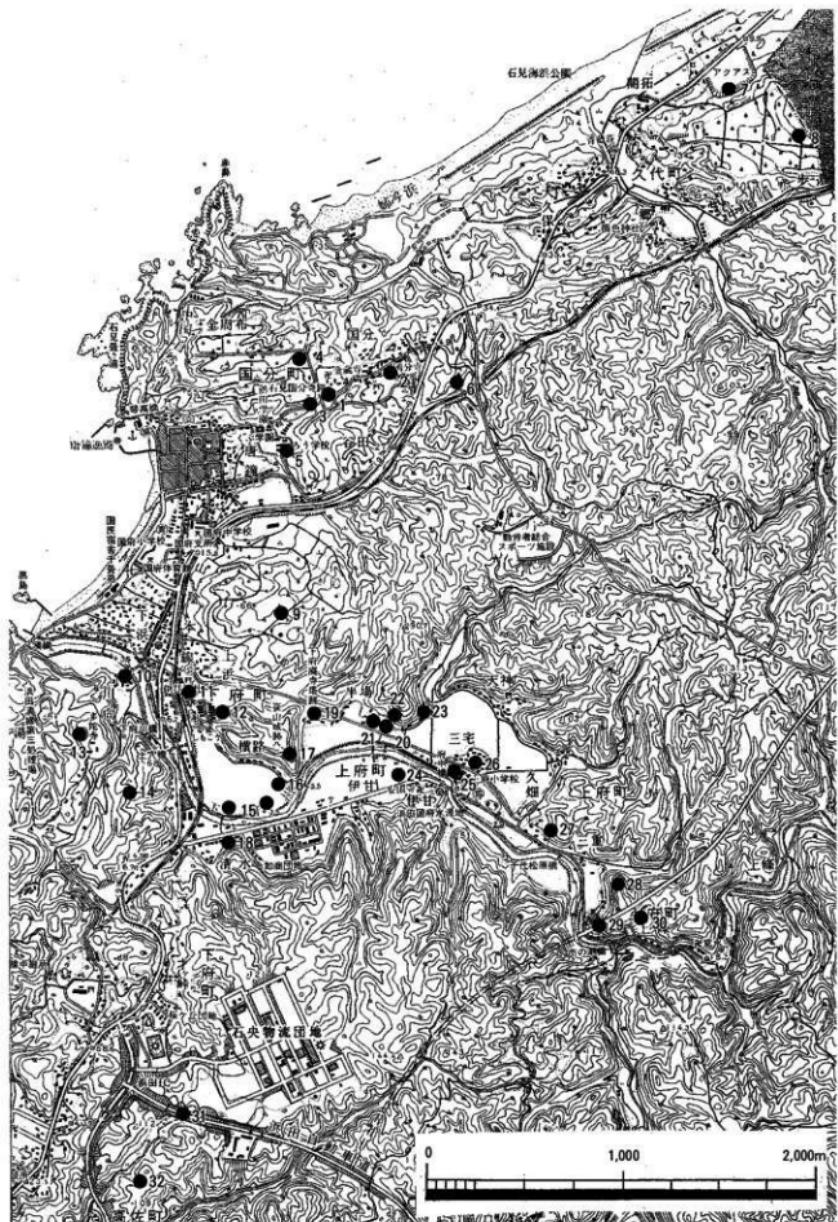
内田律雄 1986「石見國分寺瓦について」

山本清先生喜寿記念論集「山陰考古学の諸問題」

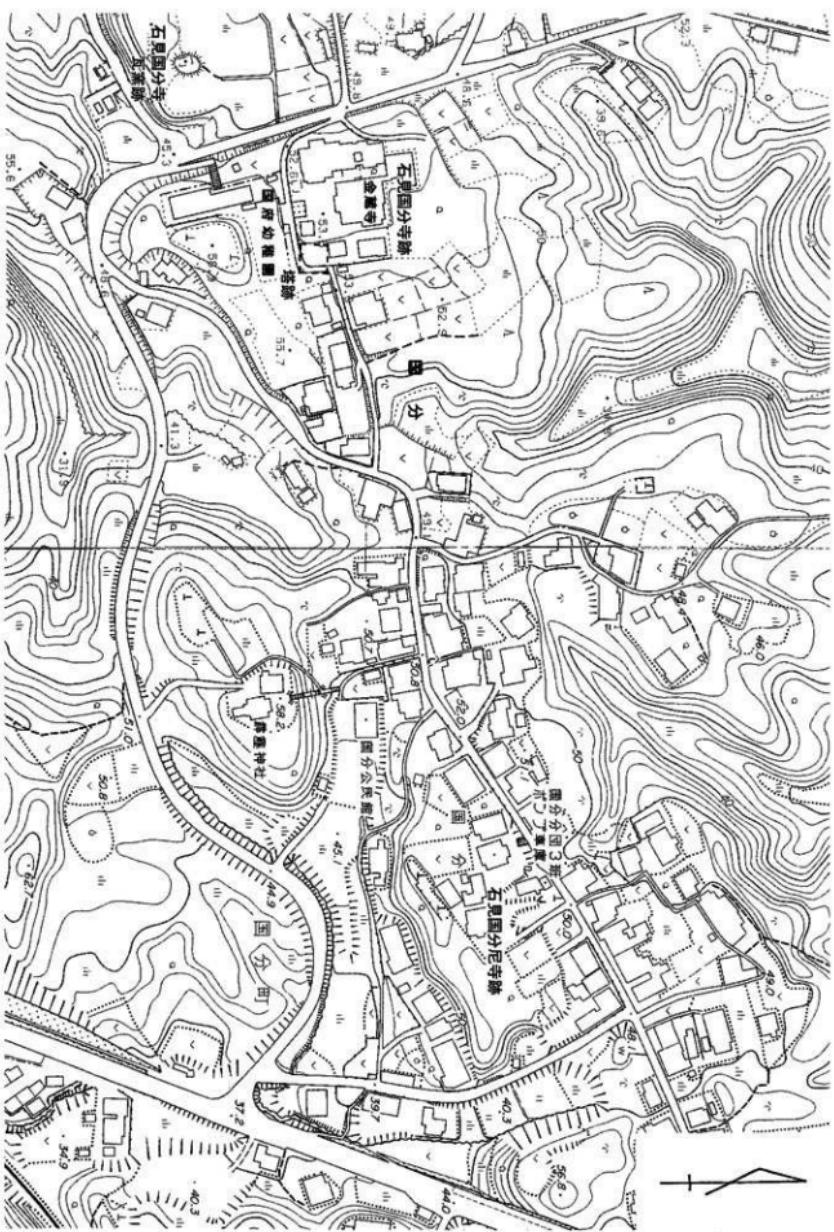
同記念論集刊行会

浜田市教育委員会1987「石見國分寺跡免振調査概報」

- 『季刊文化財』第58号「鳥根県文化財愛護協会」
 浜田市教育委員会 1989 「石見国分寺跡第1期調査概報」
 原裕司 1991 「石見国分寺と誕生仏」
 『亀山第17号』浜田市文化財愛護会
 鳥根県立博物館 1990 「鳥根の文化財・仏像彫刻篇」
 内田律雄・江川幸子 1997 「石見」
 『新修 国分寺の研究』第7巻 補遺 吉川弘文館
- 石見国分寺瓦窯跡**
 近藤正1967「古代・中世における手工業の発達
 (6) 山陰」
 『日本の考古学VI』歴史時代(上) 河出書房新社
 大川清 1972 「日本の古代瓦窯」
 石井悠 1981 「石見国分寺瓦窯跡」
 「鳥根県大百科事典」上巻 山陰中央新報社
 内田律雄 1986 「石見国分寺瓦窯跡」
 「鳥根県生産遺跡分布調査報告書」鳥根県教育委員会
 内田律雄 1986 「石見国分寺瓦について」
 山本清先生喜寿記念論集「山陰考古学の諸問題」
 同記念論集刊行会
- 奈古田窯跡**
 川原和人 1980 「石見の須恵器窯跡」
 『さんいん古代史の廻遊(下)』山陰中央新報社
- 大平山遺跡**
 江津市教育委員会・浜田市教育委員会 1988
 『大平山遺跡群調査報告書』
 江津市教育委員会・浜田市教育委員会 1990
 『大平山遺跡群発掘調査報告書』
- 越坪遺跡**
 江津市教育委員会・浜田市教育委員会 1988
 『大平山遺跡群調査報告書』
- 浜伊場遺跡**
 日本道路公团広島建設局・鳥根県教育委員会 1985
 『浜伊場遺跡』『中国横断自動車道建設に伴う
 埋蔵文化財発掘調査報告書II』
- 菖蒲迫遺跡**
 谷部の綾斜面で須恵器(所在不明)と磨製石斧片が
 採取されている。
- 石見国府推定地**
 国府推定地については諸説あり、主なものを記す。
 野津左馬之助1925 「鳥根縣史」第5巻 鳥根縣内務部
 野津左馬之助1934 「石見國府址」
 「鳥根縣史跡名勝天然紀念物調査報告」第6輯 鳥根縣
 斎藤茂吉1935 『柿本人麿捕註篇』岩波書店
 丸茂武重「山陰道の国府」「国学院雑誌」63-2・3
 国学院大學
 矢富熊一郎1964 「柿本人麻呂と鴨山」
 益田郷上史矢富会
 山本清 1968 「第四節 律令制度の時代」
 『新修 鳥根県史』通史編一 鳥根県
 国府町文化財審議会 1963 「国府町の文化財」
 大島幾太郎1970 「郡賀都史」旧郡賀都教育会
 藤岡謙二郎1969 「国府」吉川弘文館
 山本清1972 「第四章 古代(二)」『仁摩町誌』仁摩町
- 鳥根県教育委員会 1978 「石見国府推定地調査報告I」
 鳥根県教育委員会 1979 「石見国府推定地調査報告II」
 鳥根県教育委員会 1980 「石見国府推定地調査報告III」
 石井悠 1980 「石見国府跡を推理する」
 『石見国府跡発掘調査からー』
 『季刊文化財』第38号 鳥根県文化財愛護協会
 石井悠 1982 「謎の石見国府」
 『えとのす第17号』 新日本教育図書
 国立歴史民族博物館1988 「国立歴史民俗博物館研究報告
 第10集 共同研究「古代の国府の研究」」
 石井悠 1986 「古代石見国の役所跡について」
 山本清先生喜寿記念論集「山陰考古学の諸問題」
 同記念論集刊行会
 荣田精1987 「幻の石見国府跡と国分寺」
 『龜山第14号』浜田市文化財愛護会
 国立歴史民族博物館1989 「国立歴史民俗博物館研究報告
 第20集 共同研究「古代の国府の研究」(続)」
 見島俊平1992 「馬の骨を探る」『郷土石見』No.31
 石見郷土研究懇話会
 桑原龍一 1995 「伊賀郷の歴史的背景」
 『伊賀上地区南北整理事業に伴う 吉市道路発掘調査概報』
 浜田市教育委員会
 石井悠 1996 「石見国」「国府一畿内・七道の様相一」
 日本考古学会三重県実行委員会
 宮本巖1996 「人蔵・文献考」「郷土石見」第41号
 石見郷土研究懇話会
 浜田市教育委員会2002
 『浜田市遺跡詳細分布調査 一国府地区 I -』
- 東遺跡**
 浜田市教育委員会2002
 『浜田市遺跡詳細分布調査 一国府地区 I -』
- 石見焼間連遺跡**
 鳥根県教育委員会2001 「石見焼間連遺跡調査報告1
 (飯田A遺跡・長東坊跡窯跡)」
 一般国道9号線江津道路建設予定地内
 埋蔵文化財発掘調査報告書V』
 鳥根県教育委員会2001 「石見焼間連遺跡調査報告2
 上府八反原窯跡(佐々木窯跡)」
 一般国道9号線江津道路建設予定地内
 埋蔵文化財発掘調査報告書VI』



第1図 国府地区周辺図・平成11年発行 番号は表1に対応



第2図 石見国分寺跡・石見国分尼寺跡位置図 (S=1/2,500)

第2節 周辺の遺跡

奈古田窯跡（第3図・1～5）

現状では周辺地形は大きく改変されており、遺物はほとんど採取できない。1～5は1973年に採取されていた資料で、溶着資料が含まれている。これまで7～8世紀の窯跡として紹介されていた（第2章 参考文献 川原1980）が、現存の遺物を見る限り、古墳時代後期の窯跡といえそうである。1は杯と壺類の口縁、2は高杯口縁部と内面が同心円叩きの壺片が溶着したものである。3は壺類の口縁部で、外面に4本以上の波状文が施される。4は瓶類の底部付近で、外面は格子状の叩き、内面は同心円叩きを一部ナデ消している。5は壺の肩部で外面は縦方向の平行叩きとカキメ、内面は同心円叩きの痕跡が残る。

古市遺跡（第3図・6～7）

平成5・6年に発掘調査が行われており、古代から中世の大規模な集落が確認された。中世前期には石見府中の中心拠点であったと考えられるが、中世後期には近くの安国寺との関連を想定させる木簡・卒塔婆・木製品などの遺物が見つかっている。6～7は古代から中世の遺物包含層から出土した瓦で中世の瓦の可能性がある。6は丸瓦の端部で外面には型痕のような面がつき、内面は布目痕が残るが、縁片部は大きくヘラで削られている。側端部が尖ること、布目が細かいことが古代の瓦と異なる特徴的な点である。7は両面に砂が付着する平瓦で凸面の繩叩き痕は確認できない。瓦の弧深が浅いため平瓦としては屈曲が弱いのが特徴的である。

多陀寺遺跡・生湯五輪塔（第3図・8～10）

古刹である多陀寺へ上の階段脇の平坦面、鐘つき堂周辺、その近くにある五輪塔群の周辺で瓦が採取できる。8・9は両面に砂が付着し、凹面には模骨状に凹凸が残る平瓦である。10は有段式丸瓦の段部で外面はナデ調整されるが、段側の外面上には深く叩かれた繩叩き痕がそのまま残る。内面は細かい布目痕が残り、側部は一度に削られる。

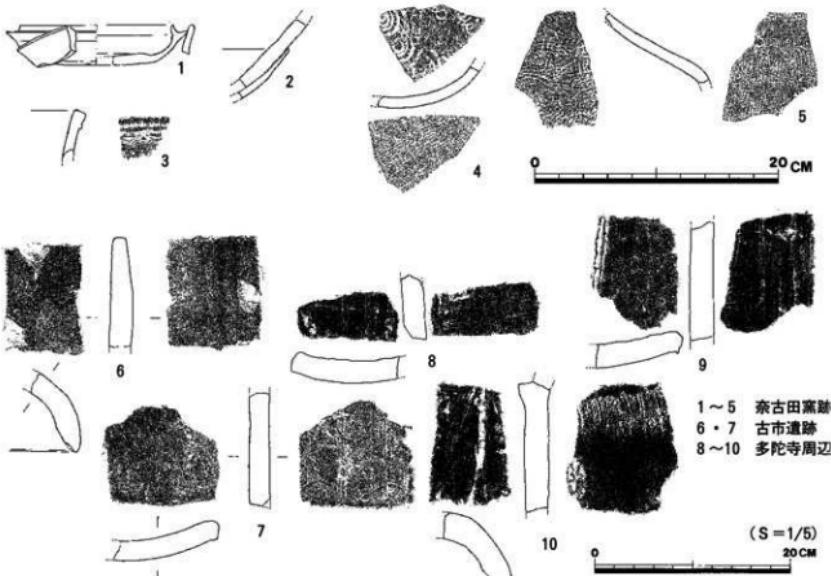
石見国分寺瓦窯跡（第4～8図）

昭和42年の農地改良工事で発見され、緊急調査が実施された。窯跡は石見国分寺跡の西側に隣接した丘陵地に所在する。焚口部分を含む全体の三分の一が失われていたが、調査後に島根県指定史跡に指定された。現状は埋め戻されて旧地形の残丘と覆屋根がある。

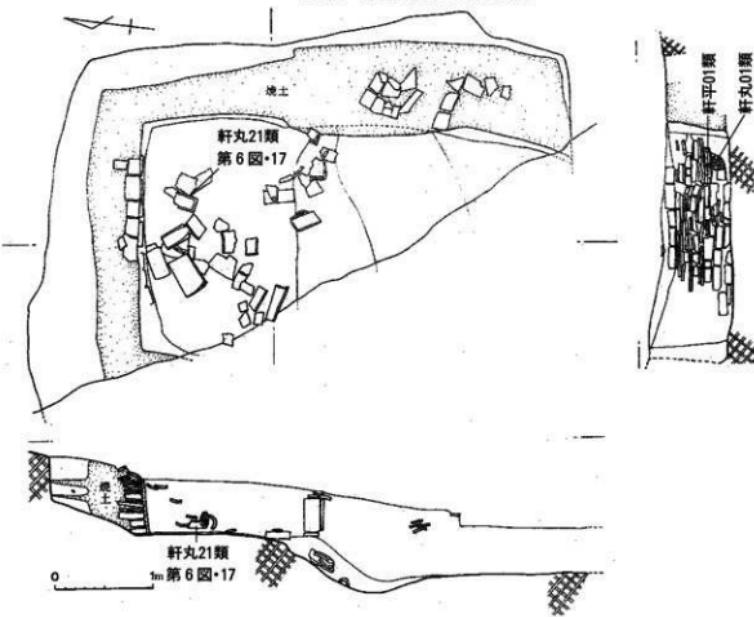
これまでに紹介された概要（第2章 参考文献参照）によると窯の構造は半地下式の無牀式平窯で推定全長は5mである。焼成室は幅2.4m、長さ1.5mで、床面は水平である。燃焼室は焼成室床面より60cm低くし、断面U字形に掘りこぼめた段によって分けられている。天井部は崩落していたが、スサ入りの粘土と瓦片により固められていたようである。焼成室の奥壁は下方に2～3段の磚を積み、上方は軒瓦を含む瓦片で構築されている。窯の側壁の一部にも瓦片が積まれている。

出土品は浜田市郷土資料館や市教育委員会に保管されており、石見国分寺の変遷を考える上で重要なため簡単な整理作業を行った。注記・ラベルには「石見国分寺窯跡」「焼成室天井」「焼成室天井部上面」「燃焼部（天井）」などがある。

窯の壁に用いられた軒瓦（軒瓦の分類は第35図を参照）は軒丸瓦01類（第5図11・12）、軒平瓦01類（第5図13～16）、02類である。11・12の軒丸瓦は横置きの一本作りである。15は側部に布端の痕跡が残り、一枚作りの平瓦を用いて軒平瓦を造っている。凸面は瓦当側を削り、狭端側は繩叩き痕をそのまま残す。スサの塊には直径5.3～5.9cm大の正円形の穴がみられるものがある。これは瓦質



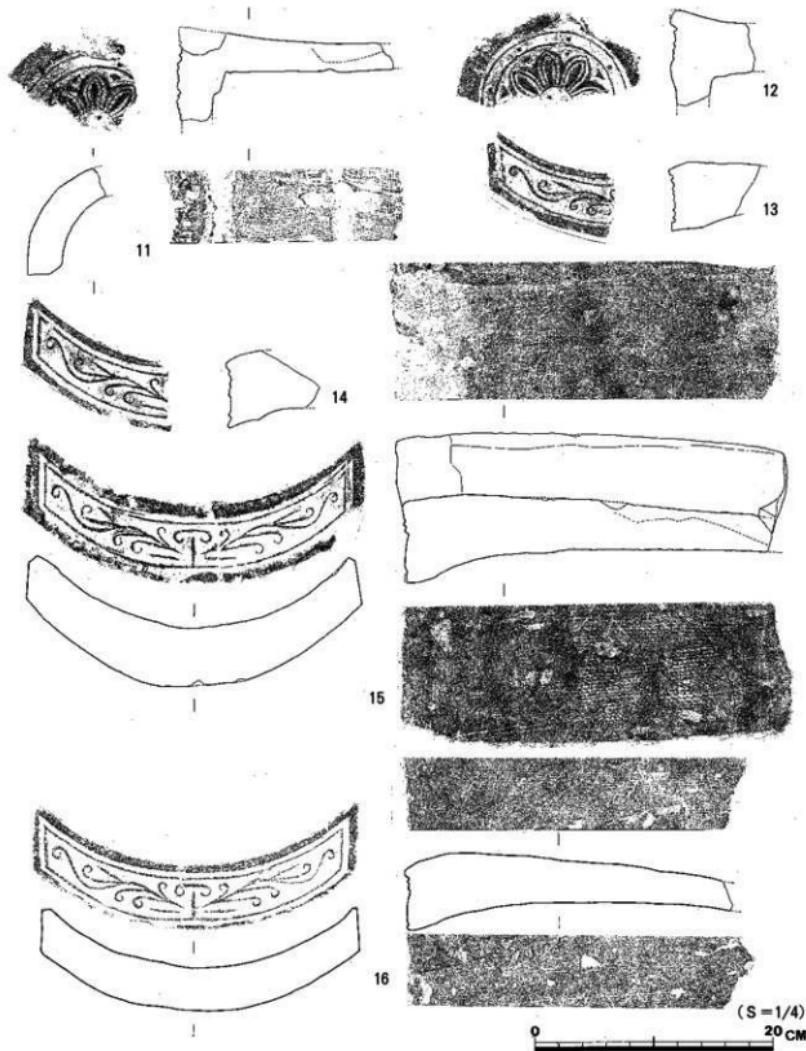
第3図 周辺遺跡出土遺物実測図



第4図 石見国分寺瓦窯跡実測図 『島根県生産遺跡分布調査報告書』より・一部加筆

の円筒形品で、燃焼室の還元炎を送る装置の可能性がある。窯の壁に使われた平瓦には、スサ入り粘土が付着し凹面端部に布端が残るもの（第8図・27）がある。

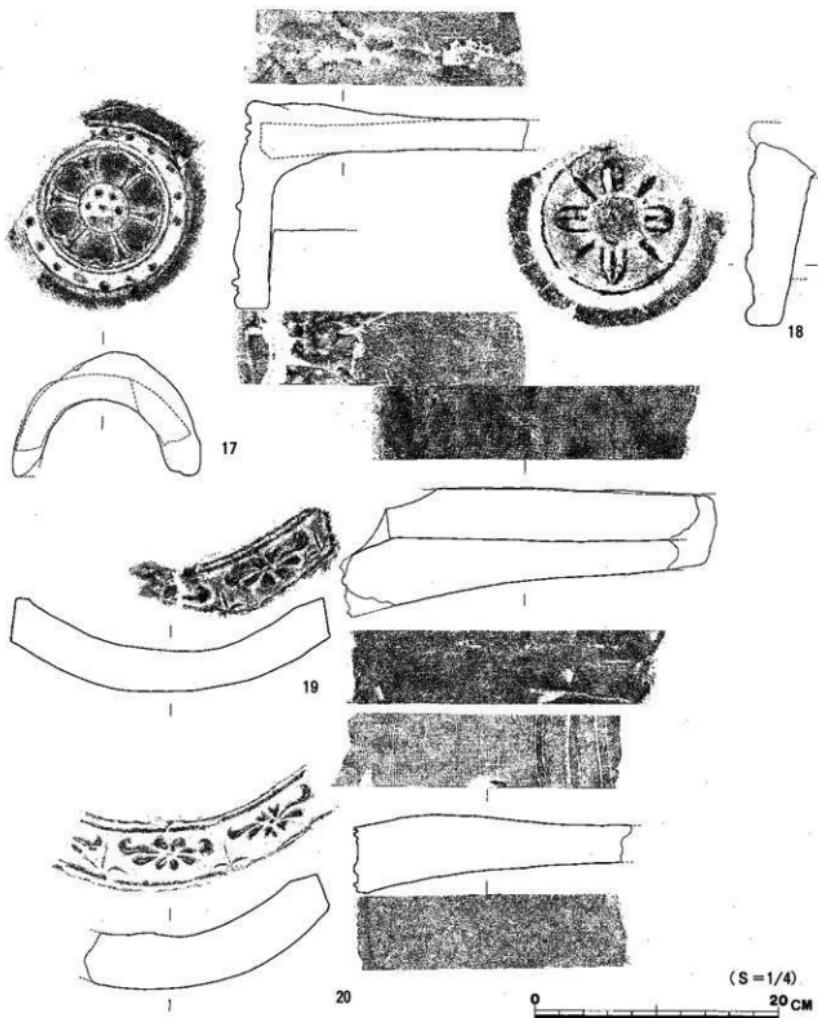
窯で焼いた製品の可能性がある焼成室床面付近出土の遺物は注記では特定しにくい。確実なのは調査写真にある軒丸瓦21類（第6図・17）である。丸瓦部と瓦当部は別々に造り、接合した後に粗く粘土をつけて接合部周辺を補強している。他の焼成品と考えられる瓦は土師質で赤みを帯びた灰



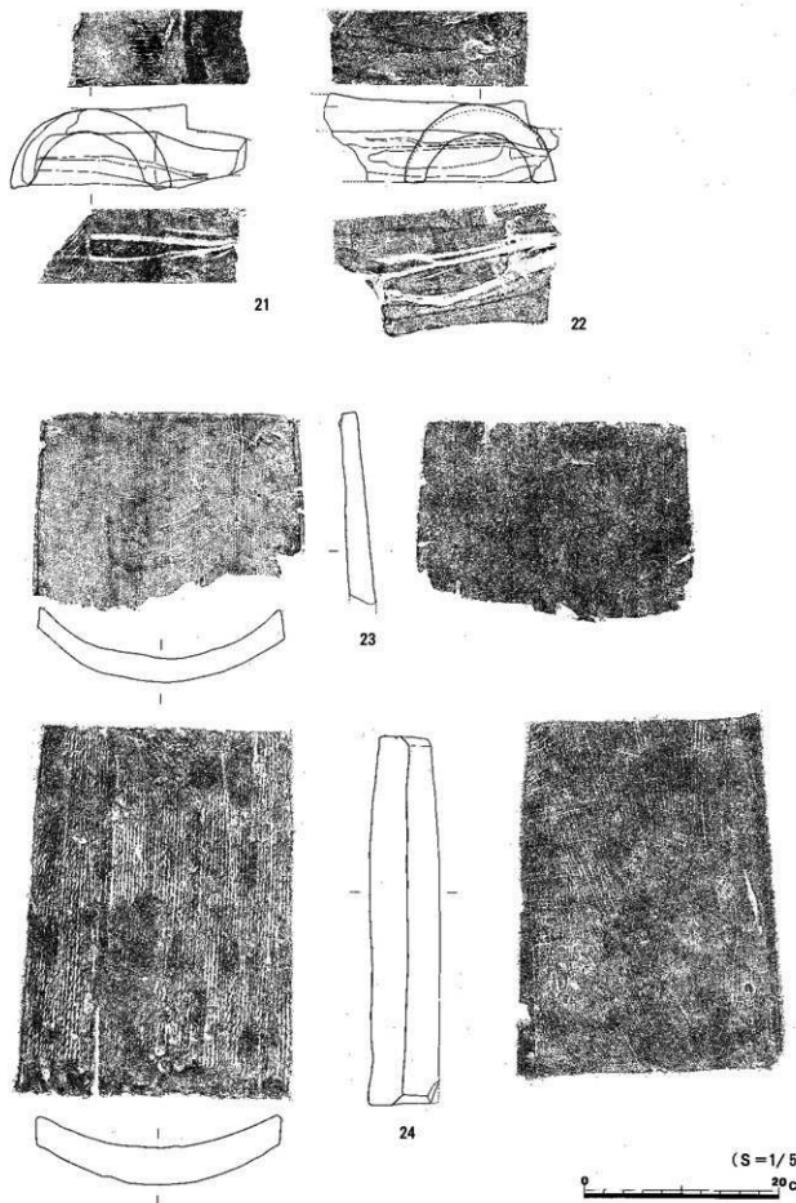
第5図 石見国分寺瓦窯跡出土遺物（窯跡）

白色～淡褐色の色調の一群と考えられる。軒平瓦12A類（第6図・19、20）も色調から軒丸瓦21類と同様の焼成品と考えられる。なお、軒丸瓦31類（第6図・18）も瓦窯跡出土品であるが、注記は「石見国分寺瓦窯跡表探」と記してあり焼成品とは断言できない。この軒丸瓦は瓦当に厚みがあり、一本づくりである。焼成は瓦質に近く軟質である。

焼成品と考えられる平瓦（第7図・24、第8図・25）は端部に布端の痕跡が見られ、一枚作りと



第6図 石見国分寺瓦窯跡出土遺物（窯焼成品か）



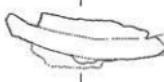
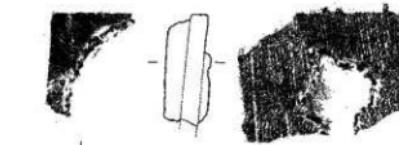
第7図 石見国分寺瓦窯跡出土遺物（焼成品）



25



26



27



28



(S = 1/5)

0 20 CM

第8図 石見国分寺瓦窯跡出土遺物（焼成品・窯壁）

考えられる。厚みがあり、弧深も浅く屈曲の弱い平瓦である。凹面の布目は歪みやほつれで幅が広がり、粗い布目痕である。平瓦 I b 類である（瓦の分類は第31図を参照）。26は量的に少ないが、凸面に縄叩き痕と砂、凹面は削りの後になでたような調整で布目痕は残らない。平瓦 II 4-h 類である。21・22は有段式丸瓦だが、22は外面に粘土が粗く貼り付けられており、軒丸瓦の有段部と考えられる。23は凸面を削り、凹面に布目痕が残る。軒平瓦の狭端部である。28は磚で須恵質である。外面に粗い粘土塊からの切り離し痕が残り、端部を削って方形に整えている。

窯壁に使われた創建期の軒平瓦01A 類（第 5 図・15）の凹面端部に布端が残り、他の壁の平瓦（第 8 図・27）も一枚作りで、焼成品の平瓦（第 7 図・24、第 8 図・25）も一枚作りである。両方とも平瓦 I b 類になる。このことから国分寺創建当初から平瓦は一枚作りであったと考えられる。また、創建期の軒丸瓦01類、軒平瓦01類を窯の壁に用いて、軒丸瓦21類、軒平瓦12A 類を焼成していることがわかり、両軒瓦の新旧関係が明確にわかる（内田1986）。

第3章 石見国分尼寺跡の確認調査

第1節 遺跡の概要

石見国分寺跡から約350m東にある現在の曹洞宗国分寺境内では、石見国分寺跡と同じ文様の瓦が多く見つかっており、また、「比丘尼所」、「尼所」などの地名が残ることから、この地が石見国分尼寺跡と考えられている。尼寺跡南西の谷を挟んだ丘陵上には国分寺霊廟（かんたけ）神社がある（第2図）。説明板によると明治41年に現在地の「心吉」に移転し、元は金蔵寺東側の「着」にあったという。現在「着」の地名は国分寺北東側に残っている。

現在の国分寺は、嘉永5年（1852）頃に他所よりここに移り、再興したと伝えられている。元は国分寺跡にあった仏像などを収めた薬師堂が江戸時代の末期に焼失し、残った仏頭などを納めて嘉永年間（1848年頃）に新しく建てられたお寺である。本堂屋根の鬼瓦には「嘉永元 申八月」の銘がある。近世頃には、下府庵寺跡（塔跡 国指定史跡）が国分尼寺跡と考えされていた。本格的な調査が行われていないため、寺域や伽藍配置などは不明である。石見国分寺跡周辺と比べ平坦地がせまいため、国分寺よりも伽藍の規模は小さかったと考えられる。

ここからも、銅造誕生仏迦趺坐像が出土している（島根県立博物館1990）。国分寺・国分尼寺両方から誕生仏が出土しているのは石見国だけである。発見の経緯は国分比丘尼所（現今の国分寺境内）で、170～180年前に植野仁平という人が浅い地中から発掘し、谷田家に贈り秘蔵せられていたとある（大島1970）。江戸時代後期に石見国分尼寺跡から出土したと考えられる。誕生仏は植忠文氏所有の畠（国分町225-8 字 尼二所）より出土したともいう。今回のT2調査区周辺である。

第9・10図はこれまでに出土し、国府公民館や浜田郷土資料館に保管されていた資料である。29は軒丸01A類、30・31が軒丸02A類、32が軒丸03類、33・34が軒丸04類、35が軒丸05類である（軒瓦の分類は第35図を参照）。29・30・31の軒丸瓦は横置きの一本づくりで、32は接合式で造られている。軒平瓦は36が軒平01類、37が軒平02類、38が軒平03類、39が軒平11A類、40が軒平11B類である。41・42はほぼ完形の有段式丸瓦で他に1個体完形に近いものがある。41は凸面が丁寧にナデ調整されているのに対し、42は段側の綱叩き痕を十分にナデ消していない。41は有段d類、42は有段b類にあたる（瓦の分類は第31図を参照）。43の平瓦は端部に布端の痕跡が残る。弧深も緩く、一枚作りと考えられる。

平成6年度に指定地内の現状変更に伴い一部確認調査と周辺の略測が行われており、それを補足する形で周辺図の作成を行った。平成6年度調査区（第13図）は現在の本堂東側で、近現代の大きな穴が2期確認され、大きく搅乱されていた。しかし、調査区北西側に地山に近い淡黄色の盛土とその下面で柱穴を確認した。直径20cm程の小型の穴で、国分尼寺の主要建物に伴うものではないが、古代の可能性がある。

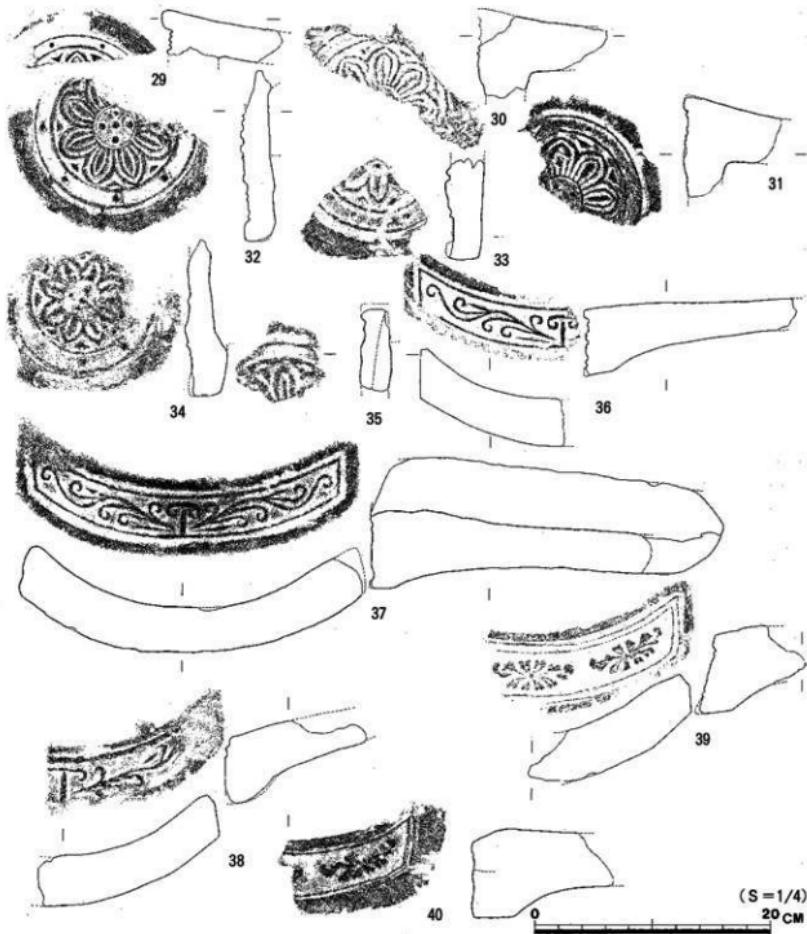
平成17年6月に荒廃した国分寺の本堂の撤去と安政3年（1856）に建てられた宝篋印塔の移設が行われることになり、立会いを行った。宝篋印塔は三隅の龍雲寺に移設されたが、基壇の解体時に下部に経石が安置されていたことがわかった。経石もそのまま移設先の宝篋印塔の下へ再安置された。

宝篋印塔は、正面が西向きて建てられており、地面からの高さは約6.5mにもなる大型の石造物である。基壇を除いた石造物の高さは約4.85mである。塔身上部には各面に仏を表す種字（梵字）が刻まれており、西面（正面）が「キリーク」、北面が「アク」、東面（背面）が「ウーン」、南面が「タラーグ」で金剛界四仏が表されている。塔身下部の正面には梵字と思われるものが刻まれて

いるが、私は不明である。残りの3面には、塔建立の経緯を記した銘文がある。

また、基礎2段目の正面、北面、背面にも銘文がある。正面には塔の建立願主6人の居所と名前、北面には当時の「里正」の名前、背面には「附録」として、大般若經の写経に携わった人間の記録は別に冊子に記録し、永年保存すると記されている。

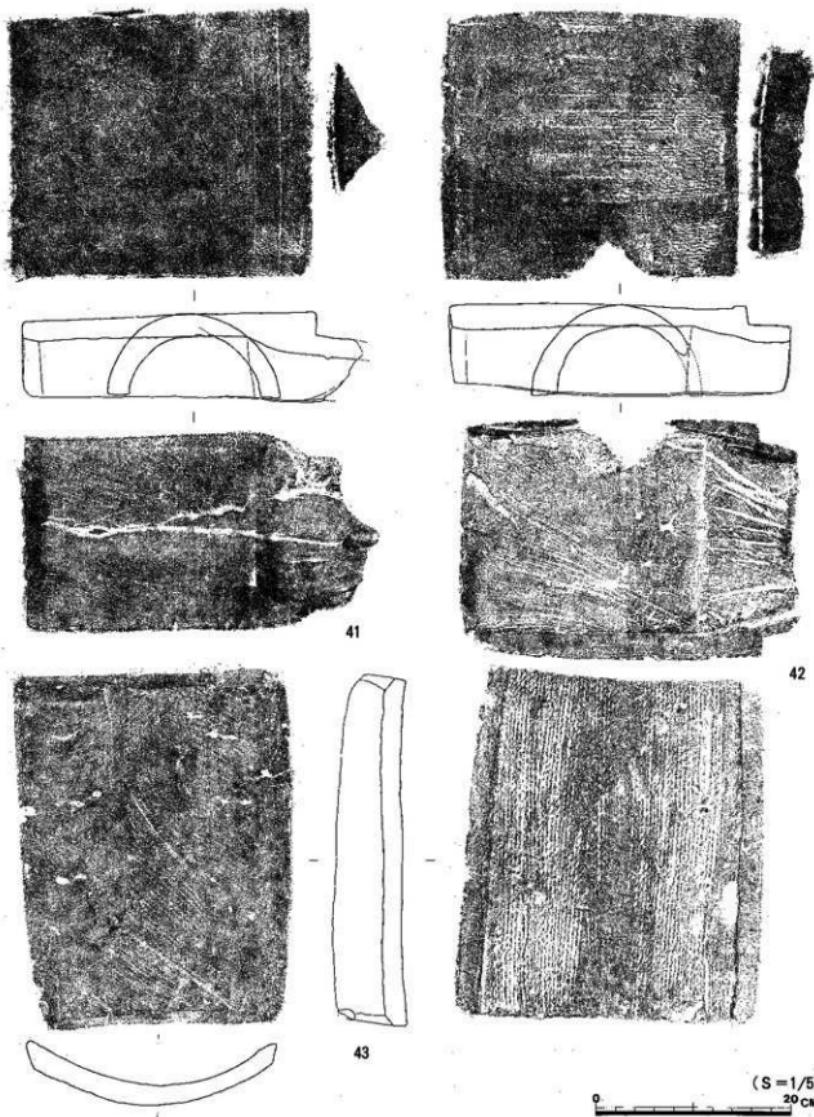
宝篋印塔建立の経緯については、塔身の銘文によると、那賀郡阿刀市村（現江津市）の澤津勝学の妻阿満が、弘化4年（1847）から嘉永3年の間に大般若經600巻のうち31巻13葉を一石に二字ずつ写経していたが、志半ばで病死した。その遺言により、息子と孫や賛同者4人がその遺言に従って、4ヶ寺の僧侶等が写経した経石と合わせて、安政3年（1856）に國分寺に宝篋印塔を建立して



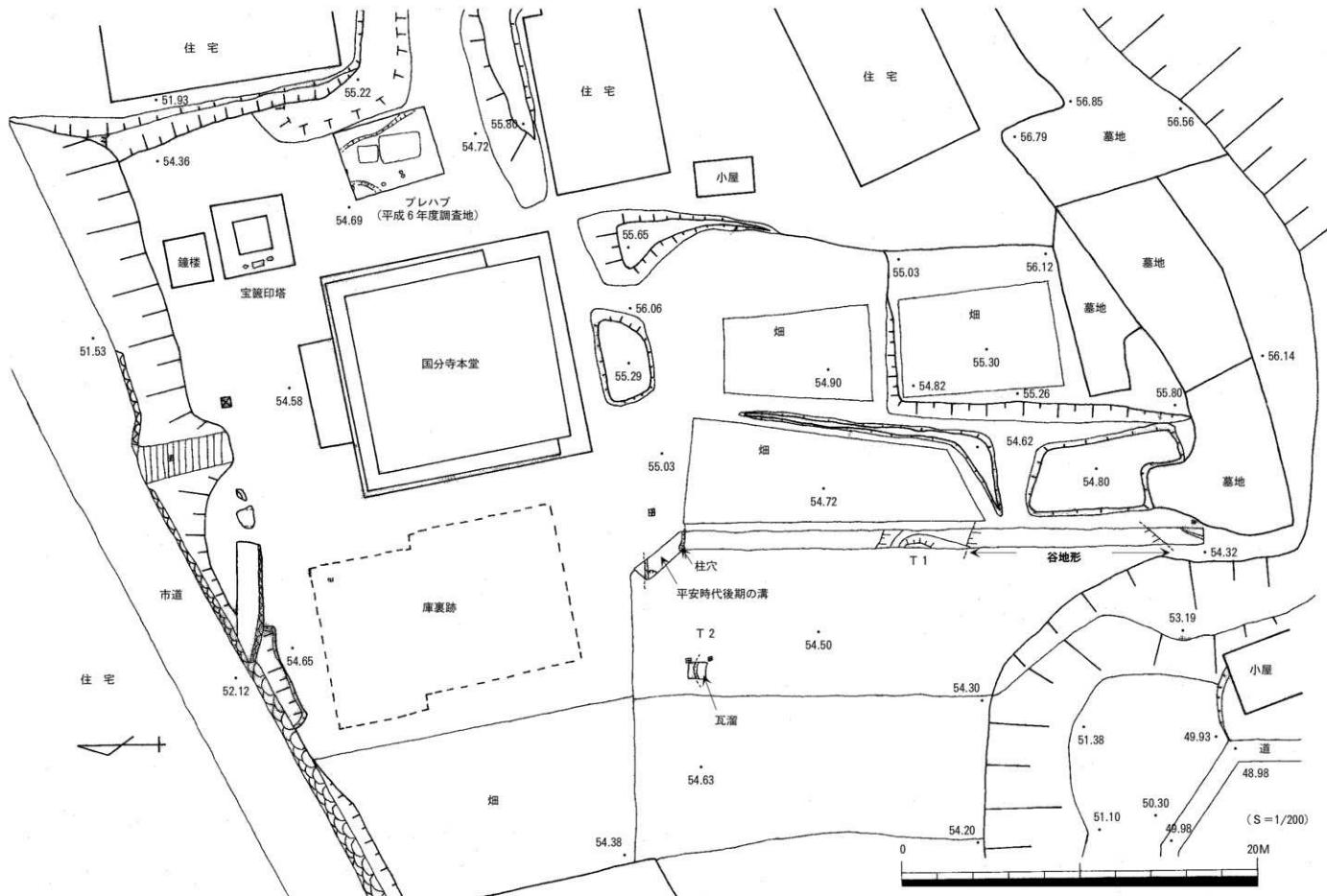
第9図 石見国分尼寺跡出土遺物(1)

鎮納し、供養したとなっている。

当時の「里正」として塔の基礎部分にも名前が刻まれている谷田家には、経石の入手状況が記された安政3年の帳面が伝わっている。



第10図 石見国分尼寺跡出土遺物(2)



第11図 石見国分尼寺跡略測図

立会により確認できた宝篋印塔の構築方法は以下のとおりである。なお、地下部分は一部確認したのみで、そのまま地下に保存されている。

①地山面に60cm以上穴を掘り、均等な3cm大の丸石の礎石経を安置し、地山に近い土で埋める。

②石垣の基礎部分を造りながら地山に近い土で浅い凹みをつくり、1~8cm大のやや大きさにばらつきのある礎石経を、地山に近い土を間に挟みながら敷き詰める。間層の土にも少量礎石経が混じるが、大きく2回に分けて礎石経を安置したと考えられる。

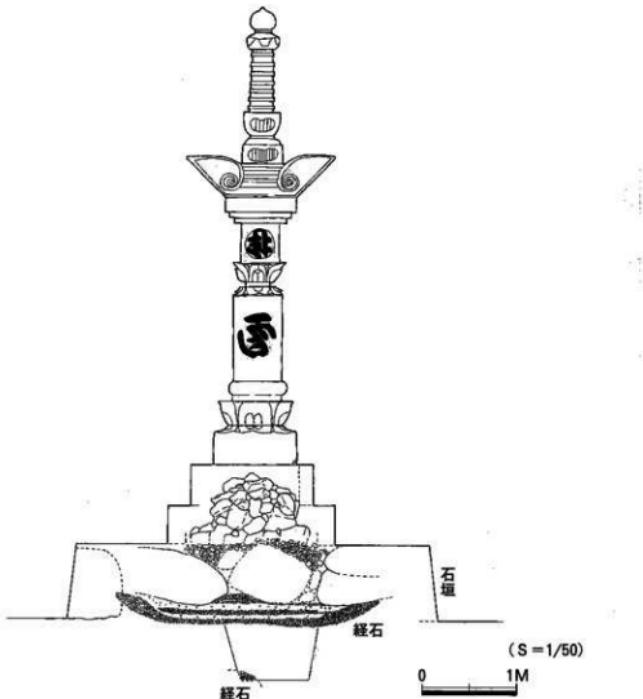
礎石経には獸骨1、鉄製模6個、錢貨が混じっていた。

③礎石経（②と同様のもの）を中心に厚く置き、周りを大型の自然石で部屋状に閉む。石垣もこの段階で完成していたと考えられる。石垣の裏込土からは磁器片、石見焼片、古代瓦片が確認された。

④中心に石を置いて部屋をふさぎ、上面に角石や10cm大のやや大きめの礎石経を置く。礎石経の中には寛永通宝1、錢貨1も混じっていた。

⑤上面に38~50cm大の丸石、15~28cm大の角石を基壇から約70cmの高さまで積み上げる。石積みには寛永通宝3、錢貨4、土人形片、石見焼片、須恵器片、古代瓦片、赤瓦片が混じる。

なお、石積みの隅や周りには平成2年の5円硬貨、ビー玉、ガラス片、プラスチックがみられ、



第12図 石見国分尼寺跡の組合せ宝篋印塔（安政3年・1856年建立）

(塔身一段目銘文)

大般若經曰隨心所欲無不成弁矣哉金言也于茲

本州那賀郡阿刀市村澤津勝孚稱次郎左衛門其

妻君阿満知性質朴直操能尽歸道又深信三宝且

又礼拜恭敬智無懈怠之意特念誦經无(力)或書寫法

華經及金剛經準提陀羅尼光明真書等二石一字

鎮納邑之慈光寺境内弘化四年丁未之秋再發願

書寫大般若六百卷一石二字至嘉永庚戌歲書写

三十一卷十五葉了同年夏六月疾病々中召其子

忠右衛門貴重者遣駕之曰我自幼至老所願求者

無一不遂其志然而今書寫大般若經未果其功道

憾矣耐汝孝子其思焉貴重再拜泣對曰膝下之余

謹奉之亦勿以為念請諸衆倘求之必感其志而

賜書寫膝下大願無不成之理滿知怡然曰今聽斯

語雖尤(力)何恨遂不起以七月十二日逝也享年七十

有六法諱曰定貞智德大姑貴重深念母之遺言遂

與其子古八郎勝重及邇摩郡大森熊谷三左衛門

信英其子三九郎信孚同波積本鄉石田友左衛門

通泰其子量太郎春明諸居士等相議同其志請

門那賀郡上府村安國寺智田和尚邑之慶福庵慧石

豈前國妙庵寺亮珍本州安濃郡刺賀村別峯智

了徒忍芳尼等書寫余又與焉書写了畢今茲安政

丙辰其七回忌景也鎮納経石此地以滿足其生前

志願也余曰嗚呼孝哉貴重善全北堂遺囑是舉前

(基礎左側面銘文)

茲時里正

谷田古藤吾貢定

祝祷天下泰平風雨順時五穀成熟國家安清法

(基礎正面銘文)

一心湧出法界塔婆甚深般若遠離自他

文々字々三昧摩訶有情同體皆當人阿

榮泉禪寺佛乘教撰并書

或百卷十卷一卷

乃至一行善順隨喜

於大般若經書寫

難哉銘中所以別記冊子上承世納

置國分寺可遂向者也

○塔身一段目種字不明

○塔身一段目種字不明

○塔身一段目種字不明

○塔身一段目種字不明

○塔身一段目種字不明

○塔身一段目種字不明

○塔身一段目種字不明

○塔身一段目種字不明

同姓三九郎信孚

同都波積本鄉

石田友左衛門通泰

同姓量太郎春明

(正面) キリーカ(左側面) アク(背面) ウーン

外から石の隙間へ差し込んだか修復を行ったと考えられる。塔基壇上面はコンクリート張りで石の間に楔も見られることから、設置後に何回か補強している可能性がある。

⑥石積みを厚さ約20cmの板石で囲み石塔の基部を2段つくる。その上に宝筐印塔を積み上げる。

礎石経は宝筐印塔の移築時に再安置するため、すべては確認できなかったが約1/3（重量36.4kg）は水洗と文字の判読を行った。

建立の経緯と塔の構造からの推測であるが、最下層に納められた経石（①）はだいたいの大きさが揃っており、石の両面に一字ずつ記されているものが多く確認されたことから、本来の発願者である阿満が書写したものであり、上層の経石は残りの大般若経を僧侶等が書写したものではないかと考えられる。

大般若経の写経については、塔基礎2段目背面の銘文により、銘文中に見える僧侶等だけでなく、多くの人間が行ったようである。上層から出土した経石の石の種類、大きさ、さらに文字の書き方や筆跡が異なっているのはこのためと考えられる。

判読できた経石を以下に示す。石1個を「」で示し、・で表裏を区切って表現している。石塔に記された銘文から、大般若経の一部を写経したことがわかる。

「清・淨」「處・眼カ」「清・口」「耶・聲カ」「地・？」「佛・？」「無・口」「無・二」「知・口」「印・口」「受・想」「處・清」「何・淨」「行・識」「清・情」「若・有」「者カ・口」「不・求」「故・一」「者・口」「何・口」「見・現カ」「一・口」「清・者」「門・口」「清・處」「相・知カ」「分・二」「是・？」「清・口」「意・身」「陀・羅」「別・口」「二・分」「者カ・口」「師カ・口」「現・口」「漢カ・口」「想・受カ」

「者・口」「印・一カ」 判読不能 分三十一個

「所得為方便回向一功智・無二為方便無生為方便無」「慶喜當・無願解脱門」「勝處・脫八」「解大慈大・悲大喜大」「一切・便回向」「無生為方便無所・無カ為方便」「不思議界・□□空界」「智道相智一切相智以一功三・處カ一功門□□□方口」「靜慮カ般若・安□忍□」「自性・捨無」「八□□共□無二為方便無生為・以回カ無所□□為□□□□悲大□拾十」「當為・以カ方辯」「故以カ受想・行□□□」「回向一切・得為方 □」「眼識界及眼・淨說色界」「何以・淨」「□□□□□□□□□六カ法カ□□□□天拾無カ常カ」「次□□定十得カ・處色カ處カ□□」「□淨若不淨□□不方□・行□□□□者我說」「十一月十二日カ 五月廿九カ 佛」「聖諦・苦樂」「所生諸受皆不・□觸為緣」「亦不可得・所以者何」「諸受若□者苦カ應・求耳□若□□□□」「我等諸天當カ□□□□・所□依□□□□□□□□」「此中 一切 尚無」「上正等普・提若我若」「聖□・行不」「波羅蜜多 不應□カ無□□法□若カ□」「□□□□法無所不□□□正知□無所」「見二・多□」「□門覺□□心想カ□諸乘法□不□□・等一切・所得□乃」「說 設 言 施カ」「天□□□天下カ□□光梵」「以八勝□九次第□・□等□□□□□□」「大慈 大喜 大悲」「若波・羅蜜多」「自性□□安忍波・自性□非自性若非」「所得為方便回向・□□□方便□」「為方便無所□□□□・住拾無二為方便無□」「回向一切智 智修習五カ・□六カ神カ通以カ」「便無所得為方便回向一切智智・修カ□□□四カ□□□□五□五方七八□□□□八」「所畏□無」「二分故□□云カ何以□鼻□□□處無」他は判読不能「二為方便無□為方便無所得為方便回」

「便回向一切・智智」「無所・智佛十」「漢向問カ羅口果・不口果阿口」「力回・智修」
「提心者說布施・波野カニカ爲カ若常□□」「品 第三カ 初□ 茂カ口切□ ・三十之□」
「空清淨・性自性」「□□性□□空慶カ口外□・不可□空□□□自」「方便無所 得・便方回爲」
「回向一切□・□□□□□□」「不作散□色□作□量不作□・□□□□」「故善□・無斷」
「我說四故カ傍童子・□□□量四無カ色定若我若無カ」「道利・□□」「□風・空識」「便無・所得」
「鄉音カ・□境」「□□不作大不識界亦・□爲□□□火□空カ」「說真カ如・若カ常若□常カ」
「所生諸□不可□□・?」「一切陀羅尼所無二爲方便無生爲方・便無所□□□方便回□一切□□」
「所得習爲方修便□□・云カ何以受想行識無□爲」「相智一切相智無二・爲方便無生爲方便無」
「漢果自性空是預流向預流果自性即・非自性是一來向乃至阿羅漢果自性亦非自性即是」「乃至」
「不作散□諸□□□□等□不作有□□於□□□・於□□□正等□□亦不作集」「界相・應□」
「爲緣所生カ說受・白カ觸其カ□」「波羅・蜜多」「此中・尚」「若常・□□」「不作集・不作散」
「界自・是耳」「受自・性□」「願カ□・脱□」「行深・般若カ波」「尊性・□故」「自性・□□」
「向一切智智□□」「虛空□・住□實」「布施□□□忍□□□・?」
「等爲發無カ上菩提□者說・□□□□□□□□靜慮」

第2節 調査の概要

平成14年度調査区は国分寺境内地南側に隣接する畑を南北に縦断するようにT1（約31m×1m）を設定し、西側にも小調査区T2（1m×1m）を設定した。

調査の結果、T1の北側で平安時代後期の溝状遺構と柱穴、T2で瓦溜を確認した。また、T1南側は谷地形を埋め立てて平地を造っており、石見国分尼寺の寺域造成の可能性がある。

出土遺物は、両調査区で古代瓦片がコンテナー3箱分・土師器と須恵器が数点出土したのみであった。

T1（第11・13・14図）

北半分では表土下約20cmで地山面を検出した。北側には幅約2.2mの東西方向の溝状遺構が確認された。深さは約20cmと浅いが、上面は削平されているとも考えられ、本来の深さは不明である。床面はほぼ平坦で箱塗に近い。埋土からは古代瓦の破片が比較的多く出土したが、溝の床面近くで土師器片が出土し、瓦片も後述するT2の瓦溜と比べて小片である。溝の埋没時期は土師器片から平安時代後期頃と考えられる。なお、溝床面の南側で径約25cm・深さ17cm程の円形の穴が見つかった。地山に近い土で埋められており、溝より古い柱穴の可能性がある。穴の中から遺物は出土しなかった。溝北側の穴は表土面から掘り込まれておらず植木等による近現代の搅乱である。

溝から出土した遺物は丸瓦21点、平瓦41点、須恵器5点、土師器14点などである。（第13図・45、46）は褐色の土師器、47～49は須恵器である。47・48は底部がヘラキリの杯、49は薄手の壺類口縁部である。50はさびで大きく彫れていたが、断面が正方形で、頭部分が曲がっている。和釘の可能性がある。

調査区中央は遺物の出土量も少なく、地山の傾斜を確認したが、表土層が落込んでおり近現代の搅乱と考えられる。

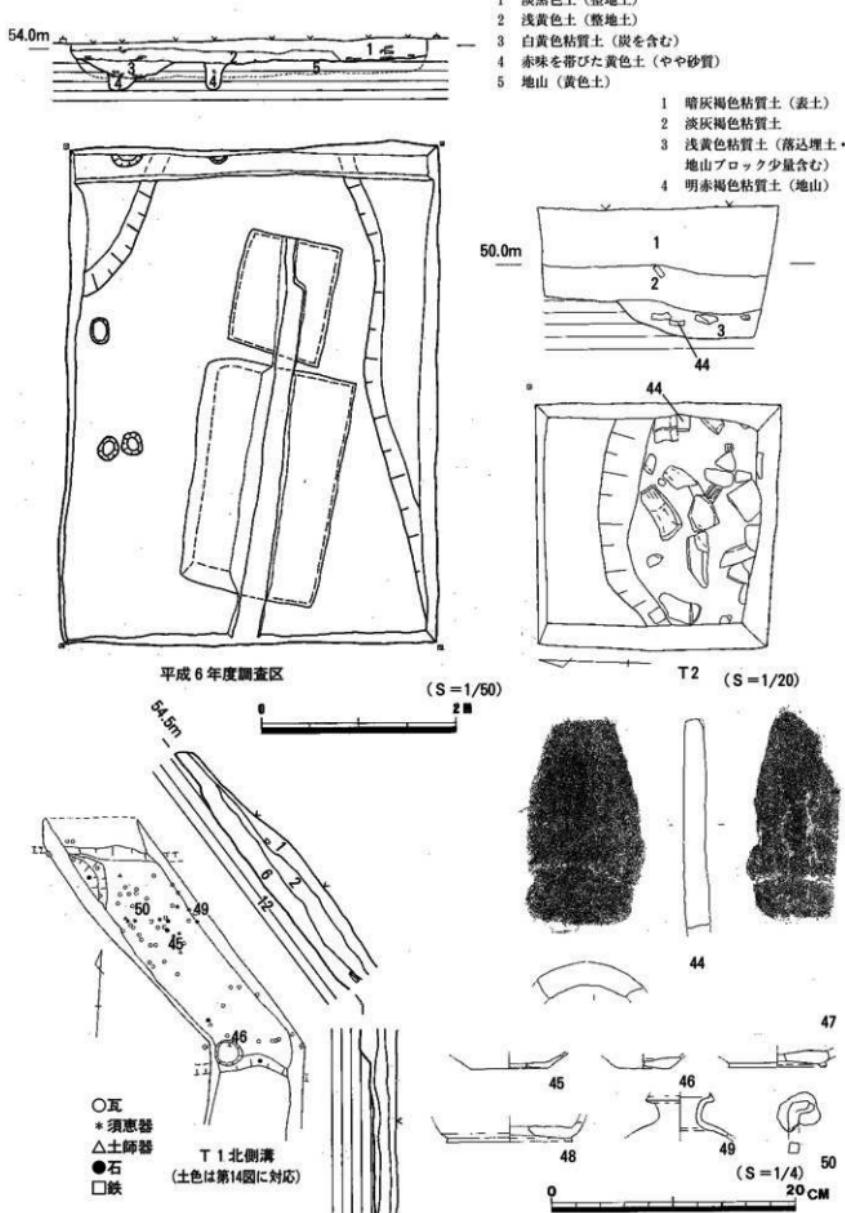
南側は地山面が大きく傾斜して深くなり、調査区南端あたりではまた地山が浅くなることから、谷地形を埋め立てたと考えられる。谷地形は上場の幅11m程度で、調査区が狭いため地山面下場は検出しきれなかったが、2m以上は埋め立てられている。現状の地形もやや緩やかな谷状になり、雨水の通り道になっている。主に黄褐色粘質土系の土で埋め立てられており、埋土上層から古代瓦片（第14図・51、52）が出土した。

T2（第11・13図）

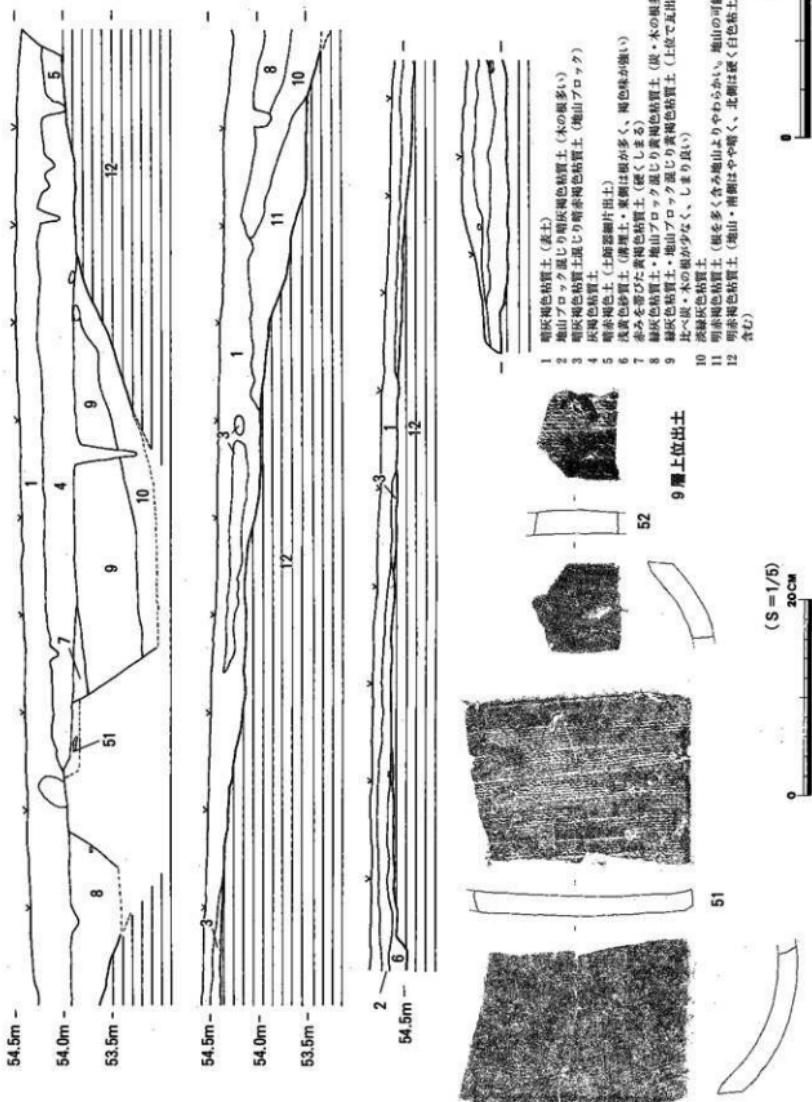
表土下約40cmで調査区南側に古代瓦が溜まっていた落込みを確認した。調査区が狭いため、溝か土坑かは判別できなかった。落込みは深さ10cm程度で瓦はいずれもT1に比べ破片が大きいが、地山面からは浮いていた。（第13図・44）は丸瓦の端部で有段式と考えられる。

調査区	丸 瓦						平 瓦						道具 及		不明 瓦		須恵器				土師器				近世～現代				その他		合計	重量 (kg)
	有段	無段	不明	軒丸	凸縫	凸砂	その他	不明	軒平	裏	蓋	壺口縁	その他	杯	高台付杯	不明	有段代輪器	瓦	その他	鉢	盆	不明	有段	瓦	その他	鉢	盆					
T1			10		21		割り1	4	1	54	1			1				8	5	1	113	11.7										
T1溝	3		18		30		割り1		8	85	1	3	1	周1	1	12					6	3	171	10.68								
T2							4			15											23	7.44										
T2底塗	4		16		5		2			15											42											
計	7	-	44	-	63	-	割り3	18	1	-	169	2	3	1	1	周1	1	12	8	5	1	6	3	349	29.82							

表2 石見国分尼寺跡出土遺物集計表



第13図 石見国分尼寺跡調査区実測図



第14図 石見国分尼寺跡T1土壌図

第4章 石見国分寺跡の確認調査

第1節 遺跡の概要

石見国分寺跡は現在の浄土真宗金蔵寺境内とその周辺に比定され、境内地内は大正10年に国指定史跡になっている。現状で「大門」「門ノ前」「鎮守ノ前」などの小字が残り、金蔵寺境内の南東に塔跡が残っている。北東側の畠には「着」の小字が残り、国分寺霊廟（かんたけ）神社があったと伝えられている。国分寺霊廟（かんたけ）神社はもと邇摩郡にあり、国分寺が当初は邇摩にあったと考える説もある（見島1992など）。

石見国分寺は『続日本紀』の天平勝宝8年（756年）12月に石見など26国に、先代天皇の1周忌にあたる斎会の飾りとして灌頂の幡など仏具を下賜し、後に寺物として国分寺に収めて用いさせたという記載が最も古く、次いで『延喜式』（927年完成）に「石見国……国分寺料二万束」とあるのみで、その後の記述は見られない。

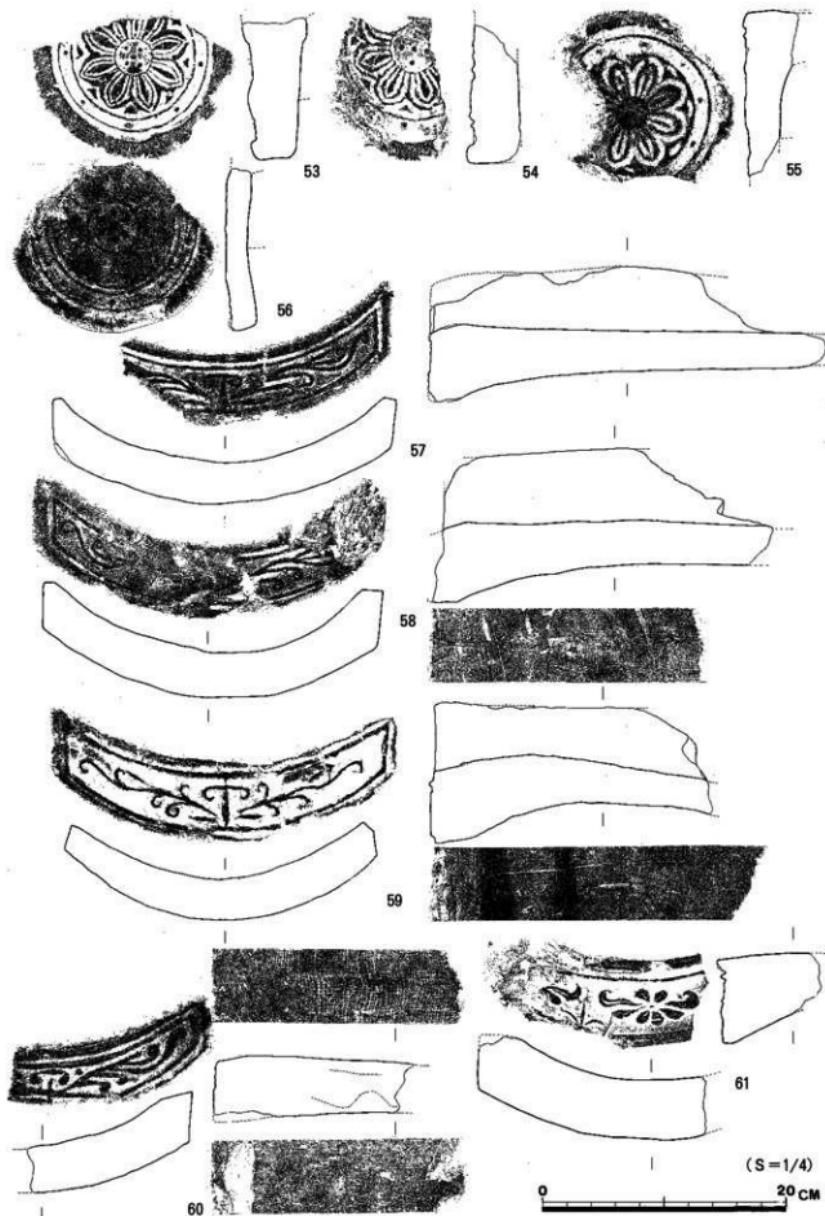
現在国分寺跡にある金蔵寺の由来は古文書等の研究により次のようにまとめられている（朝枝1919・野津1925、1938・国府町文化財審議会1963・桑原1986など）。戦国時代に吉川元春の武将であった朝枝氏が市木淨泉寺に入り、その子孫の方が小さな堂宇と煙地になっていた国分寺跡を買い上げてお寺を建て、真宗をこの地に布教したと伝えられている。寛文5年（1665）に金蔵寺として本仏・寺号を得ている。国分寺関係の仏像などは薬師堂を建てて別に安置されていたが、江戸時代の末期に火災にあい薬師堂は焼失した。そこで残った仏頭などを納めて、嘉永年間（1850年頃）に国分尼寺跡に新しくお寺が建てられた。これが現在の国分寺になっている。

国分寺跡の研究は、伽藍配置や変遷など総合的に検討したもの（野津1925・山本1968・原1990・内田1997など）と出土瓦を中心としたもの（内田1986・前島1986・梶原2005など）がある。伽藍配置については、薬師寺式で左側の塔と南大門を略した配置（野津1925）と南大門を設けた出雲国分寺に似た配置（山本1968）が想定されているが、現状では塔跡しか確認されておらず、詳細はいまだ不明確である。

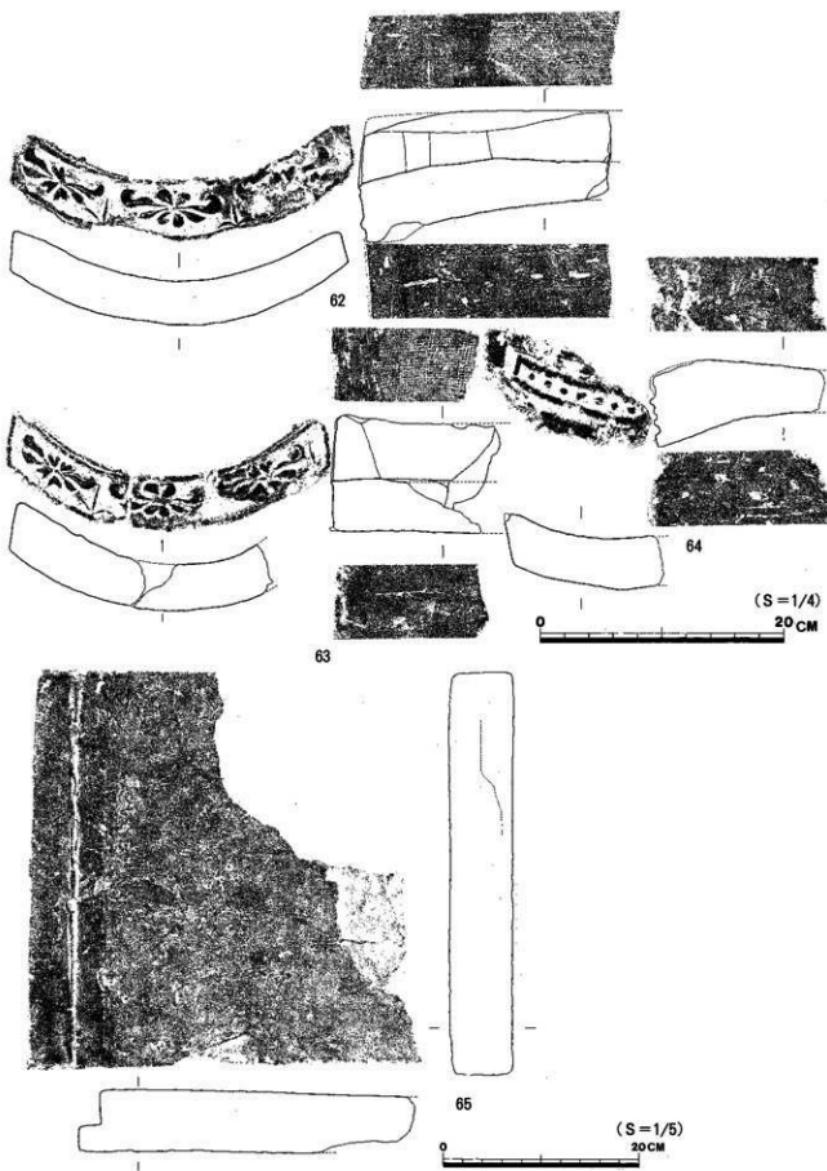
第15～17図は金蔵寺に所蔵されている瓦類である。石見国分寺跡以外に下府庵寺、奈良山村庵寺、宇治平等院などの瓦も混在していたが、石見国分寺跡出土と考えられる遺物を紹介する。しかし、これまで紹介してきた金蔵寺所蔵資料のすべてではない。

53は軒丸01A類、54は軒丸02A類、55は軒丸05類、56は軒丸21類である（軒瓦の分類は第35図を参照）。53・54の軒瓦は横置きの一本づくりで、56は接合式である。軒平瓦は57・58が軒平02類、59が軒平03類、60が軒平04類、61が軒平12B類、62・63が軒平12A類、64が軒平21類である。65は磚で片側に段がついている。66・67は丸瓦で66が無段式、67～69が有段式である（瓦の分類は第31図を参照）。68はやや小型である。69は凸面狭端側に粘土の貼付痕が残り、おそらく軒丸瓦の丸瓦と考えられる。70は平瓦で四面の側部側に布端の痕跡が見られ、一枚作りによるものである。

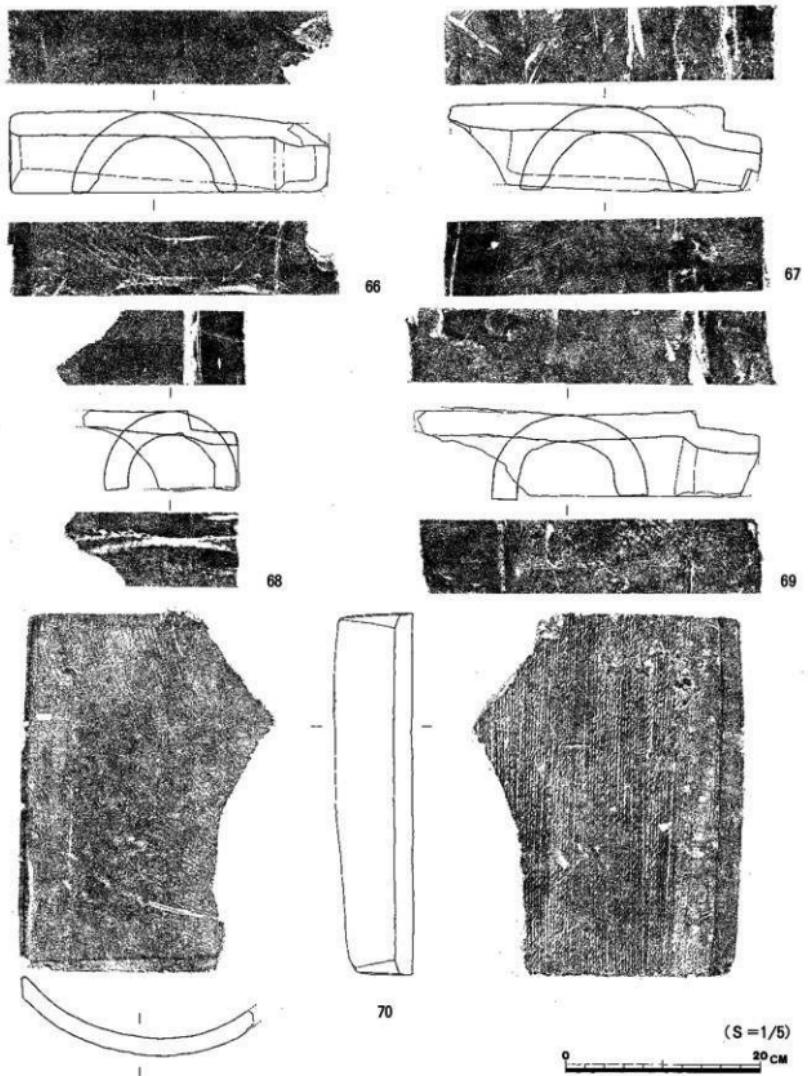
金蔵寺所蔵資料の中には、軒平瓦の顎部分に朱線がついたものがある。（第15図・59）は軒平03類で、瓦当面から約8.2cm後ろの凹面に幅2cmの朱色の横線が入る。（第16図・62）は軒平12A類で、瓦当面から約3.8cm後ろの凹面に幅4.6cmの朱色の横線が入る。これらは建物に瓦を葺いた後に、柱などを彩色する際に付着するもので、建物の補修を行った証拠になるものである。これらの赤色顔料は分析の結果、いずれも鉄を発色的主要因とする広義の「ベンガラ」と考えられている（朽津2005）。不純物が多いベンガラで、真っ赤ではなく「レンガ色」に近い色になる。



第15図 石見国分寺跡出土遺物（金蔵寺所蔵・1）

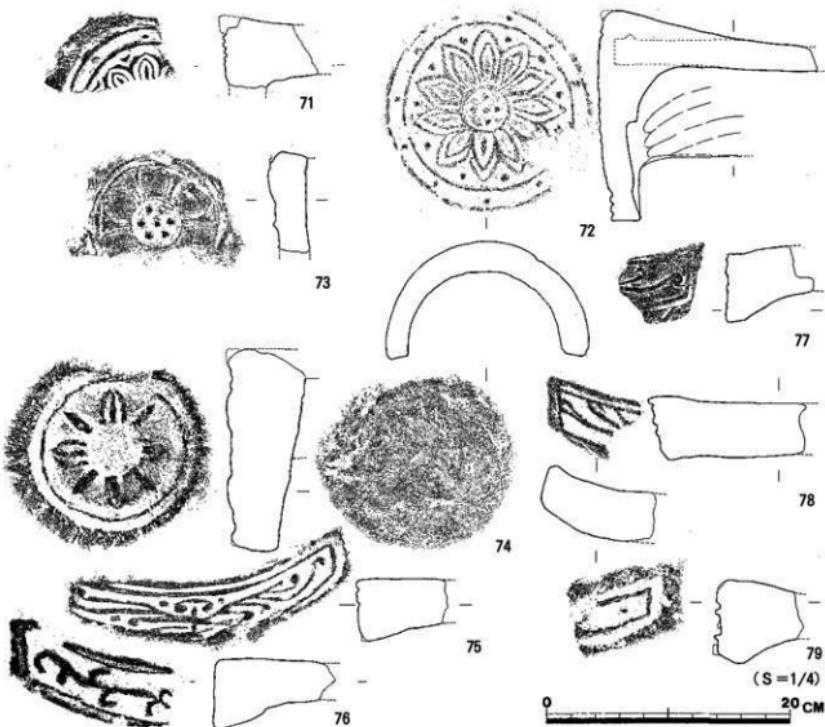


第16図 石見国分寺跡出土遺物（金蔵寺所蔵・2）

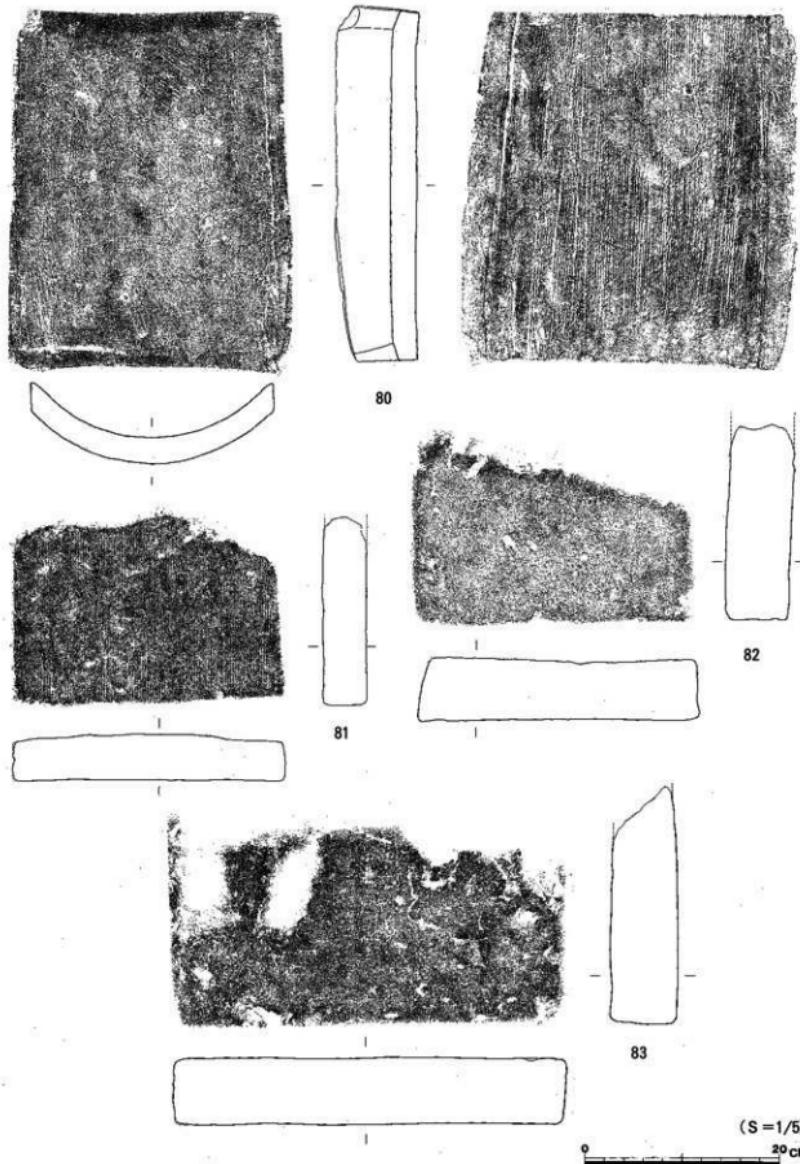


第17図 石見国分寺跡出土遺物（金藏寺・3）

第18・19図はこれまでの調査で出土した軒瓦と浜田郷土資料館に保管されていた資料である。71は軒丸02B類、72は軒丸11類、73が軒丸21類、74が軒丸31類である（軒瓦の分類は第35図を参照）。71の軒丸瓦は横置きの一本づくりで、72・73は接合式で造られている。74は瓦当が厚く、一本づくりと考えられる。72は瓦当部と丸瓦部の接合部が良く残っている。丸瓦先端付近に小さい突起をつまみ出し、上下に厚く粘土を貼り付け、凸面は削り、凹面はユビナデで調整している。軒平瓦は75が軒平04類、76が軒平08A類、77が軒平05類、78が軒平06類、79が軒平22類である。このうち76～79はそれぞれ1点しか出土しておらず、全体の形は不明である。特に76は焼成が軟質で文様も判然としない。77は文様が浅く平坦である。78は頸が直線的で、文様も下向きにつき全体的に粗雑なつくりである。80は平瓦で四面の側部と広端部に布端の痕跡が見られ、一枚作りによるものである。平瓦I b類になる（瓦の分類は第31図を参照）。81～83は磚で、小型の81・82と大型の83が見られる。81は片面に木目と見られる繊筋がみられる。



第18図 石見国分寺跡出土遺物(1)



第19図 石見国分寺跡出土遺物(2)

これまでの調査結果は以下のとおりである。これまで21の調査区で調査が行われ、昭和60年度から63年度までの調査(1~18調査区)はすでに報告書が刊行されている(浜田市教育委員会1987・1989)。

- 昭和60年度(1985) 塔跡および周辺の確認調査(指定地内・国庫補助事業・第1~6調査区)
・塔基壇の碑列が確認され、塔は真北基準で造られたと考えられる(第22図)。
これにより、12m~14mの基壇の上に約8m四方の塔が建っていたと考えられている。
- 昭和61年度(1986) 東側畠地の確認調査(指定地外・国庫補助事業・第7~11調査区)
・小規模な柱穴、土坑などが確認された。
- 昭和63年度(1988) 北東~北側畠地の確認調査(指定地外・国庫補助事業・第12~18調査区)
・第12調査区で真北方向に延びる溝状遺構が見つかり、炭化物や火を受けた銅造誕生釈迦立像(市指定文化財)が出土した。国分寺の一部が平安時代後半に火災にあった可能性も考えられている。
- 平成12年度(2000) 客殿の基礎修繕に先立つ確認調査(指定地内・第19~21調査区)
・遺構は確認されなかった。21調査区では近現代に厚く盛土が行われていた。

第2節 調査の概要

平成14年度調査

金蔵寺境内地内の庫裡周辺と本堂北側を中心に11の調査区(①~⑪調査区)を設定した。調査の結果、金蔵寺本堂周辺と北側の庭にあたる①・②・③・⑥・⑩調査区では国分寺が存在した時期(奈良時代末~平安時代)の溝・柱穴・土坑が確認され、国分寺に関わる遺構が残っていることが判明した。いずれの調査区でも古代の瓦片が多量に出土し、古代瓦片がコンテナー24箱分・須恵器、土師器片が少量出土した。

① 2m×2m調査区(第23図)

境内地北西側の高まりに設定した。現地標高は54.012mである。標高53.11mで古代瓦小片を含む整地土面を確認し、柱穴・土坑を検出した。土坑内から古代瓦片、土師器細片が出土し、古代~中世頃の可能性がある。地山面は標高52.856mである。

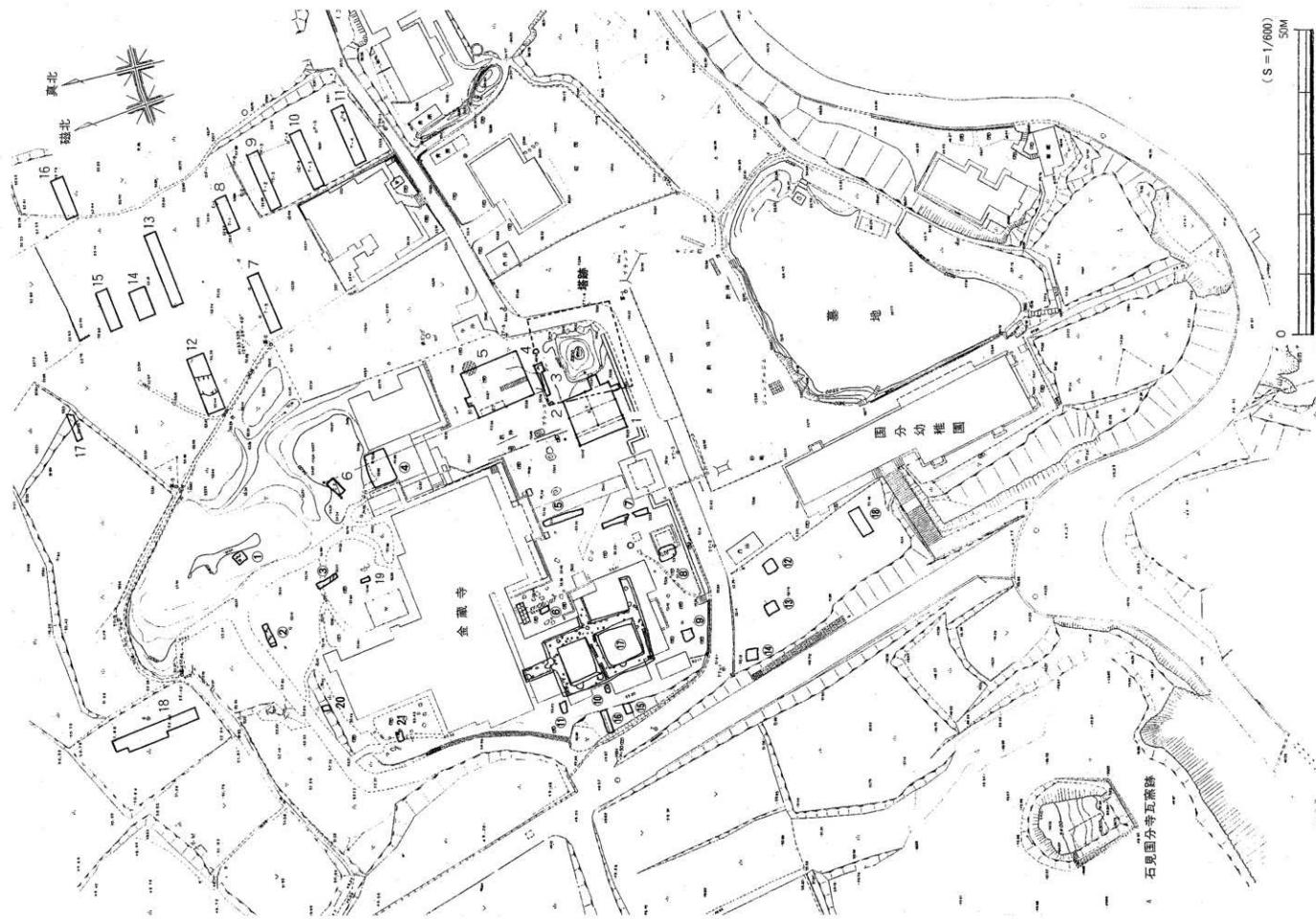
調査区周辺は最も標高が高く、当初は旧地形が残る場所と考えていたが、近世以降に盛土が行われて高くされていたことがわかった。おそらく、金蔵寺に関わる整地の残土の可能性がある。

② 1m×5m調査区(第23図)

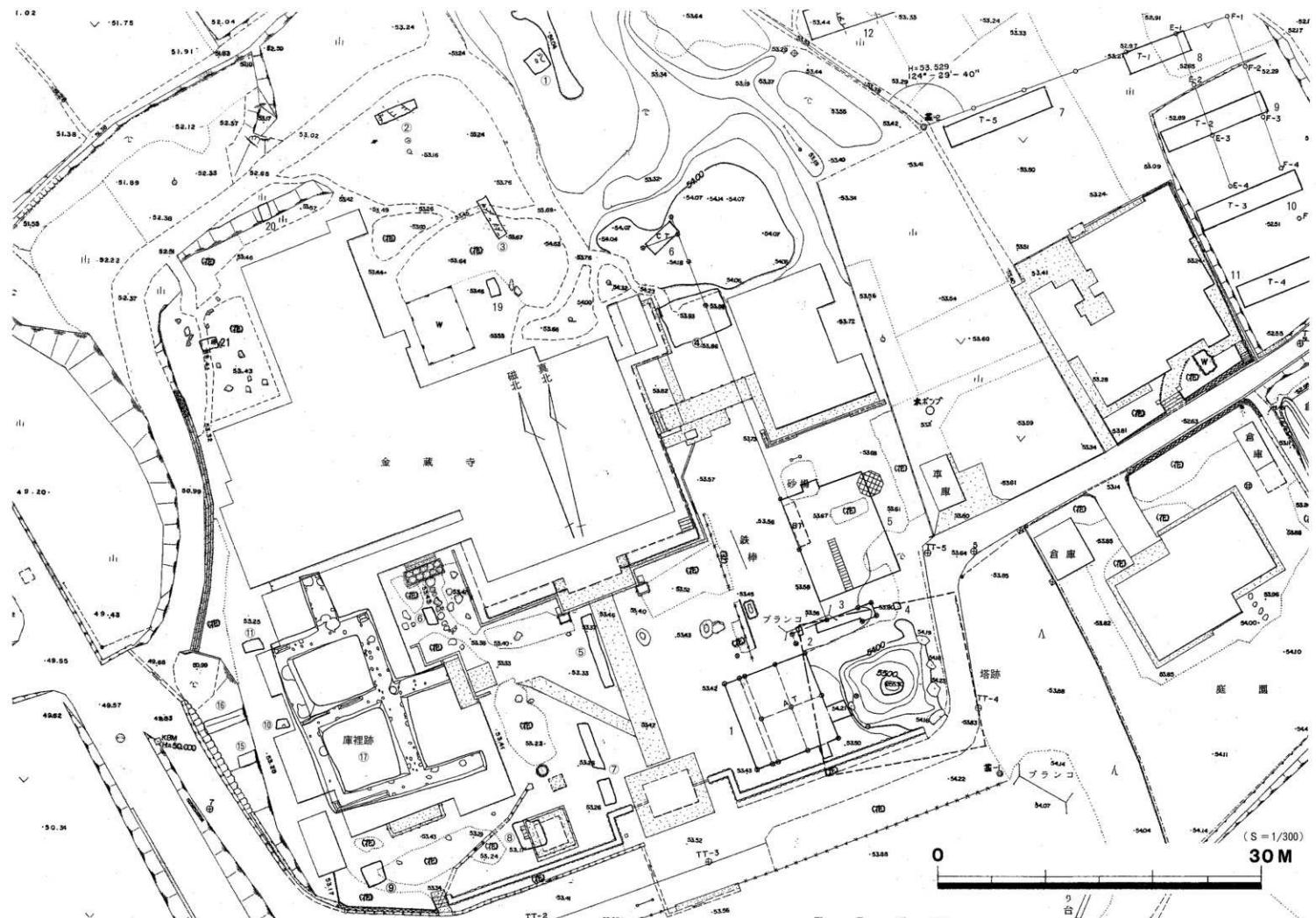
境内地北側に設定した。現地標高は53.357mである。標高52.798mの地山面で古代瓦小片を含む溝・柱穴・土坑を検出した。溝は北西~南東方向にはしり、断面は丸みをもち、やや2段壠状になる。調査区西端には瓦細片を含む土坑と穴が確認された。

③ 1m×4m調査区(第24図)

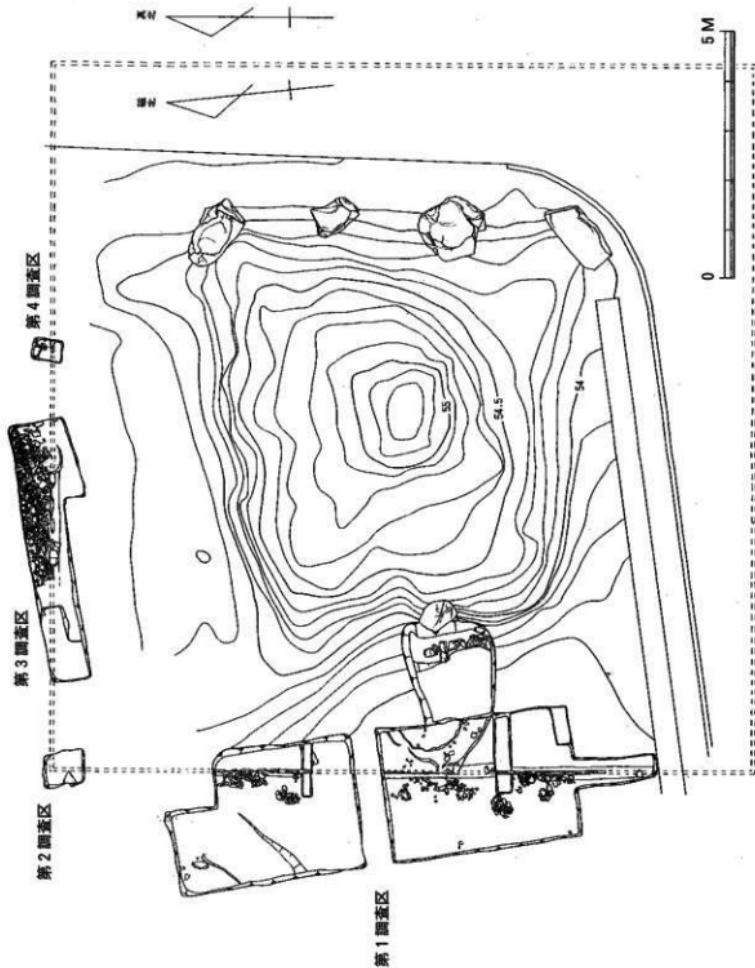
本堂北側の庭に設定した。現地標高は53.747mである。標高53.052mで古代瓦を多量に含む盛土(第24図・第8層)を確認し、第8層の上面で南側に溝、北側に落込みを検出した。この溝と落込みは北西~南東方向と考えられるが、部分的に確認しただけで詳細は不明である。溝・落込み内か



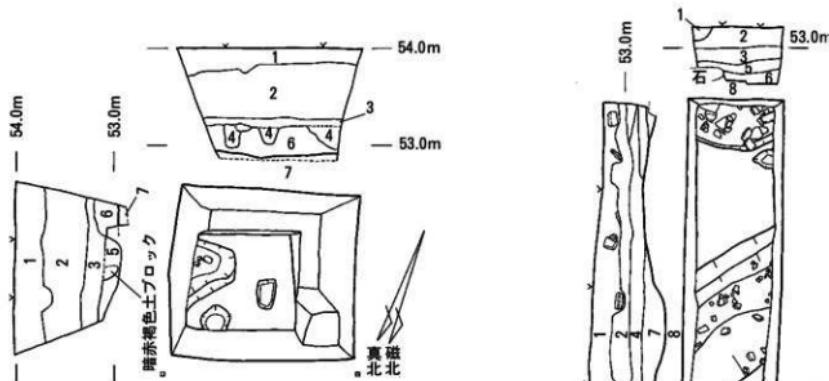
第20図 石見国分寺跡瓦窯跡(国定図1)



第21図 石見国分寺跡調査区設定図(2)



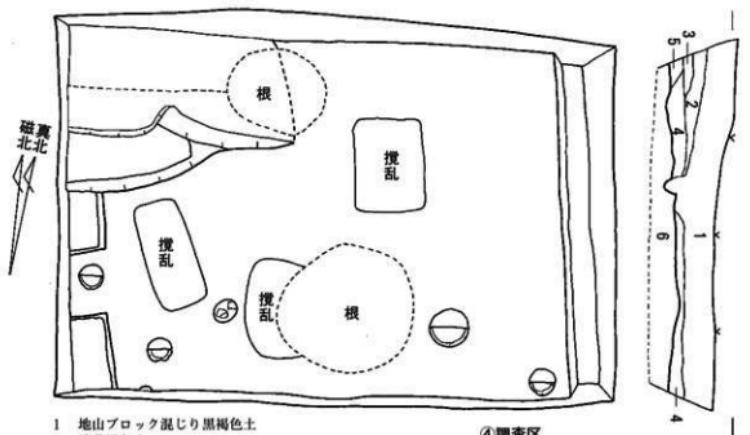
第22図 塔跡測量図（昭和60年調査区・浜田市教育委員会1989より）



- 1 暗灰褐色土
- 2 淡灰褐色土 (磁器、瓦細片含む近世の整地か?)
- 3 暗赤褐色土混じり淡灰褐色土瓦細片
- 4 暗赤褐色土ブロック混じり暗褐色土
(柱穴埋土、土師、瓦細片含む。ブロック状になる)
- 5 暗褐色土 (土坑? 埋土)
- 6 暗赤褐色土 (瓦細片、遺構検出面・整地土)
- 7 暗赤褐色土 (部分的に黄味を帯びる・地山)

- 1 黒褐色砂質土
- 2 暗灰褐色砂質土
- 3 淡褐色砂質土
- 4 淡褐色粘質土 (地山ブロック少量含む)
- 5 黑灰色土 (近世土坑埋土)
- 6 淡黃褐色土 (古代土坑埋土)
- 7 淡褐色粘質土 (地山ブロック多く含む)
- 8 暗赤褐色粘質土 (地山)

①調査区



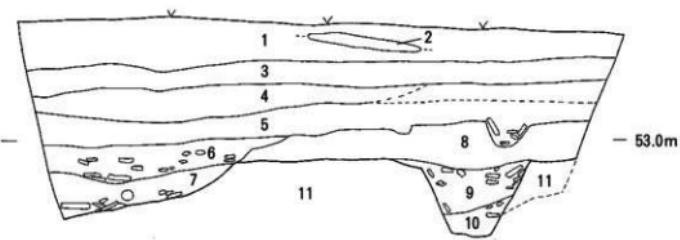
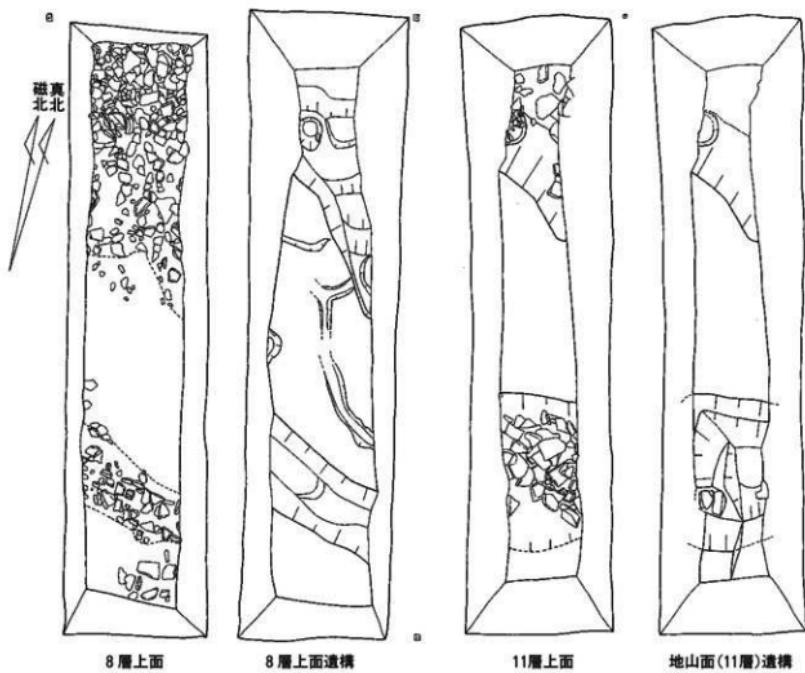
- 1 地山ブロック混じり黒褐色土
- 2 暗黄褐色土
- 3 地山ブロック混じり暗黄褐色土
- 4 灰褐色粘質土 (北側は地山ブロック多い)
- 5 明灰褐色粘質土 (硬質・磁器出土・盛土乾燥するとブロック状に見える)
- 6 (暗)赤褐色粘質土 (一部黄味つよい・地山)

④調査区

(S = 1/50)



第23図 ①・②・④調査区実測図



- 1 黒褐色砂質土（層下位は暗灰褐色）
- 2 暗赤褐色粘質土ブロック
- 3 暗灰褐色粘質土
- 4 暗黃褐色粘質土
- 5 暗褐色粘質土
- 6 暗褐色粘質土（瓦多量に含む）
- 7 淡黄色粘質土（瓦含む）→Pit検出面
- 8 暗黄色粘質土
- 9 地山ブロック混じり暗黄色粘質土
- 10 淡黄色粘質土
(地山ブロック多く含み、地山と区別しにくい)
- 11 赤色粘質土（白色粘土が縞状に入る）

(S = 1/30)
0 3M

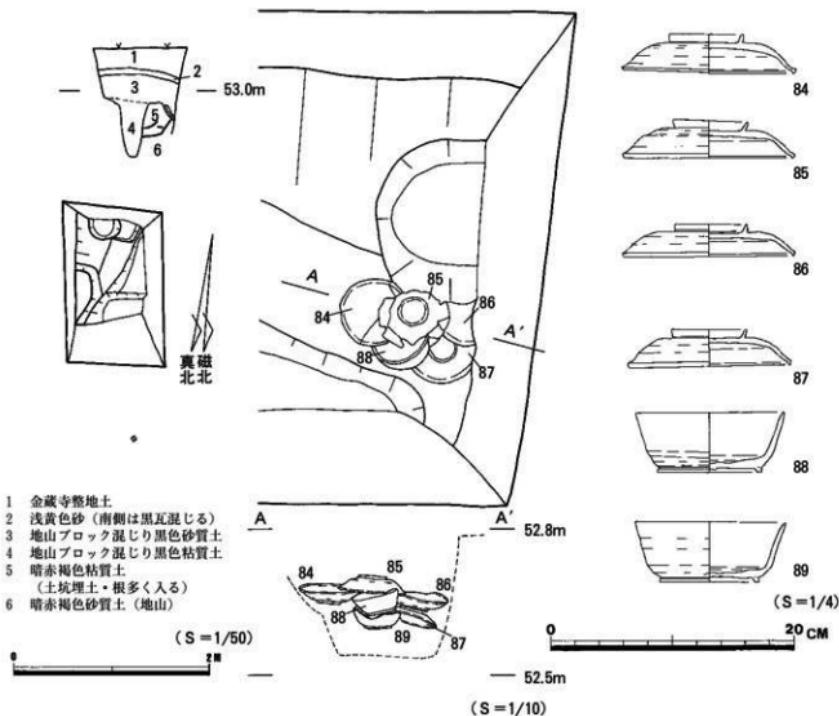
第24図 ③調査区実測図

ら多量の古代瓦・土師器片が見つかったが、小さな破片になっている。南側溝からは(第34図・145、148)、北側溝からは(第34図・146)が見つかった。盛土の中からも多量の古代瓦が出土し、土師器が混じる。土師器は(第34図・145、148)が南側溝、(第34図・146)が北側溝の出土である。

北側の溝は盛土上面で確認した溝と一連で溝の上層と下層の可能性もある。南側の地山面で確認した方形の土坑は、埋土が地山に近く、瓦が出土しないと地山と区別しにくいものであった。大きな瓦が多く、軒平01類(第30図・102)も出土した。掘ってあまり時間差をおくと埋められたものと考えられる。柱痕や堀形の埋土の分層はできず、柱跡の可能性は低い。

④ 4 m × 6 m 調査区 (第23図)

本堂東側に設定した。現地形では北側に高まりがあるが、①調査区と同様に近世以降の盛土と考えられる。現地標高は53.788mである。標高53.479mの地山面で柱穴・土坑を検出したが、大半は埋土や出土遺物から近現代のものと考えられる。



第25図 ⑥調査区・出土遺物実測図

⑤ 1 m × 7 m 調査区（第26図）

本堂参道西側に設定した。現地標高は53.355mである。現在の本堂に最も近い調査区のためか、近現代以降に地山直上まで版築状の整地が何回も行われ、柱穴や溝が造られている。地山面（標高52.793m）で検出した柱穴（径20cm程）は古代頃の可能性がある。

⑥ 2 m × 1 m 調査区（第25図）

庫裡北東の玄関前に設定した。現地標高は53.415mである。近現代の整地土下、標高52.924mの地山面で土坑（直径20cm以上・深さ35cm以上）を確認し、須恵器の蓋4・环2がほぼ完形で見つかった。東側は近現代の穴によりかく乱されていた。須恵器は蓋と坏がセットでは置かれておらず、蓋（84・86）は引っくり返して皿のように置かれていた。土坑の埋土は掘込面の土に似ており、須恵器が出土してようやく遺構埋土が区別できた。なお、調査時は地山面から掘り込まれていたと考えていたが、平成16年度の庫裡跡（⑦調査区）の状況から地山面ではなく盛土面に造られた遺構の可能性がある。埋土には根が多く入っておりややしまりが悪い。穴を掘ってあまり間隔を空けずに埋めたと考えられる。蓋（第25図・84～87）は短い輪状つまみがつき、天井部はヘラ切りである。外面に自然軸がかかる。坏（第25図・88、89）は底部がヘラ切りで、低い貼り付け高台がつく。

⑦ 8 m × 1 m 調査区（第26図）

門西側に設定した。現地標高は53.386mである。近現代の整地土下、標高53mの地山面で穴（径40cm以上）を確認し、須恵器片が出土した。北側には瓦が大量に集中出土したが、ガラス片も出土し、近現代以降に瓦をまとめて廃棄したと考えられる。

⑧ 2 m × 2 m 調査区（第26図）

庫裡南東側に設定した。現地標高は53.229mである。標高52.786mで地山面を確認した。北側は石組水路と石垣で大きく削平されている。この水路と石垣は機能しておらず、現在の庫裡以前の建物に伴うものと考えられる。

⑨ 2 m × 2 m 調査区（第26図）

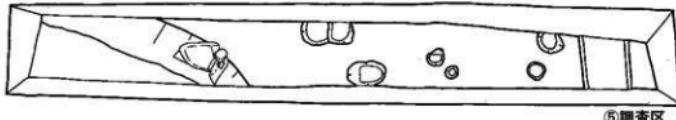
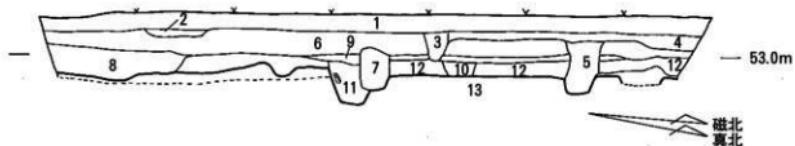
庫裡南西側に設定した。現地標高は52.9mを測る。標高50.98mで瓦小片を含む整地土面を確認したが湧水のため、詳細は確認できなかった。現地表約2m下で近現代のいぶし瓦が出土しており、近現代におそらく庫裡を建てるために厚く盛り土を行っている。

⑩ 1 m × 1.5m 調査区（第27図）

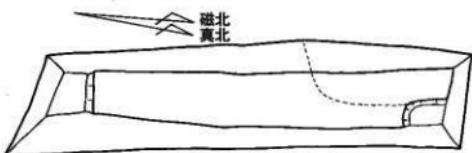
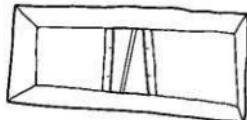
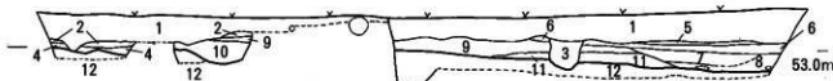
庫裡西側に設定した。現地標高は53.4mを測る。掘削中に錢貨7枚（開元通寶・洪武通寶・熙寧元寶・□豊□□・元豐通寶・天聖元寶・永樂通寶）が重なって出土した。その後の精査で標高52.16mの古代瓦を多量に含む整地土面から掘られた柱穴（径18cm程）のほぼ上面にあたることがわかった。地山面は標高52.00mで確認した。

⑪ 1 m × 1.5m 調査区（第21図）

庫裡北西側に設定した。水道管が砂で埋設されており、大きく搅乱されている可能性があるため掘下げを中止した。

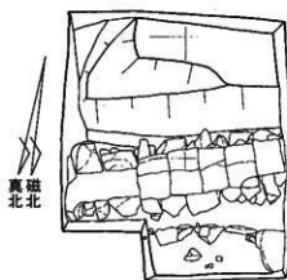


1 近現代整地土（暗灰褐色粘質土・砂層を5cm程でしく）
 2 黒色腐層（①層まじる・近現代覆瓦）
 3 小石、砂まじり灰褐色砂質土（近現代覆瓦）
 4 近現代整地土（暗赤褐色粘質土・砂層を5cm程でしく・しまり悪い）
 5 ④層かブロック状になったもの（しまり悪い）
 6 近現代整地土（暗灰褐色粘質土・暗赤褐色粘質土をしく）
 7 ⑥⑦層か、ブロック状になる（しまり悪い・しまる）
 8 地山ブロック混じり暗褐色粘質土
 9 暗灰褐色砂質土
 10 暗赤褐色粘質土
 11 黒色粘質土
 12 暗灰褐色粘質土
 13 浅黄色粘質土（地山）



⑦調査区

1 近現代整地土（暗灰褐色粘質土・地山ブロックを厚さ5cm程でしく）
 2 暗赤褐色粘質土
 3 1層かブロック状になったもの（しまり悪い）
 4 暗灰褐色砂質土
 5 黄色砂（ガラス片出土）
 6 黒色粘質土
 7 橙褐色土（燒土）ブロック混じり暗褐色粘質土（東側は燒土ブロック少ない）瓦多量に含みしまり悪い
 8 暗灰褐色粘質土（瓦多くしまり悪い）
 9 黑褐色粘質土（瓦細片多く含む）
 10 暗褐色粘質土
 11 暗赤褐色粘質土
 12 浅黄色粘質土（地山・南側は赤みが強い・11層とは漸移的）

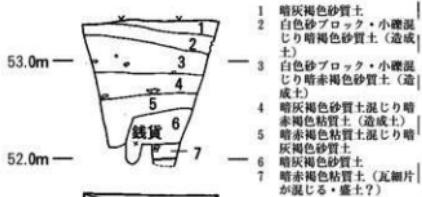
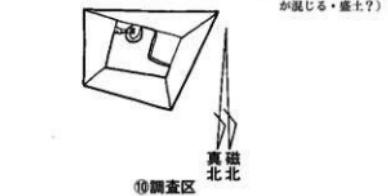


1 黒色砂、地山ブロック混じり暗褐色砂質土
 2 暗褐色砂質土
 3 暗褐色砂質土（石組水路擬方埋土）
 4 地山ブロック、暗褐色粘質土混じり暗褐色砂質土（石垣込込）
 5 径13cm程の凹窪をもつた暗褐色灰色砂質土（石敷）
 6 地山ブロック混じり暗褐色砂質土
 7 暗褐色砂質土（素割水路擬方埋土）
 8 暗赤褐色粘質土（地山・部分的に黄味を帯びる）

⑧調査区

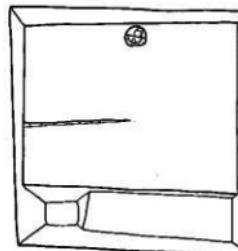


第26図 ⑤・⑦・⑧・⑨調査区実測図

90
91
9293
94
95
96

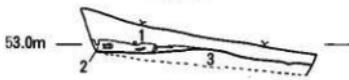
- 90 開元通寶 95 天聖元寶
91 洪武通寶 96 永業通寶
92 熙寧元寶
93 □豊□□
94 元豐通寶

⑩調査区



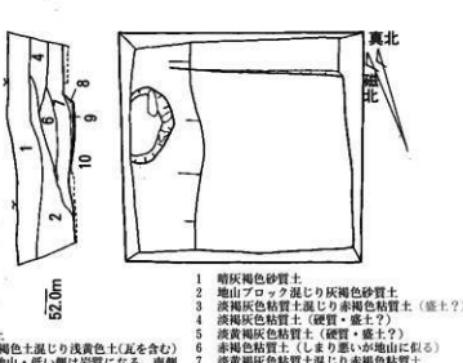
1. 暗灰褐色砂質土 (層下位は一部2層が混じり硬質)
2. 暗灰褐色土ブロック混じり赤褐色粘質土
(大小の瓦片が混じる硬質地土か?)
3. 黄褐色土 (地山・硬質・根の擾乱が多く北東側は赤褐色に近い)

⑪調査区



1. 暗灰褐色砂質土
2. 暗褐色土・暗褐色土混じり浅黄色土 (瓦を含む)
3. 暗赤褐色土 (地山・低い側は岩質になる。南側は根が多い)
柱穴埋土
P1 表土が落ち込むものと、地山ブロックが混じるものがある
P2、P3 暗灰褐色土
P4 暗赤褐色土質 (表土に近い)-磁器出土
P5 地山ブロック混じり暗灰褐色土 (検出にくく、古いものか?)

⑫調査区



第27図 ⑩・⑪・⑫・⑬・⑭調査区実測図

平成15年度調査

指定地の南に隣接する工事用道路予定地（旧状は畑）の確認調査（⑫～⑭調査区）を実施した。⑫調査区で古代の瓦片を多く含む整地土や瓦片が入る柱穴、⑬調査区で時期不明の焼土坑を確認した。古代瓦片が⑭調査区を中心にコンテナー5箱分出土した。

⑫ 2 m × 2 m 調査区（第27図）

現在の金蔵寺・国分幼稚園がある平坦地の西縁辺部にあたり、現地標高53.5mを測る。表土下で古代瓦片を含む厚さ10～15cmの赤褐色の整地土が確認できた。整地土中の瓦片は比較的大きなものから小片まで多く含まれていた。地山面は硬質の黄褐色土だが、調査区南側の層の境は、木の根の搅乱などにより判然としない。北側の地山面で赤褐色土の入る柱穴を確認した。径15cm・深さ19cm程で、瓦片が2点出土した。

⑬ 2 m × 2 m 調査区（第27図）

平坦地から傾斜地に設定した調査区で、現地標高53.3～52.9mを測る。表土下30～10cmで地山面を確認し、穴を6基確認した。これらの穴は表土に似た土が入り、磁器片が出土した穴や、瓦片が出土したものもあるが、時期は特定できない。調査区南東側には厚さ10cm程で瓦片を含む浅黄色土が堆積しており、⑭調査区で確認した整地土の西端にあたる可能性もある。調査区西側は瓦片を含む整地土は確認できず、地山面の傾斜もきつくなることから、後世の削平を受けた可能性もある。

⑭ 2 m × 2 m 調査区（第27図）

傾斜地の最も低い位置に設定した調査区で現地標高52.5～52.3mを測る。表土下には瓦小片を含む硬質の淡黄褐色灰色粘質土が厚さ20cm程で確認され、整地土の可能性がある。調査区西側ではその下に地山に似た土が厚さ12cm程で堆積し、その下で炭化物を多く含む径60cm程の円形の土坑を確認した。炭は厚さ1～4cm程で、土坑下面では厚さ5mm～1cm程の焼土が認められた。

平成16年度調査

西側崖面の浄化槽設置予定地にあたる庫裡西側の崖面（⑮・⑯調査区・崖面調査区）と庫裡解体後の跡地（⑰調査区・庫裡跡調査区）を設定した。調査の結果、⑮・⑯調査区は厚さ1.9～0.6m程の盛土を確認し、予想以上に古代の盛土が行われていたことがわかった。庫裡跡調査区では盛土上面で古代から中世の柱穴群を確認した。柱穴は小型のもので国分寺の主要施設にかかる可能性は低い。なお、遺構の検出面より下は盛土が約1.4m以上行われており、地山面は確認できなかった。いずれの調査区でも古代の瓦片が多量に出土し、崖面調査区で古代瓦片がコンテナー6箱分、庫裡跡調査区で12箱分出土した。

崖面調査区

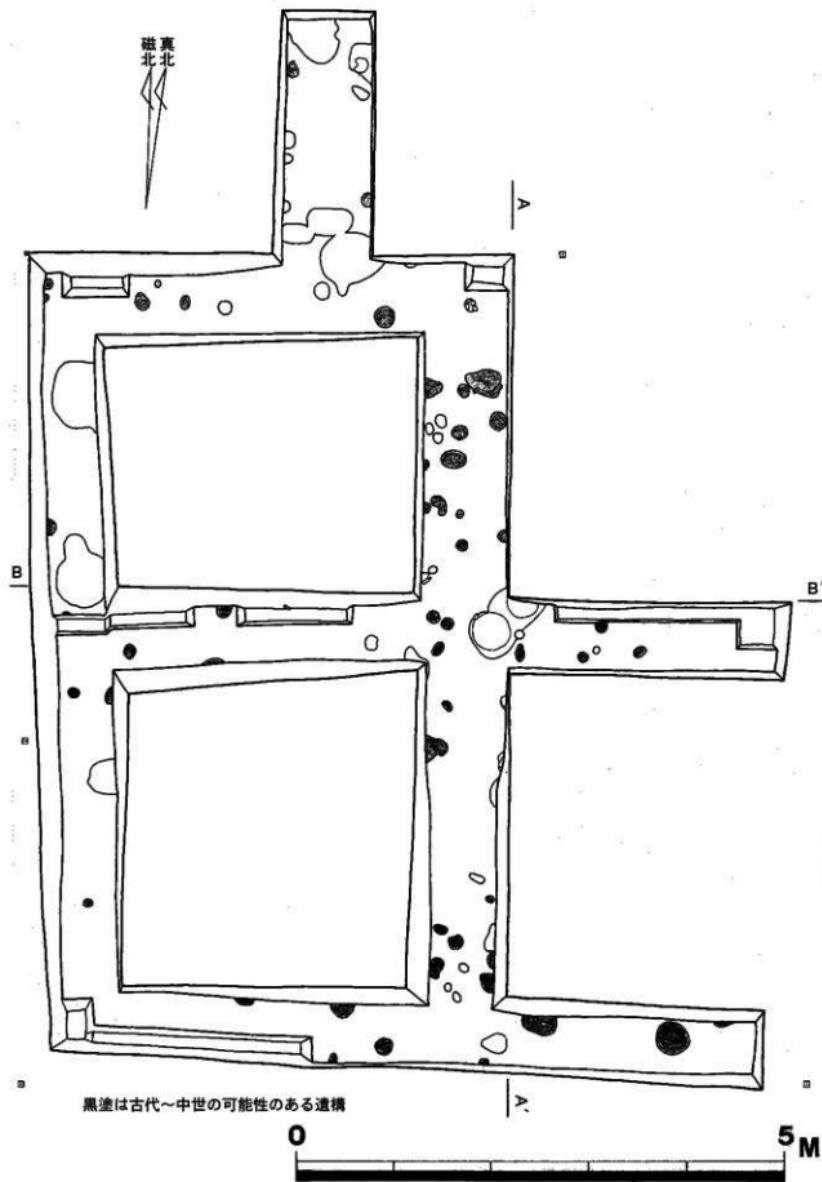
庫裡と市道との間に当たる傾斜面で旧状は藪になっていた。

⑮ 1 m × 2 m 調査区（第29図）

現地標高は52.639～52mである。表土下で古代瓦片を少量含む盛土が確認され、南西方向へ傾斜する。地山面は地表下1.8～1.5mで確認され、ほぼ平坦である。地山面は市道より約0.25m高い。

⑯ 1 m × 4 m 調査区（第29図）

現地標高は52.8～50.95mである。表土下で古代瓦片を含む盛土を確認され、西方向へ傾斜する。



第28図 ①調査区（庫裡跡）実測図

地山面は地表下2.8~1.17mで確認され、ほぼ平坦になる。地山面は市道とほぼ同じ高さにあたる。盛土中からは西側で瓦細片、東側下位(50.138m)で丸瓦広端部が出土した。

庫裡跡調査区

庫裡解体跡地は、平成14年度確認調査の状況から、レンガなどが混在する造成土が盛られていることが確認されており、解体時の立会でも古代の瓦片からガラス片まで幅広い時代の遺物が混在して出土する。造成土は昭和43年の庫裡改築時の可能性がある。

⑦調査区（第28・29図）

現地標高は53.2~53.3mを測る。調査面積は108.5m²である。造成土下には硬質の赤褐色土面があり、柱穴類・土坑などの遺構が検出された。なお、遺跡の保存のため遺構はほとんどを検出状態から少し掘下げたのみで、遺構内の詳細な調査は行っていない。

明らかに近現代の遺物を含むもの以外の遺構には、瓦片を含むもの、土師器細片を含むものがある。

調査区西側には直径50~60cmの大型の穴が確認されたが、埋土から近現代陶磁器が出土するものがある。おそらく金蔵寺の建物に伴う柱跡と考えられる。遺構を検出した赤褐色土面は東側の本堂側（標高52.8m）が高く、西側の崖面方向（標高52.3m）へ傾斜する。南北方向は標高52.7~52.8mとほぼ平坦である。遺構検出面が最も低いのは、調査区北東部である。

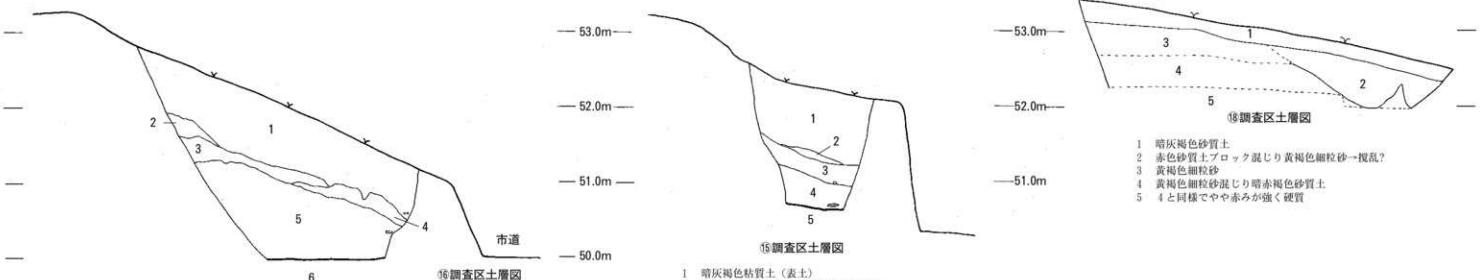
遺構検出面である赤褐色土は硬質で一見地山のようにみえる。しかし瓦細片が含まれ、粘土粒・黒色土などがみられたため、部分的な断面調査を行った。約1.9m下まで掘下げたが、下層には比較的柔らかい淡黄褐色粘土質や黒色土が確認され、明確な地山面は確認されなかった。ほぼ調査区全体が盛土の可能性がある。

平成17年度調査

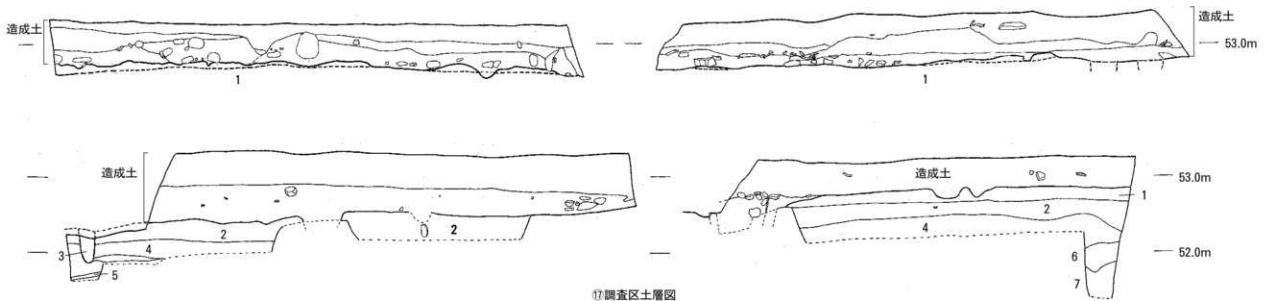
調査地は国分幼稚園西側の緩斜面で、元は畠である。これまで最も南側の調査区になる。表土で瓦が2点出土したのみで明確な遺構は確認できなかった。

⑧ 2 m × 5 m 調査区（第29図）

現地標高は53.528~52.486mを測る。表土で古代瓦片が少量出土したが、以下は20~40cmの厚さで砂が堆積している。砂の下は砂と土が混じり明確な地山面は確認できなかった。砂層の下の砂質土面が古代~中世の面に近いと想定される。地表下約1.2~0.65mまで掘り下げたが、遺構・遺物は確認されなかった。



- 1 暗灰褐色粘質土 (木の根が多く、低い側には褐色砂質土ブロック混じる)
- 2 暗赤褐色粘質土 (木の根が多く入りしがれい・やや黃味を帯び、3層より粘性強い)
- 3 黄褐色細粒砂
- 4 黄褐色細粒砂混じり暗赤褐色砂質土 (層下位より瓦片2点)
- 5 浅黄色土 (地山・硬質)
- 6 浅黄色土・淡褐色土 (根?) 混じり暗赤褐色土
(層上位は黄色味、層中位は赤色味、層下位は黄色味が強く見えるが、分層は不可。低い側は暗赤褐色土ブロックが混じり瓦片が出土_o)
- 7 暗赤褐色土混じり浅黄色土 (地山・硬質)



第29図 ⑯・⑰・⑯・⑰・⑱調査区実測図

(S = 1/50)



⑯～⑱

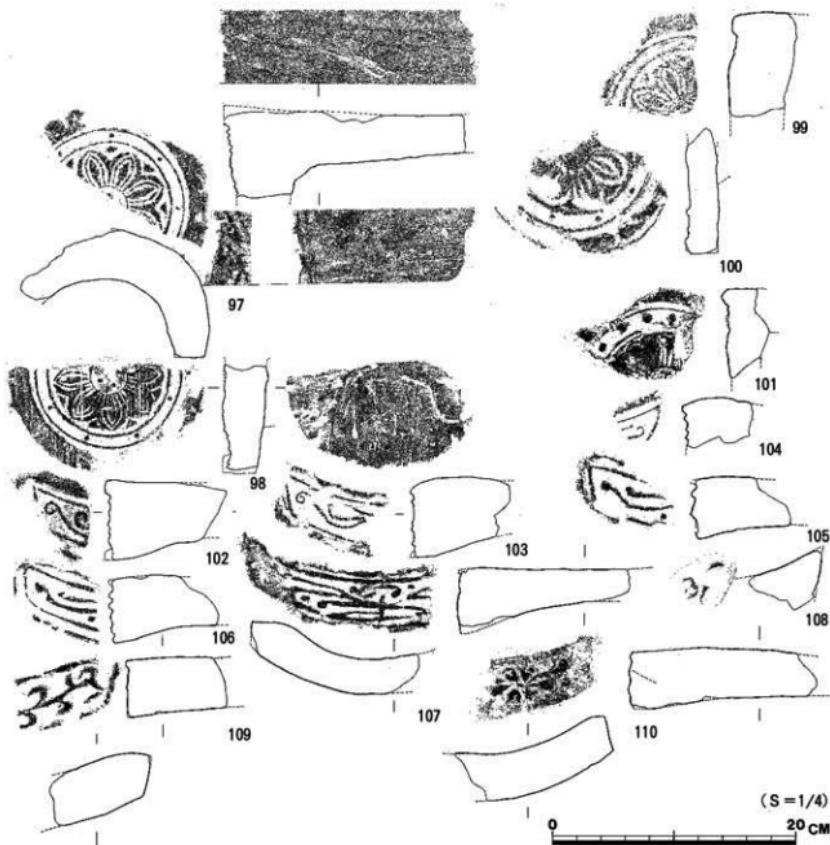
第3節 遺物

瓦類

軒瓦（第30図）

調査で出土した軒瓦はすべて破片で、全形がわかるものはない。97・98は軒丸01A B類、99は軒丸01C類、100が軒丸05類、101が軒丸21類である（軒瓦の分類は第35図を参照）。97・98の軒丸瓦は横置きの一本づくりである。97は瓦当裏側の布目が一部消えているが、凹面の丸瓦との境には明瞭に段がつき、一体で型に当てられた事がわかる。98の瓦当内面は下側がナデで消えているが布目が残り、丸瓦部はやや盛り上がっている。101は瓦当面の内側に面があり、接合式で作られている。

軒平瓦は102・103・104が軒平01類、105・106・107が軒平04類、108が軒平08B類、109が軒平07類、110が軒平12A類である。このうち108と109はそれぞれ1点しか出土しておらず、全体の形は不明である。いずれも文様が明瞭でなく、全体的に粗雑なつくりである。



第30図 出土遺物（軒瓦）

丸瓦（第31・32図）

無段、有段で2大別し、広端部と側部の面取りにより細分した。器壁が厚く、筒部が直線的になるものは有段になる可能性が高いが、器壁の厚い無段の破片も存在するため、無段、有段が明確に区別できないものは不明とした。丸瓦全体では有段のものが大半を占め、無段のものは少ないと考えられる。

丸瓦の成形は布を被せた筒状の内型に粘土板を巻き付け、繩叩き・ナデ調整のあと二つに分割する。凸面は筒部の長軸方向に繩叩き圧痕が残り、大半は横方向の丁寧なナデで繩目を残している。繩目はあまり重複せず、1回づつ整然と叩いている印象を受ける。端部に繩タキ圧痕がそのまま残る個体もある。凹面は粗い布目圧痕が残るものが大半で、布がほつれて布目がかなり粗くなっているものもめだつ。粘土板分割時の粗い糸切痕を残すものが多い。粘土筒の分割方法は内側から途中まで線を入れて分割しており、分割後未調整で分割裁面が残るものと、ケズリにより分割裁面が残らないものがある。分割裁面に軽く調整を加えたものも存在する可能性がある。分割のため内側から入れた線が一部外側まで貫通してしまい、1面取りのように見える個体もある。凹面端部を一面取りするものもある。端部は必ず一度削り、そのあとさらに面取りで2・3面になるものもある。

端部・側部の調整法は第31図のとおりである。

- a 手法 端部・側部共に1面取りのもの。
- b 手法 端部2面・側部1面取りのもの。
- c 手法 端部2面・側部2面取りのもの。
- d 手法 端部2面・側部は外側に分割裁面を残すもの。
- e 手法 端部3面・側部1面取りのもの。
- f 手法 端部は凹面側に2面・側部は外側に分割裁面を残すもの。
- g 手法 端部2面・側部1面取り、角を切り落とすもの。
- h 手法 端部2面・側部2面取り、角を切り落とすもの。玉縁側の可能性あり
- i 手法 端部3面・側部2面取りのもの。

無段式丸瓦

無段 a類（第32図・111）

端部、側部とも1面取りのものである。焼成は土師質で凸面は繩目がほとんどみえないように丁寧にナデ調整されている。凹面は布目圧痕がつくが、目が粗くほつれたようになり幅が広がっている。

無段 c類

端部、側部とも2面取りのものである。

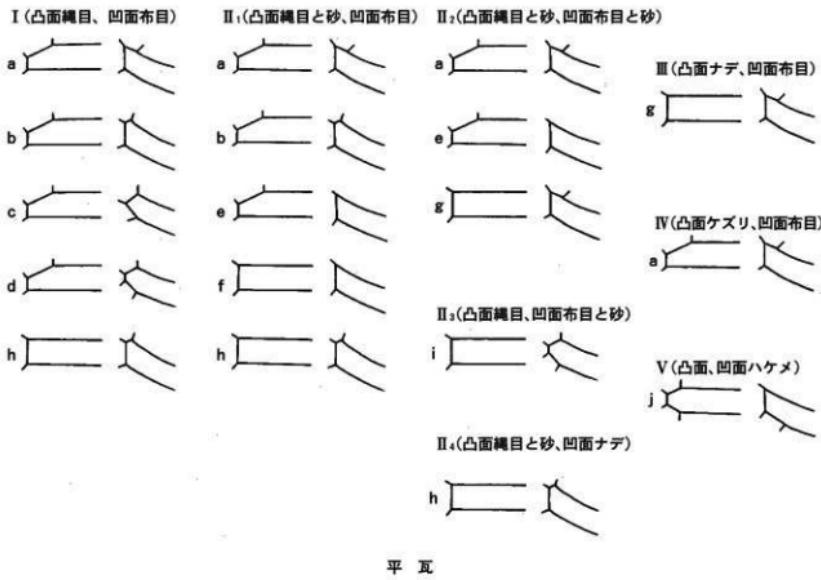
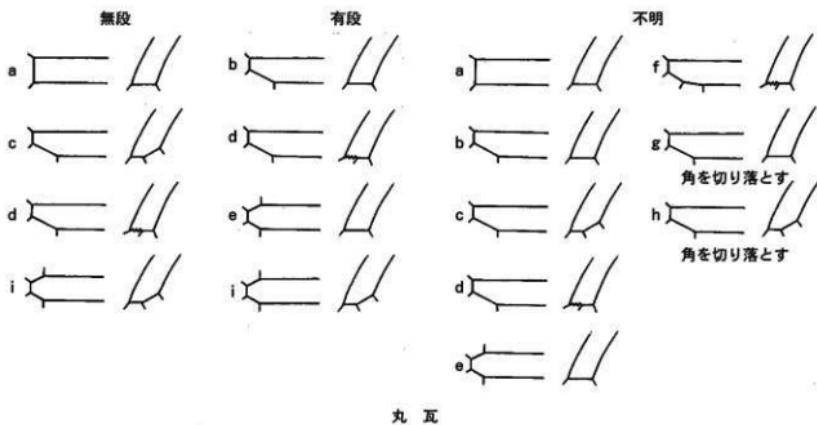
無段 d類（第32図・112）

端部を2面取り、側面は分割痕跡がそのまま残る未調整のものである。112は土師質で軟質のものである。

113は無段式丸瓦の狭端部である。先端がすぼまるため、内面には布皺の痕跡が多く見られる。

無段 i類（第17図・66）

端部を端面、凸面、凹面と3面けずり、側面は2面取りするものである。



第31図 瓦分類表

有段式丸瓦

有段式の玉縁部は外面がほぼ水平で筒部と一体に作り、段部を継ぎ足して造っている。玉縁部はナデが施されて平坦になるが、瓦窯跡出土品ではナデが充分に施されず、玉縁部に縦の繩タタキ圧痕が残るものもある。

有段 b 類（第10図・42）

端部を2面、側部を1面取りするものである。

有段 d 類（第10図・41）

端部を2面取り、側面は分割痕跡がそのまま残る未調整のものである。

有段 e 類

端部は端部面、凸面、凹面と3面削り、側部1面とりのものである。

有段 i 類（第17図・67）

端部を端面、凸面、凹面と3面削り、側面は2面取りするものである。

117・118は有段式丸瓦の段部分で、いずれも段部分はあとから粘土を貼り足して作っている。

不明丸瓦

無段式か有段式か段部が残っておらず区別できない丸瓦は不明丸瓦とした。ただし、器壁が厚く、筒部が直線的ですばりが見られないものは有段式の可能性が高い。g、h 類は有段式丸瓦の玉縁側の可能性がある。

不明 a 類

端部1面、側部1面とりのものである。

不明 b 類

端部2面、側部1面とりのものである。

不明 c 類

端部2面、側部2面とりのものである。

不明 d 類（第32図・116）

端部2面、側面は分割痕跡がそのまま残る未調整のものである。

不明 e 類

端部は端部面、凸面、凹面と3面削り、側部1面とりのものである。

不明 f 類

端部は凹面を2回削って3面、側面は分割痕跡がそのまま残る未調整のものである。

不明 g 類（第32図・114）

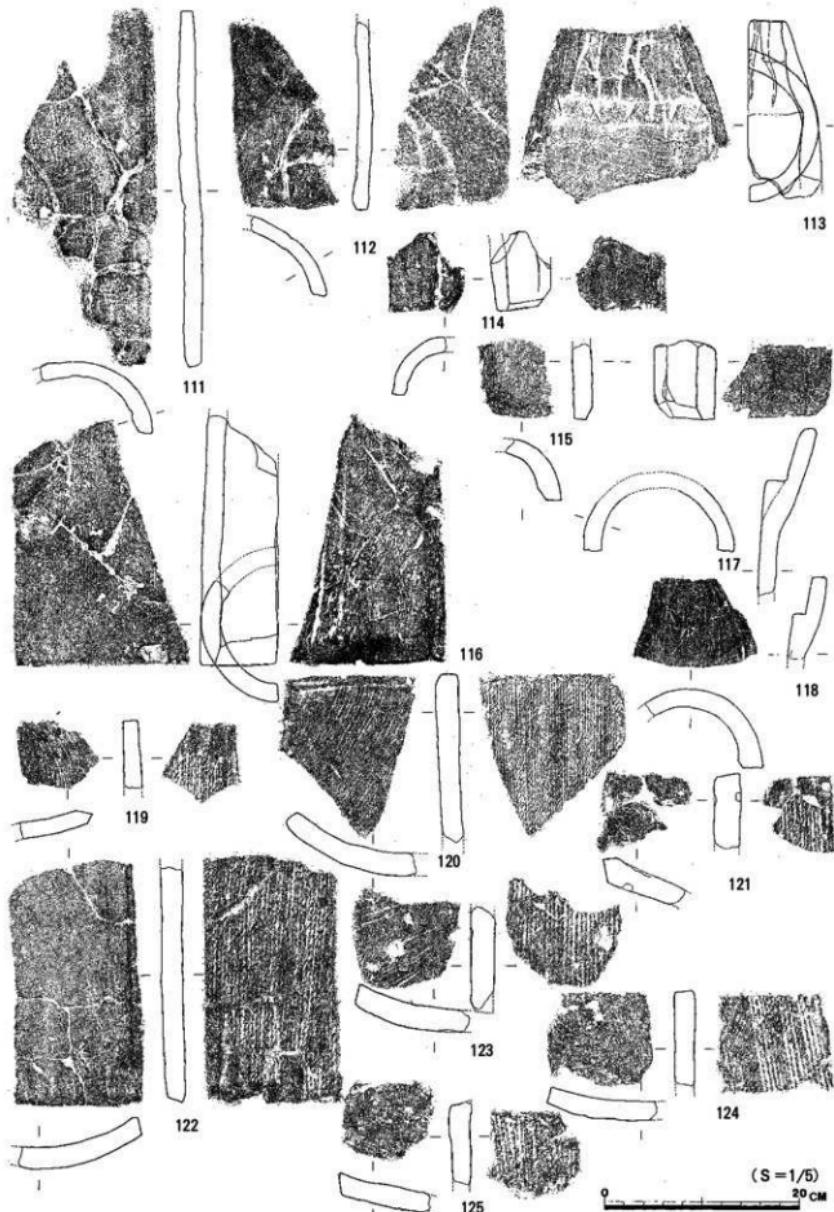
端部2面、側部1面とり、端部角を斜めに切るものである。

不明 h 類（第32図・115）

端部2面、側部2面とり、端部角を斜めに切るものである。

平瓦（第31・32・33図）

凹凸面の調整で大別し、端部と側部の面取りにより細分した。凹面は粗い布目圧痕が残るもののが大半で、布がほつて布目がかなり粗くなっているものもめだつ。凹面には粘土板分割時の粗い糸



第32図 出土遺物（丸瓦・平瓦）

切痕を残すものが多い。凹面に布端による段を残す個体があり、後述分類の I b 類、II 1-a 類にみられる。凹面に模骨痕を残す個体は確認できなかった。側面も円弧の中心に向かず、断面が鉛直方向を向くものが大半である。凸型台の上から端部をほぼ垂直に切ったと考えられる。弧深が最も大きい完形品の I b 類（第17図・70）にも端部に布端が残り 1 枚作りと考えられる。

これらから、平瓦はほとんど一枚作りの成型法であったと考えられる。成型は布を敷いた凸型台の上に粘土板を置き、繩を巻いた工具で叩き、端部・側部を整える。おそらくそのあとある程度乾燥させてから凹型台で凹面の端部・側部を整えたのであろう。繩目痕はあまり重複せず、比較的整然と叩いている印象を受ける。端部は端まできちんと叩いておらず、未調整のものもある。

また、瓦窯跡出土品は特に凹面に布端の確認できる資料が多く 1 枚作りであったことは確実だが、窯の窯壁に用いられた平瓦、軒平瓦 01 A 類（創建期）にも布端が見られ、1 枚作り成型は瓦窯跡以前、ほぼ国分寺創建期から行われている。なお、白鳳寺院である下府庵寺の瓦は国分寺造営以前までは桶巻作りと考えられ、一枚作りの技術は国分寺造営に伴って導入された可能性が強い。

端部・側部の調整法は以下のとおりである。

- a 手法 端部 2 面・側部は凹面端部を浅くナデたり削るもの。
- b 手法 端部 2 面・側部は凹面側の端部を 0.5cm 程削って 2 面取りするもの。
- c 手法 端部 2 面・側部は凹面端部から 2 回目の削りを施し、断面が三角に見えるもの。
 - b 手法 の亜流かもしれないが、見た目で明らかに異なることから分類した。
- d 手法 端部 2 面・側部は凸面から 1 回目、凹面から 2 回目の削りを施す 3 面取りのもの。
 - 面取り後にナデを施し、角が丸みをもつものもある。
- e 手法 端部 3 面・側部 1 面取りのもの。
- f 手法 端部 2 面・側部は 1 面取りするもの。
- g 手法 端部 1 面・側部は凹面端部を浅くナデたり削るもの。
- h 手法 端部 1 面・側部は凹面側の端部を 0.5cm 程削って 2 面取りするもの。
- i 手法 端部は凸面側 1 回、凹面側 1 回の 3 面取り、側部は凸面側の端を 0.5cm 程削るもの。
- j 手法 端部 3 面・側部と凸面側で 2 面取りのもの。

I 類 凸面繩叩き圧痕、凹面布目圧痕を残すものである。最も多く出土している。

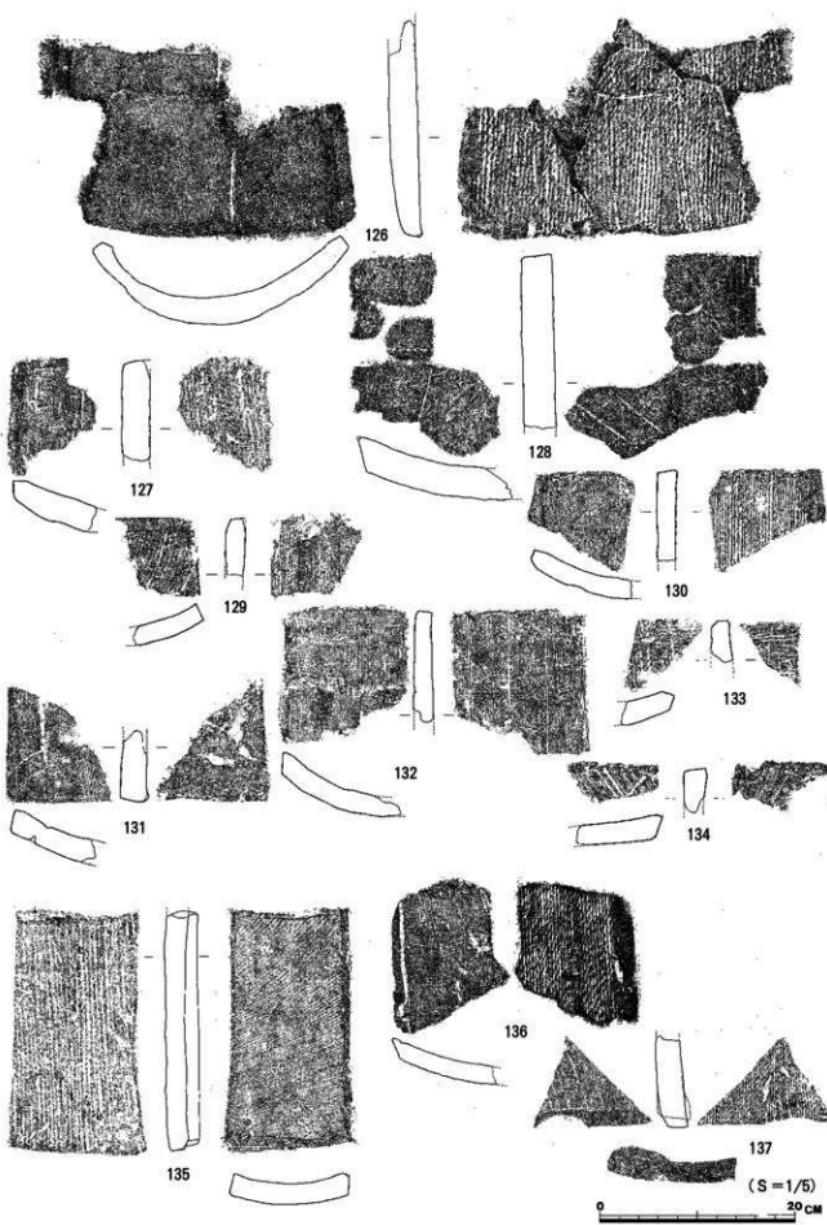
I a 類（第10図・43）

端部 2 面、側部は凹面端部を浅くナデたり、削るものである。このため断面実測図では読み取りにくいが凹面側端にやや面がある。

I b 類（第7図・24、第8図・25・第17図・70・第19図・80）

端部 2 面、側部は凹面側の端部を 0.5cm 程削って 2 面取りするものである。大きな破片でみると 2 度目の削りが広端から狭端まで完全に削れてないものもあり、部分の破片では A 1 類にみえるものも多く含まれる。軒平瓦も同様のものが見られ、瓦当面側から 2 面取りのケズリをいれるが狭端側まで切らずに途中で抜けている。明らかに 2 回目の面取り動作を行い、断面実測図で明確に表現されるものを A 2 類としている。

I c 類（第32図・119）



第33図 出土遺物（平瓦）

端部2面、側部は凹面端部から2回目の削りを施すが、A2類より深く削るため、断面が三角にみえるものである。A2類の亜流かもしれないが、見た目で明らかに異なることから別分類した。

I d類（第32図・120）

端部2面、側部は凸面から1回目、凹面から2回目の削りを施す3面取りのものである。面取り後にナデを施し、角が丸みをもつものもある。120は端部に布端の痕跡が残る。

I h類（第32図・121）

端部1面、側部は凹面を0.5cm程削って2面取りするものである。

II類　いわゆる離れ砂を用いているものである。基本的な調整は凸面綱叩き、凹面布目（ハケメのものもあり）である。砂が凸面に残るもの（II1）、砂が凹・凸面両方に残るもの（II2）、凸面に砂と綱叩き、凹面にハケメを残すもの（II3）、凸面に砂と綱叩き、凹面ナデ調整のもの（II4）に分けられる。基本的にII1類が多く、II1類は凸型台での綱叩き時、凹型台での成型時に台と離れ易くするためと考えられる。II2類は凸型台成型後に剥がれ易くするためと想定される。ただし、II2類は全面に砂が付着しておらず、II1類を作る工程で偶発的に凹面に砂がついた可能性もある。

II 1-a類

端部2面、側部は凹面側の両端を軽くナデたり削るものである。

II 1-b類（第32図・122）

端部2面、側部は凹面を0.5cm程削って2面取りするものである。

II 1-e類（第32図・123）

端部2面、側部は1面取りするものである。

II 1-f類（第32図・124）

端部1面、側部は1面取りするものである。

II 1-h類（第32図・125）

端部1面、側部は凹面を0.5cm程削って2面取りするものである。

II 2-a類（第33図・126・127）

端部2面、側部は凹面側の両端を軽くナデたり削るものである。126の凹面側部は粘土板が凹型台からはみ出た状態で叩かれているため段がつく。

II 2-e類（第33図・129）

端部2面、側部は1面取りするものである。

II 2-g類（第33図・128）

端部1面、側部は凹面側の両端を軽くナデたり削るものである。128は厚手で出土量は少ない。

II 3-i類（第33図・130）

側部は凸面から1回目、凹面から2回目の削りを施す3面取りのものである。

II 4-h類（第8図・26）

端部1面、側部は凹面側の端部を0.5cm程削って2面取りするもの。瓦窯跡のみの出土である。

III類　凸面に縦方向のナデ、凹面に布目压痕を残す。破片のみで現段階では全形は不明である。

III g類（第33図・131）

端部1面、側部は凹面側の両端を軽くナデたり削るものである。

IV類 凸面に縦方向のケズリ、凹面に布目压痕を残す。

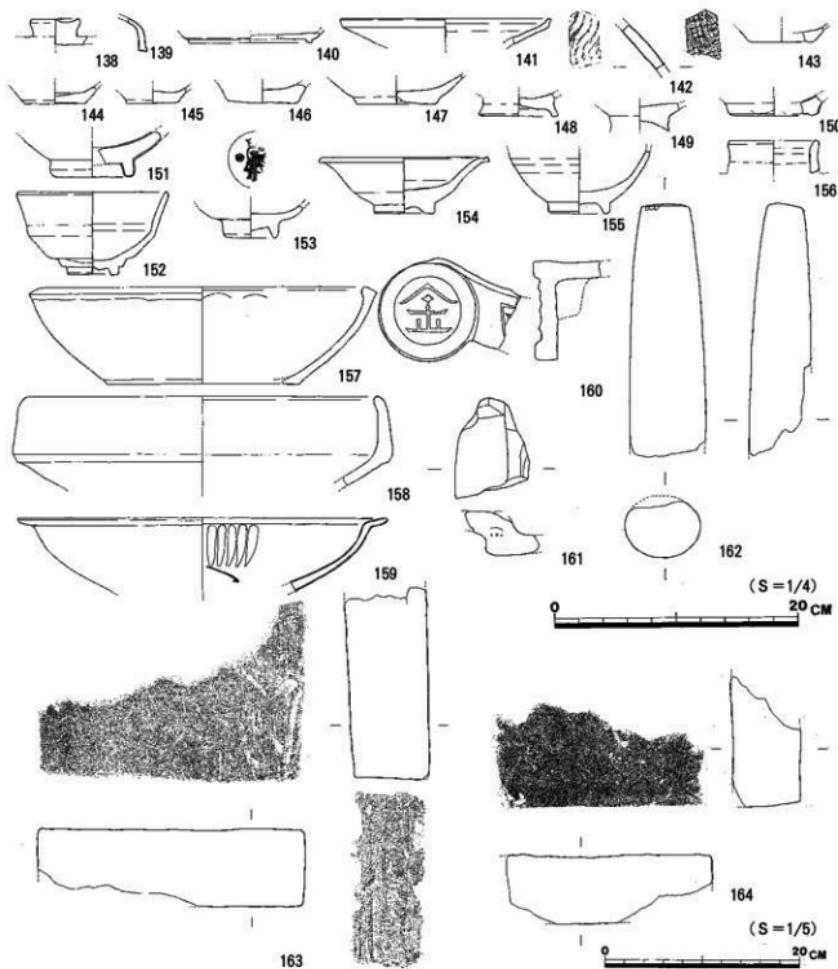
IV a類 (第33図・132)

端部2面、側部は凹面側の両端を軽くナデたり削るものである。

V類 凸面砂と繩叩き压痕、凹面は布目压痕をナデ消している。

V j類 (第33図・134)

端部3面・側部と凸面側を2面取りするものである。



第34図 出土遺物（須恵器・土師器・その他）

道具瓦・その他の瓦（第33図・135～137）

135は熨斗瓦で1点確認している。平瓦II 1 b類を2分割したもので、側部を2面取りした後に分割しているため、左右側部の面取が1面取りと2面取りになっている。このような熨斗瓦は少なくとも3面残存しないと平瓦と区別できないため、実際はもっと存在したのであろう。136は平瓦の凹面側部に布端の痕跡が残るものである。137は平瓦端部を指で塗ませたものである。

土器類・磚・その他（第34図）

138～142は須恵器、143～149は土師器である。いずれも出土量は少ない。138は大型の蓋のつまみでボタン状である。139は蓋の口縁部、140はごく低い高台の付く壺である。141は皿と考えたが、天地逆で普通に蓋の口縁部の可能性もある。142は甕体部の小片で、外面に格子叩き、内面に同心円叩きの痕跡が残る。143～147は土師器の底部で147は壺、その他は皿である。いずれも色調は灰褐色～赤褐色で古代末期～中世前期のものである。148・149は高台が付く皿になる。150は白磁碗IV類の底部で、低い削り出しの高台がつく（中世土器研究会編1995）。151は中世後期の龍泉窯系青磁碗の底部である。丸みのある高台にやや厚めの軸がかかる。高台内面は軸を搔き取っており、褐色に発色する。152・153は近世以降の可能性がある。152は天目茶碗である。おそらく肥前系陶器であろう。暗緑色の軸がかかり、高台部は厚い軸を削り落としている。高台内面は円錐状の突出した削り残しが残る。153は高台内側の軸を輪状に搔きとどており、内面見込みに人物の絵と團線が押印されている。154は肥前系陶器の溝縁皿で、内面見込みには砂目跡が4ヶ所残る。口縁は外側へ屈曲し、口縁端部内側に溝が巡る。155は黄色身を帯びた白色軸が全体にかかる陶器碗で、萩焼の可能性がある。156は須佐唐津焼の灯明皿で、濃緑色の軸が内外面の下位にかかる。157は佐野焼（防府市産）の鉢で、江戸時代後期のものである（岩崎2004・岩崎氏にご教示いただいた）。土師質で外面上位に煤が付く。体部は丸みをもち、口縁端部は内側に出る。内面はごく浅く同心円叩きの痕跡が残るが、大半はナデとハケメで消される。158は周西系の焙烙で本来は把手がつく。土師質で体部外面には煤が付着する。159は口縁が屈折し、体部内面に先の丸い蓮弁が彫られる。青磁軸をかけた後に内面下位に藍色の草文のような線が描かれており、青磁染付と考えられる。近世初め頃の肥前系磁器の折縁形大皿であろう。160は金蔵寺の軒棧瓦で來待軸がかかる。およそ大正頃の葺替用の瓦と聞いている。161は瓦の可能性があるが、全形は不明である。焼成は軟質で、屈折した破片で断面には3箇所穴があく。鬼瓦など特殊品の可能性が強い。162は磨製石斧で刃部は欠損している。全体はよく研磨されており、断面は正円に近い。磨製石斧は以前の調査でも出土している。163・164は磚である。163は中型のもので長辺には一部板目が残る。短辺はナデなどで平坦に調整されている。164は小型で全面が平坦である。

表3 石見国分寺跡出土遺物集計表

第5章 総括

第1節 瓦からみた石見国分寺跡・尼寺跡

石見国分寺跡・石見国分尼寺跡を中心に国府地区の遺跡から出土する軒瓦(石見国分寺系軒瓦と仮称)を新たに第35図のとおり分類する。これまでの分類としては石見国分寺・尼寺・瓦窯跡全体を対象にしたもの(内田1986・内田、江川1997)と下府廃寺を中心にしたもの(浜田市教育委員会1993)がある。

軒丸瓦は01から8葉單弁蓮華文、11を11葉單弁蓮華文、21を6葉複弁蓮華文、31を4葉單弁蓮華文とする。軒平瓦は01からを均整唐草文、11・12は花文を3ヶ所に配すもの(团花文)、21を列点文とした。

なお、今回の分類では破片しかなく全体が復元できないもの、資料の所在や出土地点が不明になっているものもあるため今後の補完が必要である。将来的には名称を2桁の数字と大文字のアルファベットを組み合わせ、数字の差を型式名、アルファベットを同一型式内の範の違いとして表記したい。

また、国府地区の軒瓦出土遺跡での破片数を記したが、出土地が不明確なものはその点数の末に?を付けて、石見国分寺跡=僧寺、石見国分尼寺跡=尼寺、石見国分寺瓦窯跡天井部(瓦窯天井の構築材)=窯跡天井、石見国分寺瓦窯跡(焼成室床面か)=窯跡、下府廃寺、古市遺跡、横路遺跡と表記する。

なお、金蔵寺には境内出土品(国分寺跡)・下府廃寺跡出土品が保管されているが、奈良地方など他地域の出土品も含まれており、平城宮式の軒平瓦や、横一線が入る軒平瓦などがある。出土地が記載されていないものも多く、以前紹介されていたが今回実見できなかったものもある。今回は国分寺跡出土の可能性が高いものを加えている。

軒丸瓦

8葉單弁蓮華文

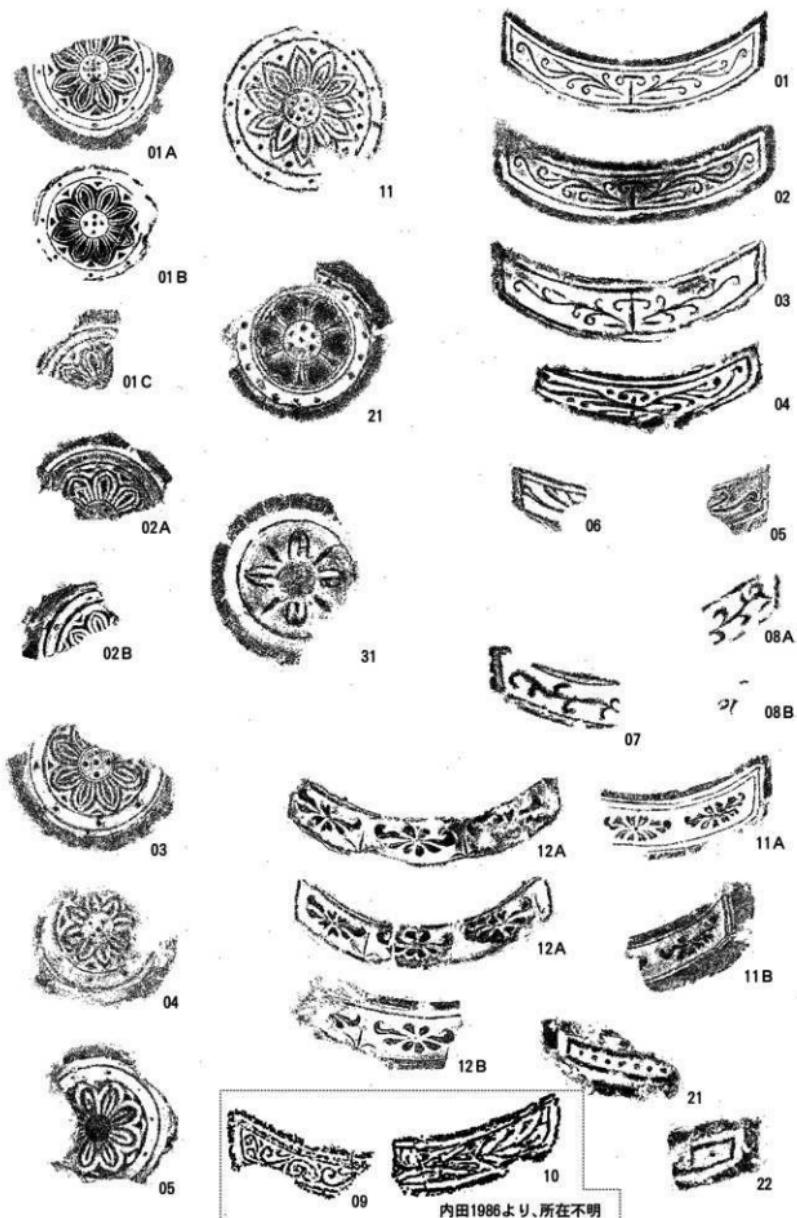
01類(僧寺13点、尼寺1点、窯跡天井2点、下府廃寺2点、横路遺跡1点)

これまで内田I a類、下府廃寺II A類とされたものである。各個体に蓮弁の線の幅や断面の丸み・瓦当文の径など微妙な差がある。現段階で同文異範は3種認められ、01A類・01B類・01C類とした。01B類は横路遺跡(土器土地区)で中世の柱穴の底面より出土している(浜田市教育委員会1997)。外縁を削り落としているため瓦当面の直径は12cm程度他のものに比べて小さい。01C類は僧寺で1点出土しており、蓮弁がやや丸みを持っている。大半が01A類である。

瓦当面の直径は16.6cmで内区径は10.3cm、中房径は3.2cmである。全体的に線が鋭く、立体的で丁寧なつくりである。中房は平坦で1+4の蓮子を配す。蓮弁は中央が盛り上がり、線が2重に表現されて先端は尖る。子葉は蓮弁の形にあわせて中広、先細りになる。間弁は三角形で中房まで延びずに独立している。外区は2本の圈線の間に、間弁に対応して珠文が8個めぐる。瓦范は外縁側面に范型のあたりがみられるものがあり、側面に0.5cm程被っている。

瓦当裏側の丸瓦部との接合部に型にあてたような明瞭な段があり木目が見られるものと布目圧痕を残すものがある。いわゆる1本作りと考えられるが、縱置型の場合の布を袋状にして台に被せたような絞り圧痕は確認できない。横置型の1本作りと考えられるが、布が木型上部(丸瓦部凹面)にだけ被るものと瓦当裏面まで被せるものがある。瓦当裏面に布を折り返した痕跡も見られず、詳細な成型法の復元は今後の課題である。

丸瓦部の凸面は粗く単位の長い縦のヘラ削りを施し、側部は2面取りしている。焼成は土師質のものもあるが、大半が須恵質で硬質である。



第35図 石見国分寺系軒瓦 (S = 1 / 5)

02類（僧寺3点、尼寺2点）

これまで内田I b類とされたものである。01類に比べて外区内縁の幅が狭く、文様が平坦で蓮弁もやや角張った幅広である。外区の珠文の位置で02A類と02B類にわける。02A類は間弁位置に対応するが02B類は蓮華文頂部に対応している。02B類は子葉も細い。瓦当面の直径は17.1cmで内区径は9.5cm、中房は不明である。瓦当裏側の丸瓦部との接合部には型にあてたような明瞭な段が見られ、いわゆる1本作りにより成型したものである。焼成が良く灰白色で硬質である。

03類（僧寺1点、尼寺1点）

現在確認できるものは尼寺出土の1点のみだが、島根縣史（野津1925）、風土記の丘資料館図録（島根県立八雲立つ風土記の丘1982）などには、国分寺出土品として瓦当部の完形品が掲載されている。このことから僧寺でも出土した可能性が強い。瓦当面の直径は復元で18cm、内区径は11.2cm、中房径は3.9cmである。01・02類に比べ一回り大きく、瓦当の厚さは薄い。中房は2重の圓線で囲まれている。焼成は土師質である。

04類（尼寺2点）

これまで内田I d類とされたものである。尼寺のみ確認されている。同文異范は2種認められる。01・02類に比べ蓮弁が小さく単純化されている。中房は不明だが珠文が1個は確認できる。瓦当面の表裏に離れ砂が付着している。胎土分析の結果、石見国分寺瓦窯跡、久本奥窯跡の領域からは外れており、別産地と想定される（三辻1995）。焼成は土師質と須恵質のものがある。

05類（僧寺2点、尼寺1点、下府廃寺13点）

これまで内田I c類、下府廃寺II B類とされたものである。僧・尼寺では少なく、下府廃寺で多く出土している。蓮弁の先端部が丸みをもち、細長い。中房も盛り上がり、他の8葉單弁蓮華文の軒丸瓦（01～04類）とは異なっている。外区の珠文は復元では9個になる。中房は下府廃寺出土品では蓮子のないもの（II B a類）と中央に棒状工具で刺突したもの（II B b類）に分けられている。焼成は土師質だが、下府廃寺出土品には須恵質のものも見られる。

11葉單弁蓮華文

11類（僧寺8点）

これまで内田II a類とされたものである。僧寺のみ出土している。瓦当面の直径は16.9cmで内区径は13.3cm、中房径は4.1cmである。瓦当面は凸レンズ状にやや中心へ向けて丸みをもつ。中房は平坦で1+4の蓮子を配す。蓮弁は直線的な二重線で表現され、蓮弁の子葉は瓦当中心部を継断する下方の位置の蓮弁にのみ独立して表現される。間弁の位置に珠文を11個巡らせる。外区も珠文を11個巡らせるが、外縁は1.5cm程と狭い。珠文がつぶれて外縁や界線にくっつく場所がある。瓦当部と丸瓦部は接合式で丸瓦部に約0.7cmの溝を造り、丸瓦部は凸面端部付近をつまんで突起を作り出している。凹面には布目压痕が残る。これらを接合後に凹凸両面に補強粘土を加え、凸面はケズリ、凹面は接合部に継方向に単位の長いナデを施している。側部は接合後に面取りを行っていない。焼成は土師質だが、瓦質に近く焼成が悪いものも多い。

6 葉複弁蓮華文

21類（僧寺3点、窯跡1点）

内田II b類とされたものである。瓦窯跡の焼成室床面付近から出土したほぼ完形のものがある。他の資料は僧寺出土である。瓦当面の直径は16.8cmで内区径は11cm、中房径は4.2cmである。中房は平坦で1+6の蓮子を配す。間弁は中房から真っ直ぐ延びて開く。内区は2重の圈線で囲まれ、外区は珠文を18個巡らせる。

瓦范は外縁側面に范型のあたりがみられるものがあり、側面に0.4cm程被っている。瓦当部側面に指頭で1.5cm程凹ませて接合溝とし、端部を2面、側面を1面取りした丸瓦部を接合している。接合後に凹凸両面と側部も包むように多量の補強粘土を加えるが、なで付けるのみでケズリなどの仕上げを行っておらず、丸瓦部の側部も面取っていない。全体的に雑なつくりの印象をうける。焼成は土師質で瓦窯跡特有の赤みを帯びた褐色を呈している。破片では瓦質に近く焼成が悪いものもある。

4 葉單弁蓮華文

31類（僧寺1?点、窯跡表採1点）

内田II c類とされたものである。瓦窯跡で表採されているが、その窯で焼かれた製品かは断定できない。他の資料は僧寺出土の可能性がある。瓦当面の直径は17cmで内区径は12cm、中房径は4.6cmである。中房は平坦で中央に蓮子が1個確認できるが、他は残りが悪く不明である。蓮弁は丸みをもった子葉のある単弁4葉と太線状の間弁4を配している。なお、現存の2個体とも瓦当中心部を縦断する上方の弁の彫りが甘く、同范と考えられる。内区は1本の圈線で囲まる。外区に文様はない。

瓦当裏面は平坦で型にあてたようにみえる。1本作りにより成型した可能性がある。瓦当文様が瓦当面の円の中心からずれているものがあり、雑なつくりの印象をうける。焼成は土師質と瓦質のものがありいずれも焼きが悪くもろい。

軒平瓦

均整唐草文

01類（僧寺9点、尼寺2点、窯跡天井3点、下府廃寺6点、横路遺跡1点、江津市宮倉遺跡1点）

内田I c類、下府廃寺II A類とされたものである。同文異范は3種ほどある。浜田市に隣接する江津市宮倉遺跡からも同文の可能性のある破片が出土している。02類との差は唐草2単位目の上向きの子葉が長く、脇区の角度が鋭角ぎみになる。線も全体的に鋭い。将来的にはさらに細分できる可能性がある。瓦当面の上弦幅は28.0cm、高さ9.3cm、内区幅6.3cm、弧深4.8cmを測る。中心飾の横線は縦線を下巻きに囲む。唐草文は中心から広がる下巻きの主葉から下向きの子葉、上巻きの支葉、下巻きの支葉2本、上向きの子葉、上巻きの支葉と派生し全体で3回転させている。内区は界線で囲まる。

平瓦部の凹面調整は瓦当面側を横方向に削り、狭端部側は布目痕がそのまま残る。凸面は瓦当面側を横方向に削って、あとは狭端部方向への削りで軽く段のつく曲線顎になる。側部は削りで整えている。なお、瓦窯跡天井出土品には凸面狭端側に縦の繩叩き痕をそのまま残し、凹面に布端が残るものがある。1枚作り成型の平瓦を基に造った軒平瓦である。

横路遺跡（浜田市教育委員会1997）と江津市宮倉遺跡（江津市教育委員会1993）で出土している。

02類（僧寺3点、尼寺5点、窯跡天井1点）

内田I b類とされたものである。同文異范は3種認められる。01類との差は唐草2単位目の上向きの子葉が短く上向きに出る点、脇区の角度である。范の彫りが浅いためか01類に比べ線が丸いのも特徴である。瓦当面の上弦幅は28.0cm、高さ9.3cm、内区幅6.3cm、弧深4.8cmを測る。

瓦当側の凹面は横方向の削りと縦方向の削りで曲線彫を造り、凸面は瓦当側を削る。狭端部は布目を残し、側部は削りで整えている。

03類（僧寺3点、尼寺1点）

内田I d類とされたものである。瓦当面の上弦幅は25.9cm、高さ6.7cm、内区幅4.2cm、弧深5.8cmを測る。01類、02類に比べ、全体に唐草文が簡略化され、左右対称にならない。また中心飾の縦線が横線の上につき抜ける。外縁はなく、スタンプの様に瓦当面に型を押し当てただけの可能性がある。

瓦当側の凹面は横方向の削りと縦方向の削りで曲線彫を造る。凸面は瓦当側を削り、狭端部は布目を残している。側部は削りで整えている。焼成は土師質と須恵質のものがある。

なお、凸面に横方向の朱線がみられるものがある。

04類（僧寺6点、下府廃寺8点）

内田I e類、下府廃寺II B類とされたものである。下府廃寺で多く出土している。瓦当面の上弦幅は24.5cm、高さ5.7cm、内区幅3.5cm、弧深3.4cmを測る。03類に比べ、さらに唐草文が鈍く簡略化されている。線の太さもこれまでになく太く、彫りも深い。文様も左右非対称になり、珠文が中心飾横線の左右と左側の唐草文下にはいる。

平瓦部の凹面は瓦当面側を横方向に軽く削り、狭端部側は布目痕がそのまま残る。凹面側端部は薄く削っている。凸面は狭端部方向への削りを施し、段のつかない曲線彫になる。側部は削りで整えている。焼成は土師質のものと灰白色で硬質のものがある。

05類（僧寺1点）

瓦当面の脇区しか残っておらず全体は不明である。瓦当の高さは5.2cmを測る。線が浅く丸みをもっており、ややくずれた唐草文である。脇区縁から唐草文にかけて范傷らしき横線がある。范型がずれて瓦当面に当てられたようで、上面と側面は外縁がない。

平瓦部の凹面は布目痕と粘土板からの分割時の糸切り痕がそのまま残る。凹面側端部は薄く削っている。凸面は瓦当面側を横方向に削り、狭端部方向への削りを施すため、軽く段のつく曲線彫になる。側部は削りで整えている。焼成は土師質だが硬質である。

06類（僧寺1点）

瓦当面の脇区しか残っておらず全体は不明である。瓦当の高さは5cmを測る。主葉の唐草と子葉の唐草、支葉が確認できる。主葉と子葉の先端は丸めて輪状に表現しているのが特徴で、唐草文の形骸化が進んでいる。内区は界線で囲まれるが、主葉・子葉・支葉とともに界線に接しており、区画内に文様が収まっていない。瓦当面が垂直にならず、雑なつくりの印象を受ける。

平瓦部の凹面調整は瓦当面側を横方向に軽く削り、狭端部側は布目痕がそのまま残る。凹面側端部は斜めに0.7cm程削る2面取りである。凸面は削りを施すが段のつかない顎になる。側部は削りで整えている。焼成は淡灰色で土師質である。

07類（僧寺1点）

瓦当面の脇区しか残っておらず全体は不明である。瓦当の高さは5.4cmを測る。全体に焼成が悪く、文様も判然としないが、3回転する蕨手状の唐草文様が確認できる。文様の先端は下向きに巻く。下巻きの主葉から短く子葉が上下に巻き、内区は界線で囲まれる。焼成は悪く黒灰色を呈し、軟質である。

08類（僧寺2点）

瓦当面の脇区しか残っておらず全体は不明である。小片だが、08A類とやや文様が小さい08B類に分けられる可能性がある。蕨手状の唐草文様の先端が上下2方向へ開いて巻くのが特徴である。瓦当の高さは5.4cmを測り、08A類は瓦当面に砂が付着する。削りによる顎は造られず、凹面側も直線的である。全体に焼成が悪く、文様も判然としない。主葉から短い子葉が上下に巻く。08A類は界線がなく、そのまま外縁になる。焼成は悪く黒灰色を呈し、軟質である。

09類（僧寺1?点）

内田Ia類とされてきたものである。資料が実見できず、詳細は不明である。発掘調査では出土していない。中心飾から左右に5回転する均整唐草文とされ、平城宮式瓦の影響をうけたものとされている。

10類（僧寺1?点）

内田IIa類とされてきたものである。資料が実見できず、詳細は不明である。発掘調査では出土していない。木葉状で反転しない均整唐草文とされている。

花文を3ヶ所に配すもの（花葉散布文・団花文）

11類（僧寺1?点、尼寺3点）

内田IIb類とされてきたものである。僧寺からは細片が確認できるが、尼寺に多い。瓦当面の上弦幅は26.7cm、高さ4cm、内区幅3.6cm、弧深4.7cmを測る。複弁8葉の花文を3ヶ所に配し、内区を圓線で囲む。瓦当面に離れ砂が見られるものがある。内区を囲む界線が2本の11A類と上下の界線が途中で消え、外縁が広い11B類に分けられる。

いずれも瓦当面を押し当てた後に外区を切り落として低くするのが特徴である。平瓦部の凹面は横方向に削るもの、布目痕と粘土分割時の糸切り痕がそのまま残るものがある。凹面側端部は未調整のものや斜めに1cm程削る2面取りのものがある。凸面は瓦当面側を横方向に削り、狭端部方向への削りを施すため、軽く段のつく曲線顎になる。側部は削りで整えている。焼成は須恵質である。

12類（僧寺 6 点、窯跡 2 点）

これまで内田II c類とされてきたものである。瓦窯跡床面から出土したとされており、そこで焼かれた可能性が強い。他は僧寺から出土している。外区がない11A類と、下の界線がなく外縁がある11B類に分けられる。瓦当面の上弦幅は25cm、高さ5.3cm、内区幅4.4cm、弧深4.3cmを測る。8葉の花文を3ヶ所に配す。花文は中心のものは上下の弁が複弁だが、脇の花文は単弁である。花文の間にある3葉文は欠損しているものが多いが、花文の間と右端脇の3ヶ所に配置され、左端脇にはないようである。内区は圓線で囲む。瓦当面には離れ砂が一部付着する。スタンプ方式で范を押し当てたと考えられる。平瓦部の凹面調整は瓦当面側を横方向に粗く削り、狭端部側は布目痕がそのまま残る。端部は薄く削っている。凸面は狭端部方向への削りを施すため段のつかない曲線顎になる。側部は削りで整えている。焼成は土師質で窯跡特有の赤みを帯びた褐色を呈している。

なお、凸面に横方向の朱線がみられるものがある。

列点文

21類（僧寺 1 ? 点、下府庵寺 4 点）

下府庵寺III A類とされてきたものである。珠文が7つ残る。金蔵寺・資料館所蔵品に確認できる。国分寺出土と断定できるものはないが、次の22類との関係から分類に入れておく。

22類（僧寺 1 点、下府庵寺 5 点）

これまで内田II d類、下府庵寺III B類とされてきたものである。下府庵寺に多い。瓦当面の脇区しか残っておらず全体は不明である。瓦当面の高さ6.1cm、内区幅4.4cm、弧深4.3cmを測る。珠文の数は不明だが、下府庵寺では4.5cm程の間隔で並ぶもの（III B類）と密に1.5cm程の間隔で並ぶもの（III A類・前述の21類）に分けられている。調整は不明だが、軽く段のつく曲線顎になる。焼成は土師質で淡褐色を呈し、断面は黒色になる。胎土分析の結果、石見国分寺瓦窯跡、久本奥窯跡の領域から外れている（三辻1995）。

石見国分寺系軒瓦の出土破片数を表4にまとめた。最も出土が多いのは軒丸01A類・軒平01類で、創建期瓦と考えられる。同系統の文様の組み合わせから軒丸01・02類と軒平01・02類がセットで用いられたのであろう。この創建期瓦は国分寺・尼寺以外では、下府庵寺・横路遺跡・江津市宮倉遺跡で出土しており、石見国分寺系軒瓦では最も幅広く分布している。

なお、これまでの分類では創建期瓦として平城宮式の影響を受けたとされる軒平瓦09類（内田I a類）が挙げられていたが、金蔵寺の所蔵資料は他地域の瓦も含み、今回は実物も実見できなかった。これまでの発掘調査でも出土例もないため、本報告でその位置づけは行わなかった。軒平瓦10類（内田II a類）も同様である。

創建期軒瓦の文様系統は、軒平瓦を平城宮系の影響下にあったとする説（内田1986・亀田1990・内田、江川1997）、軒丸瓦を伯耆国分寺系とする説（森1974）、越中国分寺系とする説（梶原2002）がある。

創建期瓦の軒丸瓦の8葉單弁蓮華文と軒平瓦の均整唐草文はその後変化していく。軒丸瓦は瓦当直径が大きくなり中房圓線が2重になる03類、単純化した04類がある。しかし、04類は尼寺のみの出土で、胎土もこれまで見つかった瓦窯とは異なる。軒丸03・04類は出土量が少なく、あまり生産されなかつたのであろうか。軒平瓦をみると、03類は比較的創建期の文様を踏襲しているが、線が難になり、中心のT字飾りが上に抜けるようになる。05・06類は文様がかなり崩れしており、僧寺で

各1点のみ見つかっている。巻手状の唐草文様の07・08類も同様に量が少なく、焼成・造りが雑なものが多い。

軒丸05類と軒平04類は石見国分寺・尼寺と同じ国府地区に所在する下府廃寺で多く出土する。珠文を配す軒平瓦21・22類も同様で、併せて下府廃寺系軒瓦とも呼べる一群である。これらを下府廃寺所用瓦の転用と考える説もある（梶原2005）。軒丸05類は、内区の中房が盛り上がる細長い花弁の蓮華文は下府廃寺系の軒丸瓦、間弁と珠文を配す外区は国分寺系軒丸01類から影響を受けて新たに成立したと考えられる。軒平04類の退化した唐草文も国分寺系軒平01類が祖形であろう。国分寺造営以前からあった下府廃寺系の文様系譜に国分寺系の文様が一部取り入れられたのであろうか。

詳細な時期は不明だが、その後軒丸瓦では11葉單弁蓮華文（軒丸11類）・6葉複弁蓮華文（軒丸21類）・4葉單弁蓮華文（軒丸31類）、軒平瓦では花文を3ヶ所に配すもの（軒平11・12類）が新たに加わる。軒丸11類は国分寺のみで出土し、軒平11類は尼寺に多い。これらの軒丸瓦はいずれも接合式で、創建期の軒瓦のような一本作りではなくなる。

石見国分寺瓦窯跡で窯壁に用いられた軒瓦は軒丸瓦01類、軒平瓦01、02類である。窯跡の床面付近から出土し、この窯で焼成されたと考えられる軒瓦は、軒丸21類と軒平12類であり、平瓦の文様構成から朝鮮半島（新羅系）の影響を受けたものとして注目されている（亀田1990・1993）。平安時代前半頃に石見国分寺へ瓦を供給したことがわかる。軒丸31類もこの時期と考えられるが、一本作りで造られている。平安京で承和元年（834）以降に新たに出現した一本づくり軒丸瓦（近藤1985）の影響が想定される。この時期より後に瓦生産は確認されず、国分寺の維持管理があまり行われず、

		国分僧寺		国分尼寺		国分寺瓦窯跡		下府廃寺		横路遺跡 (遺構に伴わない)		江津市 宮倉遺跡	
軒丸瓦 分類	軒平瓦 分類	軒丸瓦	軒平瓦	軒丸瓦	軒平瓦	軒丸瓦	軒平瓦	軒丸瓦	軒平瓦	軒丸瓦	軒平瓦	軒丸瓦	軒平瓦
創建期（8世紀中頃） 奈良時代	01A	01	12	9	1	2	2 (窯壁)	3 (窯壁)	2	6	1	1	1
	01B										1		
	01C		1										
	02A	02	2	3	2	5	1 (窯壁)						
	02B		1										
	03	03	1?	3	1	1							
	04				2								
	05	04	2	6	1				13	8			
	06		1										
	07		1										
平安時代初期 (9世紀頃)	08A		1										
	08B		1										
	11A		1		2								
	11B				1								
	11		8										
	21	12A	3	5			1 (他成品)	2 (他成品)					
		12B		1									
	31		1?				1 (表作品)						
		21		1?						4			
		22		1						5			

表4 石見国分寺系軒瓦出土破片数（点線は組み合う軒瓦）

衰退していく様相が伺える。

丸瓦・平瓦の分類は第4章・第3節で述べたが、今回の調査で遺構から出土し、廃棄時期が伺えるものを表5にまとめた。ここでの廃棄時期は瓦が屋根に葺かれた後に廃棄され、後の造成などでさらに混在した時期までも含んでいる。

丸瓦は無段式と有段式があるが、量としては圧倒的に有段式が多い。分類上は不明としたものも、ほとんどが有段式であろう。最も普遍的に確認されている丸瓦は不明（おそらく有段）d類で、端部2面取り、側面は分割痕跡がそのまま残る未調整のものである。

平瓦はI a類（凸面縄叩き圧痕、凹面布目圧痕を残し、端部2面、側部は凹面端部を浅くナデたり、削るもの）とI b類（凸面縄叩き圧痕、凹面布目圧痕を残し、端部2面、側部は2面取りするもの）が最も普遍的で、II a類（凸面縄叩き圧痕と離れ砂、凹面布目痕を残し、端部2面、側部は凹面端部を浅くナデたり、削るもの）も多く見られる。また側部が3面取りのI d類がやや後出的である。これまで繰り返し述べてきたが、創建期より基本的に一枚作りで造られ、離れ砂（II類）も当初から用いられている。

近隣の瓦生産を見ると、江津市久本奥窯跡では瓦陶兼用の地下式登窯が調査され、7世紀後半に軒丸瓦と鶴尾（第一床面）、8世紀後半頃に丸瓦・平瓦が焼かれている（島根県教育委員会1995）。

丸瓦はI～III類、平瓦はI～II類に分けられている。丸瓦は凸面をケズリ（I類・無段式）や縄叩きをそのまま残すもの（II・無段式、III類・有段式）で石見国分寺に同種品の出土例はない。平瓦は側部断面が円周方向を向くもの（I類・離れ砂・1枚作りか）、側部断面が鉛直方向を向くもの（II類・1枚作りか）がある。石見国分寺出土品に似ているのは側部断面が鉛直方向を向く平瓦II類だが、法量を比べると久本奥窯跡出土品がやや幅が大きく、端部、側部調整も異なるようである。久本奥窯跡の7世紀後半の軒丸瓦と鶴尾は下府廃寺へ供給された可能性があるが、8世紀後半の久本奥窯跡で焼成された丸瓦・平瓦は石見国分寺へはあまり供給されなかつたと考えられる。

石見国において国分寺以外で国術系瓦（石見国分寺系軒瓦）を用いた補修型寺院（菱田2002）は下府廃寺のみで、那賀郡を代表する寺院として高い位置づけにあったと考えられる。現段階では石見国の他の寺院跡はいずれも非補修型寺院で軒瓦の種類も少なく、大規模な補修などを行ったものは確認されていない。国分寺造営以前の7世紀後半～8世紀前半頃は浜田市下府廃寺（那賀郡伊甘郷）、江津市久本奥窯跡（那賀郡都農郷）、浜田市旭町重富廃寺・瓦窯跡（那賀郡都於郷）、大田市天王平廃寺（安濃郡波瀬郷）から同文系の鋸歯文を巡らす軒丸瓦が出土し、寺院間の繋がりがみえる（林2000など）。これに対し、国分寺造営以後は国術系軒瓦の動きは那賀郡沿岸部（現在の浜田市東部・江津市西部）に限られる。瓦から見ると石見の国分寺造営と維持は主に国府の所在した那賀郡を中心に他国からの技術・工人の導入（平瓦1枚作り・瓦当文様・平窓など）と、それに影響を受けた在来（下府廃寺系）の造瓦組織によって行われたと想定される。なお、国分寺造営以後は那賀郡から他の郡の寺院などへ丸・平瓦を供給した可能性もあり、今後は改めて各瓦消費地の分析が必要であろう。

第2節 石見国分尼寺跡について

今回の調査では国分寺境内に近いT1北側で溝や柱穴、T2で瓦溜を確認した。このことから石見国分尼寺跡の中心は現在の国分寺境内と考えられる。T1北側の溝は土師器から平安時代後期（11世紀代）頃と考えられ、東西方向に走ることから、区画溝の可能性もある。ちょうど現在の国分寺の土地と民地の境にあたる。

T 1 の中央部では遺構は確認できなかったが、かつて誕生釈迦仏立像が出土したことから後世にかなり削平された可能性もある。T 1 南側の谷の造成は上層に古代瓦片を少量含み、国分尼寺造営中かそれ以後の寺域造成の可能性があるが断定はできない。

現在は北側の近世山陰道から石段を登り寺へ入るが、古代寺院が南面することを考慮すると、本来は石見国分尼寺へは南側から入っていたと考えられる。現地形では尼寺のある平坦面と南側の谷部とは約 7 m の比高差があり、門や階段が備えられていた可能性が強い。現在も南側の丘陵下には小道が通じており、南側から尼寺への入り方は伽藍中軸線にも関わる今後の検討課題である。なお、今回の略測により石見国分尼寺跡の所在する丘陵は最大南北約 55 m の平坦地があり、今後の寺域検討の基礎資料になる。

平成 17 年 6 月に現在の国分寺本堂が解体され、本堂の基壇上の礎石が見えるようになった。中に大型の石がみられ、国分寺本堂の礎石は国分尼寺の礎石を割って転用したと伝えられる点もあり注意しておく必要がある。今後は基本的な測量など、より詳細な調査を行う必要がある。

第 3 節 石見国分寺跡について

今回の調査では伽藍に関する遺構は確認できなかった。多くの古代瓦と小規模な柱穴群などが見つかり、現在の寺がある平坦地のおよそ西半分は盛土によって平坦にされていた。

中国である石見国の国分寺の規模を知る上で参考になるのは、『延喜式』(927 年完成) に石見の国分寺に料として出奉利幅が 2 万束与えられていることである。大国の出雲国分寺には 4 万束、小国の隱岐国分寺には 5 千束が与えられており、国の等級による国分寺の規模をうかがう一指標になる。出雲国分寺はかつて方 2 町（約 218 m）の寺域とされていた。近年の調査で区画溝が確認され、南北は約 188 m で方 2 町よりやや狭くなる（松江市教育委員会 2004）。

石見国分寺は塔跡が真北基準で造られており、寺域を決める目安となる。現状では国分幼稚園と東側の墓地がある丘陵の間を基点とすれば、南北方向には最大約 110 m の平坦地がある。西側は農地改良工事などで大きく削平されている。現段階では概ね方 1 町（約 103 m）の寺域が想定されるが、正方形の寺域をとる場合はさらに小さくなる。現状では寺域の西半分は盛土による平坦地であり、遺構検出面は西側へ傾斜している。大規模な盛土を行って国分寺を造営しており、この場所が国分寺造営の詔にある「人家から適度に離れた好い場所」にあたるのであろう。

平成 14 年度調査では現在の金蔵寺本堂周辺と北側の庭にあたる①・②・③・⑥・⑩ 調査区で国分寺が存在した時期（奈良時代末～平安時代頃）の溝・柱穴・土坑が確認され、国分寺に関わる遺構が残っていることが判明した。このことから石見国分寺跡の中心は現在の金蔵寺本堂周辺と考えられる。①・③・⑩ 調査区では古代瓦片を含む硬質な盛土が確認され、平安時代頃に造成が行われていると考えられる。特に③ 調査区では盛土上面と地山面の上下二面で溝・土坑・柱穴などの遺構が確認され、瓦など遺物も最も多く出土した。⑩ 調査区では古銭が 6 枚セットで出土し、中世にも国分寺跡に建物があったことが伺える。

平成 15 年度調査では⑫ 調査区では古代瓦を含む整地土とその下面で柱穴、⑬ 調査区では時期不明の柱穴群、⑭ 調査区では整地土とその下面の焼土坑を確認した。特に国分寺が存在した時期（奈良時代～平安時代）の可能性が強いものが⑯ 調査区で確認された盛土と柱穴である。盛土に含まれる瓦片は大きく、軒平 11 か 12 類の可能性がある細片が出土している。現在の境内地内でも古代瓦片を含む硬質

な盛土が③・⑩調査区で確認されている。これらは土師器片を含み、平安時代頃の造成と考えられる。

平成16年度調査では、崖面調査区（⑯・⑰）では古代瓦片を少量含む盛土が厚さ1.9~0.6m程度しており、石見国分寺を造る際に西側を大きく盛土し平坦地を造った可能性がある。ただし、盛土上面は西側に傾斜しており、上面は削られていると考えられる。本来の石見国分寺の寺域の西端はさらに西側で、現在の崖面は現市道などにより後世に削られた状態と考えられる。

庫裡跡調査区（⑯）では古代～中世の可能性がある柱穴類を検出したが、国分寺の主要建物に関する遺構は確認されなかった。柱穴類は小規模で儀式に伴う仮設的な建物、建築足場などの可能性があるが性格がはっきりしない。奈良時代の創建期から平安時代（11世紀頃）まで国分寺が存在したと考えられるが、その後の中世の遺構・遺物と国分寺との関係は不明である。

塔跡横や参道横の調査区では黄褐色の硬質な地表面が確認されており、現在の金蔵寺がある平坦地の約3分の1が石見国分寺の存在した頃に盛土によって平坦になったと考えられる。

平成17年度の⑯調査区では表土から古代瓦片が2点出土したのみで、遺構は確認されなかった。これまでの調査区では最も出土遺物が少ない。北側の⑯調査区（平成15年度調査）では古代瓦を多く含む盛土があり、柱穴跡も確認されている。このことから国分寺の中心部の範囲がおよそ想定される。しかし、今回の調査区より南側の崖面にも古代瓦が見られることから遺跡の広がりについて

推定時期	遺構	丸瓦(廃棄時期)			平瓦(廃棄時期)			軒瓦 丸瓦 平瓦	開達道路	下府度寺 国分尼寺
		無段	有段	不明(有段か)	I	II ₁ ・II ₂ ・II ₄	III			
8C中頃 創建	I 塔の跡列 (1・2・3調査区)								01A 01	
8C後半～9C ～9C	II ③曲面下崩土壠 ③北側下崩溝 ⑥須恵器				a (12) c (3) d (2) f (1)	b (3) II ₁ :a (1)			02A 02 03 03 05 04	
9～10C 瓦室 補修	III 古 新 ②整地土 a (1) d (1) d (1)				a (1) b (2)	II ₁ :a (1) b (1) II ₂ g (6) II ₁ f (2)		04 11A 21 12A		
10～11C 一部火災 ?	IV 12溝(誕生仏出土) ③整地土				b (3) d (1)	a (2) c (1) b (1) d (1)				
11～15C	V 古 ③北側上崩溝 ③南側上崩溝				d (1)	a (7) b (4)				
15C～ 金蔵寺 16C～ 建立	新 非銭貨					d (2) II ₁ h (1)				
	非大崩土壠									

*軒瓦は製作想定期、丸・平瓦は廃棄時期以降を示す。括弧内は破片数。

表5 石見国分寺・尼寺の変遷

は今後も注意する必要がある。

第4節 石見国分寺・尼寺の変遷

調査で確認された遺構・遺物による変遷を表5に示した。実年代がわかる遺物が少ないと年代はおおまかな目安である。

Ⅰ期（8世紀中頃）は石見国分寺・尼寺の創建期である。遺構としては国分寺の塔跡の磚列（昭和60年調査）がこの時期であろう。『続日本紀』の天平勝宝8年（756年）に石見国分寺の記載がみえることから、天平13年（741年）の国分寺造営の詔の後から国分寺・尼寺の造営が進んでいたと考えられる。

Ⅱ期（8世紀後半～9世紀）は国分寺では地山面で検出され、大型の瓦片を含む土坑や溝が確認できる。⑥の土坑で確認された完形の須恵器（第25図・84～89）もこの時期である。この土坑は盛土上面から掘り込まれており、この時期には西側の盛土による平坦面はほぼ造られていたのであろう。軒平03類（第15図・59）の顎部分に建物の塗装を行った横方向の朱線が認められることから、建物の補修も行われている。

Ⅲ期（9～10世紀頃）には石見国分寺瓦窯跡が造られ、国分寺のみに瓦が供給されている。国分尼寺ではⅢ期古段階には国分寺あまり出土しない軒瓦（軒丸04類・軒平11類）が見られる。瓦窯跡で焼かれた軒平12A類（第16図・62）の顎部分にも横方向の朱線が認められ、この時期にも国分寺では補修が行われている。これらの瓦（軒丸21、31類・軒平12類）を単なる修理用の差替え瓦ではなく、再建時の主要な瓦とみる説もある（亀田1990）。創建期から続く軒瓦の文様系譜（8葉單弁蓮華文・均整唐草文）もおよそⅡ期で途切れ、Ⅱ期末～Ⅲ期に新たな文様（11葉單弁蓮華文・6葉複弁蓮華文・4葉單弁蓮華文・唐草文・花文）が導入されており、注意しておく必要がある。

Ⅳ期（10～11世紀頃）には瓦生産は認められず、国分寺では赤褐色～灰褐色の土師器細片を含む盛土が確認される。出土する瓦も小片が多量にみられ、整地や造成が行われている。この時期には昭和63年度の第12調査区で真北方向の溝から炭化物と火肌の誕生釈迦仏立像が出土している（浜田市教育委員会1989）。このことから誕生仏が安置されていた建物が火災にあった可能性が考えられている（原1990）。火災の片付けの可能性がある調査区は第12・13調査区のみで、今回の調査区では火災の痕跡は確認されなかった。おそらく国分寺の北東側の一部で火災が起きたのであろう。国分尼寺のT1北側の溝もこの時期にあたり、現段階では最も新しい時期の遺構である。いずれにしろ国分寺・尼寺ともに、ほとんど維持管理されなくなったのであろう。

Ⅴ期（11世紀後半～金蔵寺建立（1665）以前）は、国分寺がほぼ衰退した時期と考えられる。しかし、中世前期の白磁片や水菜通寶（1408年）を上限とする錢貨セットと柱穴、近世初めの肥前系陶器が出土していることから、国分寺衰退後も何らかの建物があったと考えられる。金蔵寺建立前には小さな堂宇と煙になっていたとのことである。Ⅵ期（金蔵寺建立（1665）以後）は、⑦調査区で直径50～60cmの大型の穴が確認され、おそらく金蔵寺にかかる建物の柱穴であろう。境内地北東側（6・①調査区周辺）の高まりもこの時期に盛り上げられたものである。現在の建物周辺の⑤・⑥・⑦・⑧・⑨・⑩・⑪・⑫調査区では金蔵寺建立後の盛土が確認され、近現代の遺物が多く出土する。

今回の4年次にわたる確認調査では石見国分寺・尼寺の主要建物は明らかにできなかったが、今後とも全国の国分寺研究の中に位置づけていくための基礎資料の蓄積が必要である。

参考文献

- 朝枝賛實1919『金成寺由緒記』
- 岩崎仁志2004「佐野焼について—その生産と流通—」『平成16年度山口考古学会総会発表資料』
- 内田律雄1986「石見国分寺瓦について」山本清先生喜寿記念論集『山陰考古学の諸問題』 同記念論集刊行会
- 内田律雄1986「石見国分寺瓦窯跡」『島根県生産遺跡分布調査報告書』島根県教育委員会
- 内田律雄・江川幸子 1997「石見」『新修 国分寺の研究』第7巻 補遺 吉川弘文館
- 大島幾太郎 1970『那賀郡史』 旧那賀郡教育会 P381~382
- 梶原義実2005「国分寺系瓦の広域展開—日本海沿岸地盤を中心に—」『名古屋大学文学部研究論集 史学51』
- 龟田修一1990「瓦から見た国分寺の造営—中国・四国地域—」『考古学ジャーナルNo318』ニューサイエンス社
- 龟田修一1993「朝鮮半島から見た出雲・石見の瓦」『八雲立つ風土記の丘 No118・No119合併号』島根県立八雲立つ風土記の丘
- 朽津信明2005「古代地方寺院の外装塗装の色について」『日本文化財科学会第22回大会 研究発表要旨集』日本文化財科学会
- 桑原船一1986「金成寺境内（石見国分寺址）発掘にたずさわって」『郷土石見』No17 石見郷土研究懇話会
- 江津市教育委員会1993『宮倉遺跡』
- 国府町文化財審議会1963『国府町の文化財』
- 児島俊平1992「馬の骨を探る」『郷土石見』No31 石見郷土研究懇話会
- 近藤喬一1985『瓦から見た平安京』教育社
- 島根県教育委員会1995「久本奥窓跡」「一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 I（鹿伏山・平田浜西・二宮C道路・久本奥窓跡）」
- 鳥根県立博物館1990『鳥根の文化財・仏像彫刻篇』
- 鳥根県立八雲立つ風土記の丘1982『特別展 鳥根の古代』
- 中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 野津左馬之助1925『鳥根縣史』第5巻 島根県内務部
- 浜田市教育委員会1987「石見国分寺跡発掘調査概報」「季刊文化財』第58号 島根県文化財愛護協会
- 浜田市教育委員会1989「石見国分寺跡第1期調査概報」
- 浜田市教育委員会 1993「下府庵寺跡」
- 浜田市教育委員会 1997「横路遺跡（土器上地区）」
- 林健宏2000「古代石見の瓦造り」「八雲立つ風土記の丘 No161」島根県立八雲立つ風土記の丘
- 原裕司1990「石見国分寺と誕生仏」「亀山第17号」浜田市文化財愛護会
- 菱田哲郎2002「考古学からみた古代社会の変容」「日本の時代史5 平安京」吉川弘文館
- 前島己基 1986「山陰における初期造寺活動の一侧面」山本清先生喜寿記念論集『山陰考古学の諸問題』同記念論集刊行会
- 松江市教育委員会2001「出雲国分寺跡発掘調査報告書」
- 三辻利一1995「江津市周辺の窯跡および遺跡出土瓦と須恵器の蛍光X線分析」『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 I（鹿伏山・平田浜西・二宮C道路・久本奥窓跡）』建設省浜田工事事務所・島根県教育委員会
- 森郁夫1974「平城宮式軒瓦と国分寺造営」「古代研究 三』元興寺文化財研究所 のち 森郁夫1991『日本の古代瓦』雄山閣に収録
- 山本清1968「第四節 律令制度の時代」「新修鳥根県史」通史編一 島根県
- 山本清1972「第四章古代（二）奈良・平安時代」「仁摩町誌」仁摩町

擇図 NO	図版 NO	分類	出土地点	広端幅 (cm)	狭端幅 (cm)	玉縁幅 (cm)	頭部長 (cm)	玉縁長 (cm)	長さ (現存長) (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)	端部・側部 調査	備考
第10図	42	有段	国分町国分寺寄贈石見国分尼寺瓦?	16.4	16.5	11.3	30.4	4.2	34.6	2.6	2.98	b	
第10図	41	有段	国分町国分寺寄贈石見国分尼寺瓦?	17.8	17.5	13.5	31.0	5.1	36.1	2.2	3.24	d	
		有段	国分町国分寺寄贈石見国分尼寺瓦?	-	-	11.0	30.8	4.0	34.8	2.3	2.26		
		有段	国分町国分寺寄贈石見国分尼寺瓦?	18.3	15.5	10.8	30.1	5.1	35.2	2.4	3.74		
		有段	国分寺 1 KM - 26トレー 3 - 2	-	15.2	10.4	-	4.5	-	2.2	2.02		
		有段	国分寺 12 - 1	21.1	16.7	12.3	28.0	4.9	32.9	2.8	2.98	b	I期調査報告書 掲載
		有段	国分寺 12 - 2	15.8	14.6	10.6	29.8	4.8	34.6	1.8	2.5	b	"
		無段	国分寺 12 - 3	15.5	11.5	-	-	-	28.9	1.9	1.84	c	"
第17図	67	有段	金蔵寺資料5	-	16.8	-	28.4	3.8	32.2	2.6	3.48	i	
		有段	金蔵寺資料7	-	15.5	11.4	29.4	4.9	34.3	1.8	2.38		
第17図	69	軽丸瓦 有段	金蔵寺資料3 金蔵寺境内	-	15.1	-	29.1	6.2	35.3	2.2	3.26	e	
			平均値	17.48	15.49	10.04	23.11	4.35	33.89	2.25	2.79		

丸 瓦

擇図 NO	図版 NO	分類	出土地点	広端幅 (cm)	狭端幅 (cm)	長さ (現存長) (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)	弧深 (cm)	凹・凸 面調査	端部・側部 調査	備考
第8図	25	I b	国分寺瓦窯跡	25.7	-	37.4	3	3.64	4.8	I	b	
第7図	24	I b	国分寺瓦窯跡	26.7	23.5	38.0	3.6	6.04	3.5	I	b	
第19図	80	I b	国分寺	25.5	24.2	36.0	4.3	4.94	6.1	I	b	側面・広端面に布端の痕跡あり。一枚造り。
第10図	43	I a	国分町国分寺寄贈 国分寺瓦?	25.2	22.8	34.8	2	3.64	4.3	I	a	
		II la	国分寺 13 - 1 1 KM - 1 6 トレー - 1	22.8	-	33.5	2.5	2.26	3.5	II I	a	四凸面に難砂が付着する。一枚造りか。 I期調査報告書掲載
第8図	26	II 4 h	国分寺瓦窯跡天井部上面焼成室	-	22.5	35.0	3.3	4.06	4.4	II 4	h	四面布目痕をナデ消す。
第17図	70	I b	金蔵寺資料10	-	-	37.0	2.0	2.64	6.0	I	b	側面に布端の痕跡あり。一枚造り。
			平均値	25.20	23.25	35.96	2.96	3.89	4.66			

平 瓦
表6 完形瓦計測表